

北海学園大学

人文論集

第 74 号

《退職記念》

寺田吉孝教授

米坂スザンヌ教授

安酸敏眞教授

北海学園大学人文学部

2023 年 3 月

執筆者紹介

小 松 かおり (英米文化学科：教 授)
寺 田 吉 孝 (日本文化学科：教 授)
大 谷 通 順 (日本文化学科：教 授)
米坂 スザンヌ (英米文化学科：教 授)
ブシャー・ジェレミー (英米文化学科：准教授)
田 中 洋 也 (英米文化学科：教 授)
安 酸 敏 眞 (北 海 学 園 大 学 長)
小 柳 敦 史 (英米文化学科：准教授)
佐 藤 貴 史 (英米文化学科：教 授)
鈴 木 英 之 (日本文化学科：教 授)
秋 元 裕 子 (北海学園大学人文学部：非常勤講師)

北海学園大学 人文論集 第74号

2023(令和 5)年 3 月 31 日

編 集 大 谷 通 順 (日本文化学科)
柴 田 崇 (英米文化学科)

発 行 者 小 松 かおり

発 行 所 北海学園大学人文学部
〒062-8605 札幌市豊平区旭町 4 丁目 1 番 40 号
電話(011)841-1161

印 刷・製 本 (株)アイワード
札幌市中央区北 3 条東 5 丁目

HOKKAI-GAKUEN UNIVERSITY

STUDIES IN CULTURE

《Commemorative Issue》

No. 74

March 2023

CONTENTS

Farewell Address	Kaori KOMATSU	1
Brief Personal History, Academic Works and Address	Yoshitaka TERADA	11
For Prof. TERADA	Michiyori OTANI	25
Brief Personal History, Academic Works and Address	Suzanne YONESAKA	31
To Suzanne Yonesaka, with Gratitude and Admiration	Jeremie BOUCHARD	
	Hiroya TANAKA	43
Brief Personal History, Academic Works and Address	Toshimasa YASUKATA	49
For Prof. YASUKATA	Atsushi KOYANAGI	89
<i>Geschichtsschreibung and Kirchengeschichte</i> in Nineteenth-Century Protestant Theology. An Essay on Ferdinand Christian Baur.	Takashi SATO	97
Einleitung: Der Vielspältige (in: Friedrich Wilhelm Graf, <i>Ernst Troeltsch. Theologe im Welthorizont. Eine Biographie</i>)	Atsushi KOYANAGI	125
Shüzō TAKIGUCHI's Décalcomanie Works:		
Dialogues with the Arrogant Being that Appears Suddenly.	Yuko AKIMOTO	172(㊦)
The Establishment and Development of Esoteric Buddhism Myths: Concerning the “Hoken-Zu-Kikigaki” in Shinpuku-ji Collection	Hideyuki SUZUKI	186(—)

FACULTY OF HUMANITIES
HOKKAI-GAKUEN UNIVERSITY
Sapporo Hokkaido Japan

北海学園大学

人文論集

《退職記念》

第 74 号

2023 年 3 月

目 次

ご退職記念号に寄せて……………	小松かおり	1
退職に際して……………	寺田 吉孝	11
さらば同志よ！ До свидания, товарищ！……………	大谷 通順	25
「退職について」感謝の気持ち……………	米坂スザンヌ	31
To Suzanne Yonesaka, with Gratitude and Admiration ……………	Jeremie BOUCHARD Hiroya TANAKA	43
退職にあたって……………	安酸 敏真	49
送る言葉……………	小柳 敦史	89
19 世紀プロテスタント神学における歴史叙述と教会史 —— フェルディナント・クリスティアン・バウル試論 —— ……………	佐藤 貴史	97
〈翻訳〉F・W・グラーフ「序章 多くの分裂を孕んだ人物」 （『エルンスト・トレルチ 世界地平の中の神学者 一つの伝記』より）……………	（訳）小柳 敦史	125
瀧口修造のデカルコマニー —— 〈傲然たる闖入者〉との対話 —— ……	秋元 裕子	172(Ⅱ)
密教神話の成立と展開 —— 真福寺蔵『法釵図聞書』をめぐる —— ……	鈴木 英之	186(一)

題字揮毫：島田無響氏

ご退職記念号に寄せて

人文学部長 小 松 かおり

本学人文学部英米文化学科の米坂スザンヌ先生と安酸敏眞先生，日本文化学科の寺田吉孝先生は，2023 年 3 月 31 日をもって長く教鞭を執られてきた北海学園大学を定年退職されます。ここに，3 人の先生方の本学・本学部への多大なご貢献に感謝の意を表し，送別の辞を述べさせていただきます。また，慣例に従い，本学への着任順にご紹介させていただきます。

米坂スザンヌ先生は，1983 年 8 月にサンフランシスコ州立大学大学院で，英語学の修士号を取得され，札幌大学女子短期大学部勤務を経て，1992 年 4 月に北海学園大学教養部に助教授として着任されました。1993 年には，人文学部が創設されると同時に英米文化学科助教授に着任され，2002 年からは教授として，さらに 2005 年より文学研究科の教授としても教鞭を執られました。

米坂先生の研究分野は外国語としての英語教育であり，そのテーマは，「留学による学習効果」，「英語学習ニーズ分析」，「EFL 教育における異文化・多文化主義」，「指導法と教員の信条」，「学習者の観念」，「発音指導法」など多岐に及び，本学に着任前から現在まで休むことなく，学会の研究大会で，また論文として，英語教育に関する発表を続けてこられました。

米坂先生の研究は，人文学部創設以降の英語教育の基礎となりました。英語音声学，英語学概論Ⅱ（応用言語学），大学院では修士課程英語学研究特殊講義・演習などの科目を担当され，先の研究を十分に活かした応用言語学の講義・演習を展開する一方，数度にわたる学部専門科目英語教育プログラムの策定に関われ，中核メンバーとして運営を担われました。近年では，英語音声学の授業で展開している発音指導で研究を重ねられ，本

学の語学教育用学習管理システム（Glexa）において独自の拡張機能（P-Check）を開発し、学生が相互の発音を評価することで協働的に学習できる環境を実現されました。また、人文学基礎演習、人文学演習、人文学専門演習と卒業研究まで、学部の一連のコア科目を担当され、人文学の教育に貢献されました。

また、米坂先生は、本学の提携校であるカナダ、レスブリッジ大学、ブロック大学における留学・語学研修プログラムの中核を担われ、レスブリッジ大学専門委員会委員、学部内ブロック・レスブリッジ大学委員会委員として、また、ときには役職を超えて、提携校担当者との連絡、調整、派遣学生の指導に献身的に携わり、多くの学生のカナダ留学実現に貢献されました。

大学運営では、教務委員や情報関係の多くの委員を務められたほか、特に、語学教育・国際交流関係においては、学内・部内の複数の委員を継続して務められ、人文学部の語学教育の地道なインフラを担われました。さらに、長きにわたり英語の入試出題委員を務められ、本学独自のリスニング問題の作問を中心的に担われるなど、本学における入試出題業務への功績も特筆すべきものがあります。

学外におかれても、北海道教育委員会新教育計画検討会議委員（1996-1998年）、北海道英語教育推進会議委員（2013-2014年）、北海道インターナショナルスクールの評議委員、理事会監査（2004-2013年）を務められ、本学のみならず北海道の英語教育と国際教育の発展に貢献されました。

米坂先生が赴任されて1年後、人文学部が設置されたのですが、その際、アメリカ、イギリス、カナダなどから招かれた8人の英語母語話者の先生方がいわゆる「准専任」として着任されました。米坂先生は、ご自分の授業を担当される一方、准専任の先生方と協力しながら学部の英語教育を運用するという難しい舵取り役を担われることになりました。また、大学が借り上げた建物で暮らすこれらの先生方の暮らしのサポートも一手に引き受けられたとうかがっており、小さなお子さんを育てられる中で、公私の別のない怒濤のような日々であったと想像します。そのような中でも、米

坂先生は、本学部のさまざまな学生に必要な英語教育とは何かを個別に考え、実践してくださいました。これまで先生の指導を受けた卒業生は、北海道をはじめ各地で中学校・高等学校教員、大学教員として活躍しています。英語の学びを求める学生にとことんつきあわれた先生の献身は、本学部の卒業生のみならず、彼らが教員として関わる多くの生徒たちにも、多くの実りを与えることでしょう。

寺田先生は、1980年3月に大阪外国語大学大学院外国語学研究科ロシア語学専攻修士課程を修了され、大阪繊維学園向陽台高等学校、津田学園津田中高等学校で教鞭を執られたのち、1992年4月に本学教養部の講師として着任されました。1996年に助教授となられ、1998年からは大学の改組によって共通教育・研究センター教育研究部に所属されたのち、2001年から経済学部教授、2004年から経営学部教授を経て、2008年からは、わが人文学部の教授として、また、2017年からは文学研究科においても、教鞭を執られました。

寺田先生のご研究は、1982年に発表された「18世紀末から19世紀初に至る期間のロシア標準語における語彙構成の変化」以降、ロシア語とロシア語教育、ロシア文化に関する幅広い分野を網羅されています。また、1997年から2019年までかけて19世紀のロシア人軍医ドブロトヴォールスキイによって収集された樺太アイヌの語彙や文化が記された『アイヌ語・ロシア語辞典』を共訳され、その成果が2022年11月に千ページを超える『ドブロトヴォールスキイのアイヌ語・ロシア語辞典』として共同文化社から出版されたところです。この辞典は、19世紀半ばの樺太アイヌのことばと文化を知る貴重な文献であり、今後のアイヌ文化研究に大きく貢献することが期待されます。また、ウクライナ語についても論文を執筆されるなど、幅広い分野の研究を発表されました。

教育分野では、北海学園大学で唯一の専任ロシア語教員として着任されて以降、一般教育科目のロシア語とロシア文化の多くの科目を担当され、教科書も複数執筆されました。また、ロシア語母語話者である非常勤の先

生方と協力して一般教育のロシア語全体をコーディネートされてきました。人文学部に所属なさってからは、それらの科目に加えて、1年生向けの人文学基礎演習、2年生向けの人文学演習、大学院の比較言語研究特殊講義を担当され、人文学・教養教育に大きく貢献されました。

大学運営では、人文学部教員として教務委員、入試委員などの多忙な業務を分担される一方、一貫してロシアとの交流事業の責任者としての役割を果たしてこられました。本学に着任して間もない1994年よりヴラヂーミル大学での語学研修(4~5週間)を企画され、学生を自ら引率して計14回、延べ134名にのぼる学生を引率されました。参加学生からは、ロシアに関係する仕事に就く者も多数輩出しています。加えて、交流協定のあるシベリア交通大学、サハリン大学、ノボシビルスク総合大学、ヴラヂーミル大学の4校から、例年合計9名程度の学生を約90日間受け入れるにあたり、2011年より世話役として中心的な役割を担われ、双方向の交流を支えてこられました。

学外では、日本ロシア文学会では理事(2015~19年)および北海道支部長(2017~19年)に加え、現在も札幌青少年国際交流協会では幹事を務めておられます。さらには、ウクライナ赤十字社ハルキウ州支部機関誌『Червоним по білому』編集委員を務めておられます。

寺田先生は、ソ連崩壊前後から、ロシアとウクライナに何度も滞在されていらっしゃいます。特に、ウクライナ東部のハリコフにはご縁が深く、親しい方も多いとかがっています。2022年2月24日以来のロシアのウクライナ侵攻後の寺田先生は、ロシアに対して、また、状況を解説する報道に関して、怒りを表されることがありました。ロシアとウクライナの歴史を熟知しておられる寺田先生にとって、日本で報道されるニュースの表面的な解説にはとうてい納得できなかったことと拝察します。寺田先生のご退職を控えた2023年1月21日には、寺田先生がコーディネートされた第10回人文学会「言語と文化からウクライナを理解する」が開催されました。寺田先生がウクライナ史とウクライナ語を概説してくださるとともに、ウクライナ出身で日本在住の研究者の方のウクライナの教会建築のご

発表、現在も爆撃を受け続けているハリコフ在住の旧知の研究者の方から送られてきたウクライナの言語使用状況とエスニック・アイデンティティに関する論考の代読など、学びの多い研究会となりました。このような学びの場を提供していただいたことを、深く感謝いたします。

安酸敏眞先生は、1980年3月に京都大学大学院文学研究科宗教学専攻で博士課程を単位取得満期退学されたあと、アメリカのヴァンダービルト大学大学院博士課程宗教学専攻に入学され、西ドイツのゲッティンゲン大学神学部への留学を経て、1985年にヴァンダービルト大学大学院博士課程を修了と同時に Ph.D. を授与されました。その後、1987年10月から盛岡大学文学部助教授、1993年から聖学院大学人文学部の助教授、1996年から同教授を経て、2004年に北海学園大学人文学部に着任されました。1997年には、京都大学から二つ目の博士号（文学）を授与されています。

本学に着任後は、みなさまご存じのとおり、2010年から3年間の人文学部長、2014年から3年間の図書館長、2017年から6年間の北海学園大学学長を務められ、2021年6月からは学長とともに学校法人北海学園理事長を兼任されています。

安酸先生のご研究は、キリスト教学を中心に西洋思想史全般にわたります。トレルチ『信仰論』、バーク『解釈学と批判』、シュライアマハー『キリスト教信仰』といった古典の著作を翻訳されたご業績に加え、ご自身のご著書が国際的に高い評価を受けていらっしゃいます。1987年にオックスフォード大学出版から American Academy of Religion アカデミー・シリーズの1冊として出版された “Ernst Troeltsch: Systematic Theologian of Radical Historicity” と、1998年に創文社から出版された『レッシングとドイツ啓蒙——レッシング宗教哲学の研究——』が、最もよく知られたご業績です。前者は、1987年日本宗教学会賞を受賞され、後者は、これを元に、2002年に American Academy of Religion の Reflection and Theory in the Study of Religion Series の1冊として “Lessing’s Philosophy of Religion and the German Enlightenment: Lessing on Christianity and

Reason”がオックスフォード大学出版から出版され、世界的な名声を獲得されました。

人文学部・人文学研究科の教育としては、本学部の基幹科目である「人文学概論」を担当され、現在も教科書としてすべての人文学部生がテキストとする『人文学概論』を執筆されるとともに、文学研究科はじめての課程博士号取得者を指導されるなど、基礎教育から博士課程教育にいたるまで、人文学部・文学研究科の教育の根幹を担われました。また、演習科目では、英語やドイツ語など、「原書を読む」ことを重視され、学生の学力の基礎をとことん鍛えられたとうかがっています。

安酸先生の本学への貢献として特筆すべきは、やはり、人文学部長、図書館長、学長としてのご功績です。人文学部長としては、2014年度カリキュラムの改訂において、人文学部の開設以来の理念である「新人文学」「新人文主義」を検証し、カリキュラム改訂の理念を作られました。この理念は、現在も人文学部の基礎であり続け、現在検討中の新カリキュラムもその理念を踏襲しています。図書館長時代には、収蔵庫を圧迫していた図書の除籍に道筋をつけられ、図書館の機能性を高められました。

学長としてのお仕事は、とてもすべてを網羅することはできませんが、まず、大学のありようを表明する「ミッション・ビジョン」を策定し、本学の向かう方向性を定められたことが挙げられます。また、学長ガバナンスを支えるために設置された、学長を補佐する副学長と学長室は、学長の機動力を上げる大きな変革でした。

安酸先生の学長任期後半は、2020年はじめから世界で猛威を振るった新型コロナウイルスによって、大学機能が麻痺しかねない難しい時期が続きましたが、安酸先生は、コロナ禍で困窮する学生たちへの奨学金を拡充するために、教育振興基金への寄付を広く大学ウェブサイトと呼びかけることを決断され、その結果、個人だけでなく地元企業からも多くの寄付が集まりました。また、レスブリッジ大学とのダブル・ディグリープログラムの協定を締結されるなど、学生の学びの場を拡げられました。

われわれ教員にとっては、この数年間で、学内研究費の使い勝手が格段

により、科研費への再応募のための助成金が新設され、在外研修制度と国内研修制度が整備されるなど、研究環境が整備されたことに大変感謝しています。

わたしが学部長として安酸先生のお仕事を間近で拝見したのは最後の1年でした。その中で、最も印象に残っていることのひとつは、ロシアのウクライナ侵攻後、ウクライナの大学生を本学へ留学させるために安酸先生が奔走されたことです。さまざまな事情でかないませんでした。安酸先生の情熱と大学というものがどうあるべきかという理念の強さを感じたできごとでした。

米坂スザンヌ先生と寺田吉孝先生には、本学における多大な貢献に鑑みて、2023年4月1日付けで、北海学園大学の名誉教授の称号が授与されます。また、学長でいらっしゃる安酸敏眞先生は、ご自分の名前で名誉教授号を授与することができないため、ご退職後にこの手続きが進められることと思います。

人文学部英米文化学科の柱である英語教育を作り上げてくださった米坂先生と、本学唯一のロシア語専任教員として長くロシア語教育を支えてくださった寺田先生、学部長として、また学長として大学を支えてくださった安酸先生という3人の先生方が同時に退職されることは、人文学部の教育にとって大変心細いことですが、残されるわたしたちは、次世代を託される者として、後任の先生方を支え、先生方が守ってくださった英語とロシア語の教育を守り、また、新人文学を発展させるため、力を尽くす所存です。先生方の本学での最後の3年間はコロナ禍で、懇親会などの機会にゆっくりと、研究のお話や、お忙しい中で研究や教育、そして日々の暮らしを大切に暮らされる秘訣をお聴きできなかったのが残念です。これからも、本学部の催しに是非顔を出していただき、そんなお話を聞かせていただけると嬉しいです。先生方の今後のますますのご活躍とご健勝を祈念して、献辞に代えさせていただきます。



寺田吉孝教授

退職に際して

寺 田 吉 孝

1. 着任前，着任の頃

着任の前々年，モスクワに留学していた。留学の前後の期間には，履歴書に記載した職歴以外にも，大学非常勤講師（中京大学，大阪外国語大学，日本福祉大学，中部大学），予備校講師（河合塾，代ゼミなど），予備校経営，高校非常勤講師（大阪電気通信高校，花園高校），看護専門学校講師などの職を経験していた。北海学園大学の応募書類の「長所」の欄に「生徒，学生の面倒見が良い」と書いた記憶がある。

着任前は神戸に住んでいた。5歳の娘に北海道へ引っ越しすることを告げると，「ホッカイドーってハローと言うの」という答えが返ってきた。その娘も36歳になり，2歳の娘の母親である。時がたつのは早いものである。

2. 教養部から人文学部へ

1992年に，北海学園大学教養部に着任した。教養部は大学全体の教養教育を担当していた。担当するロシア語は，第2外国語系列の科目だった。当時，第2外国語系列に所属していたドイツ語，フランス語，中国語，ロシア語の担当者全員が同じ教授会メンバーだったので，意思疎通が円滑だった。しかし，1998年3月末をもって，教養部が解体され，教養部教員は各学部へ分属した。

教養部解体後，共通教育研究センター，経済学部，経営学部を経て，2008年に人文学部所属となった。人文学部所属と言っても，全学のロシア語科目を担当するだけで手いっぱいだったので，人文学部の教育にはほとんど携わっていない。しかし，教養ゼミや人文学演習で，中欧，東欧や旧ソ連

圏を話題にすることもあった。西欧にしか興味のない学生たちがほとんどだったが、「西欧の東」にも興味をもってもらうように指導したつもりである。論文や翻訳等の投稿も『学園論集』が主だったので、『人文論集』に書かせていただいたのは、この「退職の挨拶」が最初で最後である。人文学部への貢献が乏しかったことを申し訳なく思っている。

3. ヴラヂーミル大学との交流

北海学園大学に着任後すぐのロシア語の授業で、「ロシアへ行きたい」という声が上がった。当時、本学にはロシアに協定校がなかった。そこで、自前で留学先を確保し、学生たちをロシアへ連れて行くことにした。

友人のユーリイさん（ユーリイ・アレクサンドロヴィチ・シェルバコフ；当時ヴラヂーミル大学上級講師）が勤める国立ヴラヂーミル大学が留学の受け入れを許可してくれた。第1回のヴラヂーミル大学夏期研修は1994年に行われた。14名の参加者が集まった。

1994年夏のロシアは、ソ連崩壊後2年半しか経っていなかったもので、混乱が続いていた。血を流して道で倒れている人、物乞いする老人、金品をねだる浮浪児、火を噴くバス、ころがる動物の遺体など、日本ではちょっと見られない光景があった。また、大学の学生寮でも、停電、断水、雨漏り、ゴキブリの異常発生などがあった。自分一人であれば、適当にやり過ごすようなことでも、学生たちを連れているとそうはいかない。危機脱出のための交渉の連続だった。予期せぬロシア語の訓練だった。

帰国後、夏期研修に参加した学生たちがロシア研究愛好会というサークルを組織した。現在、ロシア研究同好会と改称されているが、活動は続いている。ヴラヂーミル大学での研修は、コロナ禍の前年の2019年までの26年間に17回（夏14回、春3回）実施されている。

2015年以降の研修の際には、派遣学生たちとともに日本文化フェスティバル（お茶、お花、生け花、日本食、玩具、着物の着付けなどの紹介イベント）を開催した。当日は、地元のテレビ局や新聞社の取材を受けた。

4. ロシア語教育

教養部解体以降、本学のロシア語教育は大きく変わった。教養部時代は、1年次のロシア語科目が週2回の選択必修だった。2年次は週2回の自由選択だった。教養部解体後、ロシア語科目は、1年次から4年次までの授業が開講されることになり、科目数が格段に増加した（ロシア語基礎Ⅰ～Ⅳ、ロシア語会話Ⅰ～Ⅳ、ロシア語文化Ⅰ～Ⅲ、ロシア語文化演習Ⅰ・Ⅱ、ロシア語言語演習Ⅰ・Ⅱ、ロシア語言語文化演習Ⅰ・Ⅱ）。しかし、ロシア語科目は、ほぼすべての学部学科で自由選択となった。選択必修のころとは異なり、困難なことが多かった。

- ・豊平校舎の1年次後期、2年次学生には、週3回のロシア語科目が開講されるが、時間割上、学部の専門科目と重なることもあったので、実際には、週1回、週2回しか受講できない学生が大半だった。
- ・選択必修の頃の週2回用の教科書は使用することができなくなった。基礎・会話・文化で異なる週1回用の教科書を作成する必要が生まれた。
- ・週1回受講・週2回受講・週3回受講の学生が同一クラスに混在することになったので、授業の進め方にも再検討が求められた。一つの解決策として、自宅での予習・復習のために、『ロシア語文法ハンドブック』を作成した。これは、授業での板書時間削減にも貢献した。

5. 教科書

1998年の新カリキュラム移行後、20冊以上の教科書を作成した。その一部は、業績一覧にある。現在も2冊の教科書を作成中である。1冊は、北海学園大学のロシア語基礎Ⅰ・Ⅱと札幌大学の基盤ロシア語Ⅰ・Ⅱで使用する教科書である（北海学園大学のロシア語基礎科目担当者と札幌大学の基盤ロシア語担当者との共著）。2022年4月から手作りの私家版を試用してきた。2023年3月に試行本を発行する予定である。もう1冊は、北海学園大学のロシア語会話Ⅰ・Ⅱと札幌大学の基盤ロシア語Ⅰ・Ⅱで使用する教科書である（ヴラーソワ氏とサヴィヌィフ氏との共著）。2023年3月に試行本を発行する予定である。

6. 『ドブロトヴォールスキのアイヌ語・ロシア語辞典（1875年）』

2022年11月に『ドブロトヴォールスキのアイヌ語・ロシア語辞典（1875年）』の翻訳本を安田節彦氏との共著として発行した。本書は、著者のM. M. ドブロトヴォールスキの死後、兄のI. M. ドブロトヴォールスキ（カザン大学教授）が弟の遺稿を編集して発行したものである。着任後ほどなく、教養部教授の藤村久和氏から本書の翻訳の依頼があった。簡単に終えることができると思ったので、翻訳を引き受けてしまった。だが、かなり大変な書物であった。本書の翻訳に関しては、紆余曲折があった。1995年の翻訳開始後、2度の長い中断があり、翻訳本発行までに27年も要してしまった。

7. 在外研修など

北海学園大学着任後、在外研修（校費、私費）を数回実施させていただいた。

- ・1999年9月～12月（3か月）ウクライナ、ハリコフ電子通信大学
- ・2004年9月～10月、2005年5～9月（6か月）ロシア、ヴラヂーミル大学
- ・2004年10月～2005年2月（3か月）ブルガリア、ソフィア大学
- ・2005年2月～5月（3か月）ウクライナ、ハリコフ電子通信大学
- ・2010年4月～9月（6か月）ウクライナ、ハリコフ電子通信大学
- ・2016年4月～7月（3か月）ロシア、ヴラヂーミル大学

8. 研究

北海学園大学着任後、業績一覧にあるように、ロシア語語形成論、ロシア語語彙論、ロシア語地名学、ウクライナ語史などに関する論文を発表している。

現在、研究を継続していきたいと思っているのは、ウクライナ語とロシア語の語形成の比較研究、D. I. バハリイやM. F. スムツォフのスロボジャンシナ研究の翻訳紹介である。

9. その他

2014年のソチオリンピック期間中に起こった親米派によるウクライナ・クーデター。クーデターに成功した新政権側と東ウクライナのドンバス地域に立てこもった旧政権側。明治維新の時の函館に似ているようであるが、国外からの支援（あるいは圧力）があるのが大きく異なる点である。

旧政権側を支援する「ロシア」と「新政権とそれを支援する欧米（+日本）」との戦いが2022年に本格化してしまった。ウクライナの一般の人達からの情報によると、ウクライナの国民の多くはクーデターを望んでいなかったという。現在、そのような多くのウクライナ国民が生命の危機に瀕している。殺人者は間違いなく罰せられるべきである。しかし、殺人に導いていった者も何らかの罰を受けるべきであると考ええる。

ロシア国民の多くは、ウクライナに親戚（親や兄弟も含めて）が暮らしている。当然ながら、ウクライナ国民の多くは、ロシアに親戚（親や兄弟も含めて）が暮らしている。その人たちの心配、悲しみは計り知れない。ある意味、ウクライナとロシアは一体である。

ロシア軍の攻撃にさらされているハリコフには多くの知り合いがいるが、皆厳しい生活を送っておられる。国外（オーストリア、フランス、ルクセンブルグなど）に避難した方々、国内の比較的安全な所（スームィ、ハリコフ州南部など）に避難した方々、ハリコフに残っている方々、消息不明の方々。ハリコフに残っている方々の内の一人、ハリコフ大学元准教授 L. B. ベイさんは、ミサイルや砲弾が飛び交うハリコフ市北部で暮らしておられる。テレビや新聞では知ることができないウクライナ市民の生の声を定期的に聞かせてくださっている。一日も早い戦争終結を祈るばかりである。

略 歴

てら だよしたか
寺田吉孝 1954 年 7 月 23 日生まれ

学 歴

- 1978 年 3 月 大阪外国語大学外国語学部ロシア語学科卒業
1980 年 3 月 大阪外国語大学大学院外国語学研究科ロシア語学専攻修士
課程修了（文学修士）

職 歴

- 1981 年 4 月 大阪繊維学園向陽台高等学校教諭（1983 年 3 月まで）
1986 年 4 月 津田学園津田中高等学校教諭（1987 年 2 月まで）
1992 年 4 月 北海学園北海学園大学教養部講師
1996 年 4 月 北海学園北海学園大学教養部助教授
1998 年 4 月 北海学園北海学園大学共通教育・研究センター教育研究部
助教授
2001 年 4 月 北海学園北海学園大学経済学部教授
2004 年 4 月 北海学園北海学園大学経営学部教授
2008 年 4 月 北海学園北海学園大学人文学部教授

学 内 委 員

ロシア協定校専門委員，教務委員，入試委員，キャリア支援委員，学生委員，開発研究所運営委員，在外研修委員など

所属学会等

日本ロシア文学会
JACTFL（日本外国語教育推進機構）会員

NPO 法人札幌青少年国際交流協会幹事

ウクライナ赤十字社ハルキウ州支部機関誌『Червоним по білому』編集委員

学会役員

日本ロシア文学会理事（2015 年～2019 年）

日本ロシア文学会北海道支部長（2017 年～2019 年）

客員教授

レスブリッジ大学（2006 年 9 月～12 月）

主な研究業績

著書

1. 『初級者のためのロシア語文法便覧』，平成 13 年 3 月，共同文化社
2. 共著『ドイツ，フランス，中国，ロシアとその周辺地域の言語と文化』，平成 16 年 3 月，共同文化社
3. 『入門者および初級者のためのロシア語文法ハンドブック』，平成 16 年 9 月，アーバンプロ出版センター
4. 『入門者および初級者のためのロシア語文法ハンドブック 改訂版』，平成 20 年 4 月，アーバンプロ出版センター
5. 共著『ドイツ，フランス，中国，ロシア，韓国・朝鮮とその周辺地域の言語と文化』，平成 21 年 3 月，共同文化社
6. 共著『ドイツ，フランス，中国，ロシア，韓国・朝鮮とその周辺地域の言語と文化 改訂版』，平成 25 年 4 月，共同文化社
7. 『入門者および初級者のためのロシア語文法ハンドブック 三訂版』，平成 24 年 10 月，アーバンプロ出版センター
8. 『入門者および初級者のためのロシア語文法ハンドブック 四訂

版』，令和 2 年 5 月，アーバンプロ出版センター

9. 共訳著『ドブロトヴォールスキイのアイヌ語ロシア語辞典』，令和 4 年 11 月，共同文化社

翻訳

1. 「異文化間コミュニケーションにおける民族的特徴について」，平成 5 年 3 月，北海学園大学学術研究会『学園論集』，第 75 号
2. 「アイヌ語・ロシア語辞典（1）」，平成 7 年 6 月，北海学園大学学術研究会『学園論集』，第 84 号
3. 「アイヌ語・ロシア語辞典（2）」，平成 7 年 9 月，北海学園大学学術研究会『学園論集』，第 85 号
4. 「アイヌ語・ロシア語辞典（3）」，平成 8 年 3 月，北海学園大学学術研究会『学園論集』，第 86・87 号
5. 「アイヌ語・ロシア語辞典（4）」，平成 8 年 12 月，北海学園大学学術研究会『学園論集』，第 90 号
6. 「アイヌ語・ロシア語辞典（5）」，平成 9 年 4 月，北海学園大学学術研究会『学園論集』，第 91 号
7. 共訳「アイヌ語・ロシア語辞典（6）」，平成 21 年 12 月，北海学園大学学術研究会『学園論集』，第 142 号
8. 共訳「アイヌ語・ロシア語辞典（7）」，平成 22 年 3 月，北海学園大学学術研究会『学園論集』，第 143 号
9. 共訳「アイヌ語・ロシア語辞典（8）」，平成 23 年 3 月，北海学園大学学術研究会『学園論集』，第 147 号
10. 共訳「アイヌ語・ロシア語辞典（9）」，平成 23 年 6 月，北海学園大学学術研究会『学園論集』，第 148 号
11. 共訳「アイヌ語・ロシア語辞典（10）」，平成 23 年 9 月，北海学園大学学術研究会『学園論集』，第 149 号
12. 共訳「アイヌ語・ロシア語辞典（11）」，平成 23 年 12 月，北海学園大学学術研究会『学園論集』，第 150 号

13. 共訳「アイヌ語・ロシア語辞典 (12)」, 平成 25 年 3 月, 北海学園大学学術研究会『学園論集』, 第 155 号
14. 共訳「アイヌ語・ロシア語辞典 (13)」, 平成 25 年 6 月, 北海学園大学学術研究会『学園論集』, 第 156 号
15. 共訳「アイヌ語・ロシア語辞典 (14)」, 平成 25 年 9 月, 北海学園大学学術研究会『学園論集』, 第 157 号
16. 共訳「アイヌ語・ロシア語辞典 (15)」, 平成 25 年 12 月, 北海学園大学学術研究会『学園論集』, 第 158 号
17. 共訳「アイヌ語・ロシア語辞典 (16)」, 平成 26 年 3 月, 北海学園大学学術研究会『学園論集』, 第 159 号
18. 共訳「アイヌ語・ロシア語辞典 (17)」, 平成 26 年 6 月, 北海学園大学学術研究会『学園論集』, 第 160 号
19. 共訳「アイヌ語・ロシア語辞典 (18)」, 平成 28 年 3 月, 北海学園大学学術研究会『学園論集』, 第 167 号
20. 共訳「アイヌ語・ロシア語辞典 (19)」, 平成 28 年 9 月, 北海学園大学学術研究会『学園論集』, 第 169 号
21. 共訳「アイヌ語・ロシア語辞典 (20)」, 平成 28 年 12 月, 北海学園大学学術研究会『学園論集』, 第 170 号
22. 共訳「アイヌ語・ロシア語辞典 (21)」, 平成 29 年 3 月, 北海学園大学学術研究会『学園論集』, 第 171 号
23. 共訳「アイヌ語・ロシア語辞典 (22)」, 平成 29 年 12 月, 北海学園大学学術研究会『学園論集』, 第 173・174 号
24. 共訳「アイヌ語・ロシア語辞典 (23)」, 平成 30 年 3 月, 北海学園大学学術研究会『学園論集』, 第 175 号
25. 共訳「アイヌ語・ロシア語辞典 (24)」, 平成 30 年 7 月, 北海学園大学学術研究会『学園論集』, 第 176 号
26. 共訳「アイヌ語・ロシア語辞典 (25)」, 平成 30 年 11 月, 北海学園大学学術研究会『学園論集』, 第 177 号
27. 共訳「アイヌ語・ロシア語辞典 (26)」, 平成 31 年 3 月, 北海学園大

論文

1. 「18 世紀末から 19 世紀初に至る期間のロシア標準語における語彙構成の変化」，昭和 57 年 12 月，大阪外国語大学修士会『外国語・外国文学研究』，6 号
2. 「現代ロシア語の-ниеで終わる名詞について」，昭和 59 年 12 月，中京大学学術研究会『中京大学教養論叢』，第 25 卷，第 3 号
3. 「現代ロシア語の語形成論について」，昭和 61 年 3 月，中京大学学術研究会『中京大学教養論叢』，第 26 卷，第 4 号
4. 「ロシア語におけるперфективацияによる体のペアの形成について」，平成元年 3 月，中京大学学術研究会『中京大学教養論叢』，第 29 卷，第 4 号
5. 「ロシア語におけるимперфективацияによる体のペアの形成について」，平成 4 年 9 月，北海学園大学学術研究会『学園論集』，第 73 号
6. 「ロシア語初級文法書作成のための基礎資料」，平成 8 年 6 月，北海学園大学学術研究会『学園論集』，第 88 号
7. 共著「相互理解を妨げるものは何か？ ―ロシア人とのコミュニケーションにおけるいくつかのルールについて―」，平成 11 年 9 月，北海学園大学学術研究会『学園論集』，第 101 号
8. 共著「ウクライナ語の源泉と特徴について」，平成 12 年 7 月，北海学園大学学術研究会『学園論集』，第 104 号
9. 共著「ロシアの昔話の世界」，平成 13 年 7 月，北海学園大学学術研究会『学園論集』，第 108 号
10. 「ロシア語の動詞派生名詞について（1）」，平成 14 年 3 月，北海学園大学学術研究会『学園論集』，第 111 号
11. 「ロシア語の基礎語彙について（1）」，平成 14 年 5 月，北海学園大学学術研究会『学園論集』，第 112 号
12. 共著 Роль языка и культуры в процессе развития и духовного

- обогащения индивида, 平成 15 年 6 月, 北海学園大学学術研究会『学園論集』, 第 116 号
13. 共著 Роль художественной иллюстрации при изучении русской сказки в иностранной аудитории, 平成 15 年 6 月, 北海学園大学学術研究会『学園論集』, 第 116 号
14. 共著 К вопросу преподавания русского языка японским студентам, 平成 17 年 3 月, 北海学園大学学術研究会『学園論集』, 第 123 号
15. 共著 Грамматические ошибки в русской речи японских студентов как результат взаимодействия двух языковых систем, 平成 19 年 3 月, 北海学園大学学術研究会『学園論集』, 第 131 号
16. Учебник для чтения с лингвострановедческим словарём, 平成 19 年 9 月, Мир русского слова и русское слово в мире, 第 2 卷, HERON PRESS, Bulgaria
17. 共著「ロシアの地名について（１）—ヴラヂーミル市のゴドニーミヤの形成過程に関する問題—」, 平成 20 年 9 月, 北海学園大学開発研究所『開発論集』, 第 82 号
18. Преподавание иностранных языков в университетах Японии, 平成 23 年 1 月, Новий Колегіум 2011 ①, Харківський національний університет радіоелектроніки
19. 「ロシア語の基礎語彙について（２）」, 平成 23 年 6 月, 北海学園大学学術研究会『学園論集』, 第 148 号
20. 共著「ウクライナ語正書法史」, 平成 23 年 9 月, 北海学園大学学術研究会『学園論集』, 第 149 号, 北海学園大学学術研究会
21. 「ロシアの地名について（２）—ヴラヂーミル州の河川名の起源—」, 平成 25 年 3 月, 北海学園大学開発研究所『開発論集』, 第 91 号
22. О названиях рек во Владимирской области, 平成 25 年 5 月, Лексикография. Язык. Речь., Сборник статей памяти Анны Липовской, София大学出版局, София

口頭発表

1. 「第2外国語としてのロシア語の教育について」, 平成10年7月, 日本ロシア文学会北海道支部, 北海道大学
2. 「初歩のロシア語教育について」, 平成10年10月, 日本ロシア文学会全国大会, 埼玉大学
3. Как и Что Изучать о России?, 平成15年6月, 日露国際シンポジウム, 北海学園大学
4. Об обучении Японских Студентов Русскому и Украинскому Языками, 平成17年5月, ハリコフ州諸大学ロシア語教員連絡会議, ハリコフ電子通信大学
5. 北海道におけるロシア語教育の現状（ワークショップ・パネリスト）, 平成19年7月, 日本ロシア文学会北海道支部, 札幌大学
6. Русская лексикология: Тенденции развития — Учебник для чтения с лингвострановедческим словарём —, 平成19年9月, МАПРЯЛ(ロシア語・ロシア文学教師国際協会), 第11回大会, ブルガリア, ヴァルナ市
7. Анализ преподавания иностранных языков в вузах Японии и некоторые пути стимулирования японских студентов к изучению русского языка, 平成22年9月, ハリコフ電子通信大学
8. 「M. M. ドブロトヴォールスキィとその『アイヌ語・ロシア語辞典』」, 平成30年7月, 日本ロシア文学会, 2018年度北海道支部会, 北海道大学

教科書

1. 共著 КУРС РУССКОГО ЯЗЫКА 『ロシア語教程』, SI 図書企画, 平成7年6月
2. РУССКИЙ ЯЗЫК ДЛЯ НАЧИНАЮЩИХ 『ロシア語基礎コース』, SI 図書企画, 平成10年4月
3. 共著 ДАВАЙТЕ ОБЩАТЬСЯ ПО-РУССКИ 『ロシア語でコミュニ

- ケーション』, 共同文化社, 平成 13 年 3 月
4. 共著 ЧИТАЕМ, ПЕРЕВОДИМ, РАЗГОВАРИВАЕМ И ДУМАЕМ ПО-РУССКИ 『ロシア語を読んで, 翻訳して, 話して, そしてロシア語で考えましょう』, SI 図書企画, 平成 13 年 4 月
 5. РУССКИЙ ЯЗЫК ДЛЯ НАЧИНАЮЩИХ 『ロシア語基礎コース 改訂版』, SI 図書企画, 平成 14 年 5 月
 6. 共著 МИР РУССКОЙ СКАЗКИ 『ロシア昔話の世界』, 共同文化社, 平成 16 年 3 月
 7. 共著 ДАВАЙТЕ ОБЩАТЬСЯ ПО-РУССКИ (2) 『ロシア語でコミュニケーション (2)』, 共同文化社, 平成 16 年 4 月
 8. 共著 ДАВАЙТЕ ОБЩАТЬСЯ ПО-РУССКИ (1) 『ロシア語でコミュニケーション (1)』, 共同文化社, 平成 16 年 7 月
 9. РУССКИЙ ЯЗЫК ДЛЯ НАЧИНАЮЩИХ 『ロシア語基礎コース 三訂版』, SI 図書企画, 平成 18 年 4 月
 10. 共著 ОБО ВСЁМ ПО-НЕМНОГУ (1) 『ロシア語中級コース』, SI 図書企画, 平成 25 年 3 月
 11. 共著 ОБО ВСЁМ ПО-НЕМНОГУ (2) 『ロシア語中級コース』, SI 図書企画, 平成 25 年 3 月
 12. 共著 ДАВАЙТЕ ОБЩАТЬСЯ ПО-РУССКИ —ЭЛЕМЕНТАРНЫЙ УРОВЕНЬ— 『ロシア語でコミュニケーション 初級レベル』, SI 図書企画, 平成 25 年 3 月
 13. РУССКИЙ ЯЗЫК ДЛЯ НАЧИНАЮЩИХ 『ロシア語基礎コース 四訂版』, SI 図書企画, 平成 25 年 4 月
 14. 共著 ДАВАЙТЕ ОБЩАТЬСЯ ПО-РУССКИ 『ロシア語でコミュニケーション 入門レベル (1)』, SI 図書企画, 平成 28 年 4 月

その他

1. 「ロシアはいいところかもしれない!!?」, 平成 9 年 4 月, Z 会ペブル選書『留学の達人』所収

2. 「北海学園大学におけるロシア語教育」, 平成 10 年 9 月, 北海学園大学学術研究会『学園論集』, 第 96・97 号
3. 『地球の歩き方〈ロシア〉 2002～2003 版』, 平成 13 年 7 月, ダイアモンド社, (ウクライナ語部分の校閲など)

さらば同志よ！ До свидания, товарищ！

北海学園大学人文学部日本文化学科 大 谷 通 順

教養部以来 31 年にわたってロシア語教育に尽力されてきた寺田吉孝先生がこの 3 月で退職されます。先生のご赴任当時を知る唯一の人文学部教員として、衷心からの謝意をこめ、いささか当時を回憶させていただきます。

ロシア語は私が担当する中国語とは兄弟のような科目で、教養部カリキュラム改革の一環として開設されました。両言語はいずれも伝統的な第二外国語である独・仏語と異なり、教養面だけではなく実用面をも視野に入れた教育を目的とするものとされました（皮肉にも、戦前、ロ（魯・露）・中（清・漢・支那・満）両語が実用一辺倒の「特殊語学」とされ、旧制高等学校の語学教育に居場所を得られなかったことと裏腹の関係にあります）。そのため、学生の言語運用能力を高める細やかな指導が可能になるように、1 クラスの定員は 30 名以下に制限されました。

スタート当初のロシア語は非常勤講師による授業で当座をしのいでいましたが、1990 年の第 10 回教授会（11 月 1 日）でついに専任教員を採用することが議決されました。翌年、第 6 回教授会（5 月 23 日）で一風変わった審査報告がなされました。当時、教養部長が化学者の相川雅之先生であったため、会場は自然科学実習室でした。しかも、一般的な業績報告のあと、おもむろに旧ソ連で学位を授与された数学者の鈴木輝雄先生が、電話の受話器をとり、候補の寺田先生に対してロシア語による口頭試問を始められたのです。教授会メンバー全員は聴き取れるか聴き取れないかにかかわらず、スピーカーから流れる長時間の通話に耳を傾けました。少々滑稽ですが、カリキュラム改革の渦中にあった教養部の先達たちの並々ならぬ意気

込みを汲みとるべきでしょう。

こうして寺田先生は1992年4月に教養部へ赴任されました。私は入れ違いに長期出張で中国に渡ったため、1年遅れの1993年からようやく先生と業務をご一緒させていただくことになりましたが、ただちに先生の柔軟な発想、実務での手際の良さ、そして根本にある「学生想い」に感心することになります。以下、それらが顕著に表れた三つの例について述べたいと思います。

何よりも最初に挙げるべきは、1994年に早くも開始されたヴラヂーミル大学での語学研修です。それは学校法人から何の支持や支援もない中、ひたすら学生たちの熱意にほだされて始められました。結果として、現地への渡航手続きおよび交通手段の確保に始まり、先方の大学での宿泊や授業の準備、さらには現地での見学の引率まで、1ヶ月を超える滞在に必要なあらゆる業務を寺田先生がお独りでこなさねばなりません。我々中国語教員はそれより6年前に北京理工大学での中国語研修を開始しており、学内で同様のあしらいをうけていましたので、先生のご苦労がいかほどであったか痛いほどわかります。ただし中国語研修は初回だけ公式行事として実施されたおかげで、その際に設けられた制度的な基盤をある程度利用できました。したがって私の苦労など先生とは比較にならないことも明言しておかなければなりません。

ロシア語研修にせよ、中国語研修にせよ、わずか1ヶ月余りとはいえ、それに参加した学生は、国家制度から日常習慣まで日本とまったく異なる環境下で集団生活をしたためか、学習言語はもとより、一般的な思考や行動についても思いがけない成長をみせます。おもしろいことに、ロシア語研修に参加した学生の中には、ごく少数ですが、中国語研修に参加する者も出現します。彼ら・彼女たちの口を通して語られる偽らざる感想から、ロシアでの体験がどれほど貴重で、また引率中の寺田先生がどれほどユーモラスで魅力的か知ることができました。

第2に挙げるべきは、このようにロシア語研修への参加を切望するような学生を育てあげる、平素の教育活動です。時間割内の通常授業について

ここでは措き、課外活動についてのみふれます。旺盛な学習意欲をもつ学生たちにとって、時間割の授業だけでは食い足りません。寺田先生はそのような学生たちのために愛好会（のちに同好会）を組織し、ロシア語学習のための各種活動を実施し、機関紙を発行しました。活動に参加した学生はすべて多かれ少なかれ、その中から何かを吸収したはずですが、とりわけ明確な形に結実したものとして、卒業後もロシアとの関係を維持して職業につなげた例がいくつもあります。具体的には外交官、税関職員、国際捜査担当警察官、貿易業、通訳、ジャーナリスト、対外日本語教員などです。じつは中国語を学ぶ学生たちも、やはり課外活動に積極的で、夏・冬の合宿、検定対策学習会、機関紙発行など、さまざまな研究会活動をかつて自主的に展開し、一部の者は現在も中国との関わりの中で生きています。したがって、私も先生の教育活動の意義には大いに共感を持ちます。

第3に挙げたいのは、教養部解体に伴って、各学部のカリキュラム上で語学教育の取り扱いが大きく変動する中、先生が一貫して学生の成長に心を砕き、次々に打ち出された対策です。たとえば（1）英語以外の諸外国語を結びつけたリレー講義「世界の言語と文化」の考案と運営、（2）その教科書『言語と文化』の編纂と絶えざる改訂、（3）通年の課程を半期のみで集中的に習得させる「半期連続」科目の創設、そして（4）英語以外の外国語に特化した学生ガイダンスを全学の教務日程中に位置づけ、そのための冊子を毎年編集することなど、すでに一般教育カリキュラムに定着したもろもろの活動は、すべて先生の斬新なアイデアを起源とし、堅実な手法で逐次実現されてきた成果なのです。その形成過程に同志として私も参加できたことを、この上なく幸せに思います。

最後に私事にわたりますが、早くから先生とはシベリア鉄道での旅行をお約束しながら、その後諸事に紛れて実現できていません。私も来年には自由な身になりますので、ぜひ念願を成就したいものです。



米坂スザンヌ教授

「退職について」感謝の気持ち

米坂 スザンヌ

30 年以上前、女性教員が少なく、さらに外国教員が少なかった時代に、2 人の幼児を持つ外国人女性の私を採用してくださった北海学園大学に感謝いたします。大きなチャンスを与えてくれたことに感謝しています。今でも日本語が下手で分からないことは教職員が常にかバーしてくれています。皆様の辛抱強さに感謝します。

人文学部の同僚の皆様には、長年にわたり様々な形で多大なご支援をいただき、誠にありがとうございました。ここで、人文学部のカナダ留学プログラムの皆さまの支援についてだけ言及します。今日、これらのプログラムは当たり前のように見えますが、常にそうではありませんでした。多くの学生に恩恵をもたらしてきた、これらのプログラムが存在しているのは、皆様のご支援のおかげです。ご辛抱いただきありがとうございます。

人文学部の英語プログラムの同僚には特に感謝しています。おかげさまで、統一カリキュラムの設定、教材の作成、オンライン教材の開発、多数の管理ワークフローの開発を行うことができました。その結果、人文学部英語プログラムはコロナ禍の間、オンラインへの移行を比較的スムーズに行うことができました。この教育の創造的な側面において、このような才能があり献身的な同僚と一緒に働くことができて光栄です。皆様のプロ意識に感謝します。

最後に、毎年熱心に英語で卒業論文を書ってくれるゼミ生に感謝します。2011 年の大震災後、多くのゼミ生が石巻や札幌で私と一緒にボランティア

活動をしました。英語の教師になっているゼミ生もいれば、海外に住んで働いているゼミ生もあります。皆さんのことを誇りに思います。皆さんのポジティブなエネルギーに感謝します。

支援と友情に感謝します。

略 歴

よねさか
米坂スザンヌ 1954 年 12 月 7 日生

学 歴

- 1977 年 8 月 カリフォルニア大学サンタバーバラ校卒業（フランス語学
士）
- 1983 年 8 月 サンフランシスコ州立大学大学院 英語修士課程修了（英
語学修士）

職 歴

- 1986 年 2 月－1990 年 3 月 札幌大学女子短期大学部英文学科講師
- 1990 年 4 月－1992 年 3 月 札幌大学女子短期大学部英文学科助教授
- 1992 年 4 月－1993 年 3 月 北海学園大学教養部助教授
- 1993 年 4 月－2002 年 3 月 北海学園大学人文学部英米文化学科助教授
- 2002 年 4 月－現在 北海学園大学人文学部英米文化学科教授
- 2005 年 4 月－現在 北海学園大学院文学研究科英米文化専攻修
士課程講義担当教員

学 内 委 員（主なもの）

レスブリッジ大学専門委員会，大学院委員会，国際交流委員会，CALL 教
室運営委員会，教務委員会

所属学会等

全国語学教育学会（JALT），国際英語教育教師学会（TESOL），大学英語
教育学会（JACET）

主な研究業績

翻訳

1. 共訳 M. Iwasaki, 他. *The Romance of the Bear God: Ainu Folktales*. Shigeru Kayano. Taishukan.

論文

1. Teaching English through content. *Sapporo University Women's Junior College Journal*, 12, 1988 年 9 月, 83-101 頁。
2. Written dialogue journals: Affective and linguistic aspects of student-teacher interaction. *Sapporo University Women's Junior College Journal*, 14, 1989 年 9 月, 1-15 頁。
3. Some effects of a short-term study abroad program on attitudes toward the foreign language and its speakers. *Sapporo University Women's Junior College Journal*, 16, 1990 年 9 月, 11-23 頁。
4. The construction and administration of student-evaluation-of-instruction forms for English courses in Japanese universities. *Gakuen Ronshu (Journal of Hokkai Gakuen University)*, 73, 1992 年 9 月, 1-10 頁。
5. The effect of a study-abroad program on the integrative motivation of Japanese women's junior college students. In *Sapporo University Women's Junior College 25th Anniversary Research Collection: Chiki, Joho, Bunka*, Kyobunsha, 1993 年 3 月, 291-305 頁。
6. Creating student evaluation of instruction forms. *The Language Teacher*, 17(4), 1993 年 4 月, 19-24 頁。
7. An analysis of first-year students' perceptions of their EFL needs. *Hokkai Gakuen University Studies in Culture*, 2, 1994 年 3 月, 87-122 頁。

8. 共著 L. Kirkwold, D. Lomas. English used in foreign multinational companies in the Tokyo region: A pilot study. *Hokkai Gakuen University Studies in Culture*, 4, 1995 年 3 月, 123-173 頁。
9. 共著 M. Horiuchi, C. Edwards, G. Halvorsen, D. Sato, S. Kobayashi, M. Yoshida, K. Hayasaka. Hokkaido ni okeru daigaku eigo kyouiku no niizu bunseki [An EFL needs analysis of students at private universities and colleges in Hokkaido]. *Hokkaido Research Center of Environment and Culture (REC) Technical Report no. 0015*, 1995 年 7 月。
10. Feedback on multiple-draft EFL compositions: Six students and a teacher respond and react. *Hokkai Gakuen University Studies in Culture*, 8, 1997 年 3 月, 71-123 頁。
11. Take it from experience: A methods course for pre-service teacher-trainees. In Korea TESOL (Ed.) *Proceedings of the 1997 Korea TESOL Conference*. Korea TESOL, 1998 年 1 月, 201-209 頁。
12. The pre-service training of Japanese teachers of English. *The Language Teacher*, 23(11), 1999 年 11 月, 9-15 頁。
13. Preservice requirements in Hokkaido. *Japan Association for Language Teaching Hokkaido Chapter 1999 Proceedings*, 1999 年 12 月, 61-66 頁。
14. A pre-service teacher's retrospective verbalization of an EFL practicum lesson. *Hokkai Gakuen University Studies in Culture*, 16, 2000 年 7 月, 63-102 頁。
15. Interculturalism and multiculturalism in secondary EFL in Japan. *Hokkai Gakuen University Studies in Culture*, 19, 2001 年 7 月, 95-111 頁。
16. The power of beliefs in the pre-service practice. *The ThaiTESOL Bulletin*, 14(2), 2001 年 8 月, 1-8 頁。
17. Three dilemmas of three Japanese EFL teacher candidates. *The*

Selected Papers from the Eleventh International Symposium on English Teaching / Fourth Pan-Asian Conference, Vol 2. (CD-ROM), Crane, 2002 年 10 月, 284-292 頁。

18. Time management beliefs and dilemmas: Secondary English teacher candidates in Japan. *Hokkai Gakuen University Studies in Culture*, 23/24, 2003 年 3 月, 149-172 頁。
19. Teaching what, to whom, how and why? A review of Japanese pre-service EFL teacher beliefs. *Hokkai Gakuen University Studies in Culture*, 29, 2004 年 11 月, 19-40 頁。
20. A proposal to use classroom discourse frames to investigate patterns of teacher L1 use. *Hokkai Gakuen University Studies in Culture*, 32, 2005 年 11 月, 31-57 頁。
21. Supplementing an English phonetics course with on-line independent study. *Hokkai Gakuen University Studies in Culture*, 36, 2007 年 3 月, 189-201 頁。
22. 共著 M. Metoki. Teacher use of students' first language: Introducing the FIFU checklist. *The Language Teacher*, 31(10), 2007 年 10 月, 20-21 頁。
23. Students' language learning beliefs, proficiency, and L1-dependence. *Hokkai Gakuen University Studies in Culture*, 39, 2008 年 3 月, 239-263 頁。
24. Practical phonetics for language learners: Evaluating a blended course. *Hokkai Gakuen University Studies in Culture*, 43, 2009 年 7 月, 53-80 頁。
25. Self-evaluation of phoneme production and rating scale type. *Hokkai Gakuen University Studies in Culture*, 47, 2010 年 11 月, 27-46 頁。
26. 共著 H. Tanaka. First-year Japanese university students' language learning beliefs: Continuity and change. *TESL-EJ*, 17 (3), 2013 年 11 月, 1-20 頁。

27. 共著 H. Tanaka, Y. Ueno, A. Ohnishi. An E-portfolio to enhance sustainable vocabulary learning in English. *The Eurocall Review*, 23 (1), 2015 年 3 月, 41-52 頁。
28. 共著 Y. Ueno, A. Ohnishi. P-CHECK: Peer Feedback を利用した発音練習プラグインソフトウェア。 *Gakuen Ronshu*, 168, 2016 年 6 月, 23-41 頁。
29. Learner perceptions of online peer pronunciation feedback through P-Check. *The JALTCALL Journal*, 13(1), 2017 年 4 月, 29-51 頁。
30. Feedback on local intelligibility by same-L1 learners: Face-to-face or computer-mediated? *TESL-EJ*, 23 (2), 2019 年 8 月, 1-25 頁。
31. Asynchronous online peer judgments of intelligibility: Simple task, complex factors. In F. Meunier, J. Van de Vyver, L. Bradley & S. Thouësny (Eds.), *CALL and complexity — Short papers from EUROCALL 2019*, Research-publishing.net, 2019 年 12 月, 407-412 頁。

口頭発表

1. 共同発表者 C. Edwards. *You should have asked: Japanese students' perceived EFL needs*. International Association of Teachers of English as a Foreign Language (IATEFL) 28th International Annual Conference, Brighton, U.K. 1994 年 4 月。
2. 共同発表者 C. Edwards, J. Halvorsen, S. Kobayashi, M. Yoshida, M. Horiuchi, K. Hayasaka. *An EFL needs analysis of students at private universities and colleges in Hokkaido*. JALT Hokkaido Chapter 11th Annual Conference, Sapporo, 1994 年 5 月。
3. 共同発表者 L. Kirkwold, D. Lomas. *English used in foreign companies: Tokyo region*. JACET 33rd Annual Convention, Nagoya, 1994 年 9 月。
4. 共同発表者 C. Edwards, J. Halvorsen, S. Kobayashi, M. Yoshida, M.

- Horiuchi, K. Hayasaka. *An EFL needs analysis of students at private universities and colleges in Hokkaido*. JACET 33rd Annual Convention, Nagoya, 1994 年 9 月。
5. 共同発表者 C. Edwards, J. Halvorsen, S. Kobayashi, M. Yoshida, M. Horiuchi, K. Hayasaka. *SNAP: An EFL needs analysis of students at private universities and colleges in Hokkaido*. 20th Annual JALT International Conference, Matsuyama, 1994 年 10 月。
 6. 共同発表者 C. Edwards, K. Hayasaka, M. Yoshida. *Not in Kansas anymore: Japanese university students' EFL needs*. TESOL 30th Annual International Convention, Chicago, U.S.A., 1996 年 3 月。
 7. *Teacher-trainees and methods: Experience into theory*. Korea TESOL 5th International Conference, Kyongju, South Korea, 1997 年 10 月
 8. *Teacher-trainees and methods: Experience into theory*. 23rd Annual JALT International Conference, Hamamatsu, 1997 年 10 月。
 9. 共同発表者 C. Edwards. *ABC's of employment in Japanese higher education*. TESOL 33rd Annual International Convention, New York, U.S.A., 1999 年 3 月。
 10. *Pre-service teacher education of Japanese teachers of English*. JALT Hokkaido Chapter 16th Annual Conference, Sapporo, 1999 年 5 月。
 11. *One mirror, multiple reflections: A pre-service teacher of English retrospects on a videotaped practicum lesson*. JACET 39th Annual Convention, Okinawa, 2000 年 11 月。
 12. *The power of beliefs in the preservice practice of secondary English teachers in Japan*. 21st Thailand TESOL International Conference, Bangkok, Thailand, 2001 年 1 月。
 13. *Classroom dilemmas of preservice teachers in Japan*. TESOL 35th Annual International Convention, St. Louis, U.S.A., 2001 年 3 月。
 14. *Three dilemmas of three Japanese EFL teacher candidates*. English

- Teachers Association of the Republic of China (ETAROC) 4th Annual Pan Asian Conference (PAC4) and 11th International Symposium and Book Fair on English Teaching, Taipei, Taiwan, 2002 年 11 月。
15. *Decisions and dilemmas of Japanese EFL teacher candidates: The time bind*. International Study Association on Teachers and Teaching (ISATT) 11th Biennial Conference, Leiden, The Netherlands, 2003 年 6 月。
 16. 共同発表者 M. Metoki. *Ts' use of Ss' L1: Introducing the FIFU checklist*. JALT 32nd Annual International Conference, Kitakyushu, 2006 年 11 月。
 17. *Investigating the functions of teacher L1 use*. TESOL 41st Annual International Convention, Seattle, U.S.A., 2007 年 3 月。
 18. *Adding an on-line component to a course in English phonetics*. JALT International CALL Conference, Tokyo, 2007 年 6 月。
 19. *On-line phonetics and pronunciation through Moodle*. TESOL 42nd Annual International Convention, New York, U.S.A., 2008 年 4 月。
 20. *Practical phonetics for language learners: Evaluating a blended course*. JALT International CALL Conference, Tokyo, 2009 年 6 月。
 21. *Effective self-monitoring of pronunciation: Kinesthetic/visual or auditory?* TESOL 45th Annual International Convention, New Orleans, U.S.A., 2011 年 3 月。
 22. *The Ishinomaki manga project*. JALT Global Issues in Language Education (GILE) Hokkaido Conference, Sapporo, 2013 年 6 月。
 23. 共同発表者 H. Tanaka, Y. Ueno, A. Ohnishi. *Developing an e-portfolio to enhance sustainable vocabulary learning in English*. 4th WorldCALL Conference, Glasgow, U.K., 2013 年 7 月。
 24. *Global citizenship through disaster education: The Ishinomaki tsunami manga project*. Korea TESOL International Conference,

- Seoul, South Korea, 2013 年 10 月。
25. *Phonetics for lifelong pronunciation development*. JALT 39th Annual International Conference, Kobe, 2013 年 10 月。
 26. 共同発表者 H. Tanaka. *Practical phonetics for pronunciation development* (Sponsored by Cengage). JALT 39th Annual International Conference, Kobe, 2013 年 10 月。
 27. 共同発表者 Y. Ueno, A. Ohnishi. *P-CHECK: A new plug-in for peer pronunciation feedback*. FLEAT VI The 6th Conference on Foreign Language Education and Technology, Boston, USA, 2015 年 8 月。
 28. 共同発表者 Y. Ueno. *P-CHECK: Intelligibility を高める発音訓練と Peer feedback の利用*. 外国語教育メディア学会 (LET) 関東支部第 135 回年研究大会, Tokyo, 2015 年 11 月。
 29. 共同発表者 A. Ohnishi. *Online peer pronunciation feedback*. JALT PAN-SIG 15th Annual International Conference, Nago, 2016 年 5 月。
 30. 共同発表者 Y. Ueno. *Online peer feedback on pronunciation intelligibility*. JALT CALL “CALL and the Brain 2016”, Tokyo, 2016 年 6 月。
 31. 共同発表者 A. Ohnishi, Y. Ueno. *Integrating pair work and learner autonomy into ICT-based pronunciation practice*. JACET 55th International Convention, Sapporo, 2016 年 9 月。
 32. *Effect of online peer feedback on intelligibility of same-L1 speakers*. TESOL International Convention & English Language Expo, Atlanta, USA, 2019 年 3 月。
 33. *Asynchronous online peer judgments of intelligibility: Simple task, complex factors*. European Association for Computer-Assisted Language Learning (EUROCALL) 2019, Louvain-la-Neuve, Belgium, 2019 年 8 月。
 34. *Pronunciation teaching to promote learner agency*. JALT 45th Annual International Conference, Nagoya, 2019 年 11 月。
 35. [Online] *Effect of input produced by NSs, same-L1 peers, and self on*

listening discrimination and pronunciation. European Association for Computer-Assisted Language Learning (EUROCALL) 2020, Copenhagen, Denmark, 2020 年 8 月。

36. [Online] *Research-based pronunciation teaching: How and why*. JALT 46th Annual International Conference, Tsukuba, 2020 年 11 月。

教科書

共著 H. Tanaka. *Discovering English Sounds: Phonetics Made Easy*. Cengage. 2014 年。

書評

Review of the book *Ideology, Agency, and Intercultural Communicative Competence: A Stratified Look into EFL Education in Japan*, by J. Bouchard. 年報新人文学, 14, 2017 年 12 月, 93-98 頁。

その他

Setting up a scanning center. *The Language Teacher*, 13(10), 1989 年 10 月, 36 頁。

Creating an individualized scanning center. In R. Day, (Ed.), *New Ways in Teaching Reading*, Pantagraph. 1993 年 3 月, 143 頁。

共著 C. Edwards. The ABCs of employment in Japanese higher education. *TESOL Placement Bulletin*, 10(4), 2000 年 5 月, 3-5 頁。

To Suzanne Yonesaka, with Gratitude and Admiration

Jeremie Bouchard

Hiroya Tanaka

It is with great admiration, gratitude, and with sadness as well, that we bid farewell to Professor Suzanne Yonesaka, one of the pillars of the Faculty of Humanities, after a 37-year-long teaching career in Japan. For 30 years, Suzanne has been a crucial part of HGU's teaching workforce, helping many older and younger teachers in so many ways, and has been a crucial contributor to many committees. Throughout her career, she has gathered a great deal of respect and admiration from everyone across all faculties.

Here is a short summary of Suzanne's academic and professional trajectory. In 1977, Suzanne graduated from the University of California, with a Bachelor of Arts in French, and in 1983 from San Francisco State University Graduate School, with a Masters Degree in English. From April 1985 to March 1992, Suzanne worked as Lecturer and then as Associate Professor in the Department of English Literature, Women's Junior College, Sapporo University. From April 1992 and for one year, Suzanne was Associate Professor in the then Faculty of Liberal Arts at HGU. When the Faculty of Humanities was founded in April of 1993, Suzanne became Associate Professor, and from April 2002 to the present, has been Professor. From April 2005, she has taught in our Faculty's Master's Program. Over the years, Suzanne has published 29 journal articles, 1 textbook, 1 translated work, 4 symposium proceedings articles, 1 edited

volume chapter contribution, 1 book review, and has given 36 presentations at various national and international conferences. Combined with her work creating and implementing the new Humanities EFL program, and her tireless work with the many faculty and school-wide study abroad programs, Suzanne's academic and professional achievements are clearly noteworthy, and reveal her as a devoted and consistent worker, academic, teacher, and thinker.

As we all know, Japan has undergone major social, political, and cultural changes for the past few decades, and Suzanne has had the privilege of experiencing these changes both as a foreign worker, mother, and community member, and as an academic and professional leader. Her insight into Japanese society and culture, and the place and role of foreign workers in Japan, is unparalleled. The richness of this insight can partly be explained by the fact that Suzanne became a university faculty member at a time when being both a female and a foreign worker in the Japanese workforce was a very difficult reality to manage. Nevertheless, her organized and rational approach to work, and her eternally positive outlook on life and towards people, have ensured her success, and have been an inspiration to those who have had the privilege of working with her.

Generally speaking, people become teachers to make a difference in the lives of students, to help them find their goals and empower them so that they can eventually fulfill these goals independently from the help of teachers. A strong believer in this core educational principle, Suzanne showed that you can make a difference in students' lives through consistent effort, respect towards students, and attention to details. Suzanne also has a strong volunteer spirit. Immediately after the 2011 East-Japan earthquake, for example, she organized multiple volunteer visits with HGU students to help people in affected areas. On countless other occasions, of course, she has helped and provided extra tutorage to students whenever they needed

additional help.

Although we are all looking forward to the future with hope and excitement, we cannot help but feel sad and worried at knowing that Suzanne will no longer be here to provide advice, support, and leadership. Suzanne has had a profound impact on the Faculty of Humanities from many different angles, and will leave an important mark on our faculty for the years to come. The entire faculty of Humanities is extremely grateful for her work during all these years, and wishes her a happy and well-deserved retirement!



安酸敏眞教授

退職にあたって

安 酸 敏 眞

来る3月31日をもって本学を定年退職することになりました。

思い起こせば、2004（平成16）年4月に本学に着任してから、丸19年が過ぎたことになります。その間、学内紀要委員、入試委員、入試制度委員、協議委員、大学院委員、将来構想委員、人文学部長、図書館長、学長、理事長などを歴任してきました。人文学部の創設20周年に向けてカリキュラム改革を主導し、新科目として導入されることになった1年生必修の「人文学概論」のために、新たに教科書を書き下ろし、その科目を自ら担当したことも、いまとなっては懐かしい思い出です。本来学長が担当すべき「大学史」の講義も、木村前学長があまり乗り気でなかったために、学長に就任する以前からかなりの部分を自分が担当しましたが、この講義は自分にとってとても有意義なものでした。なぜなら、これによって大学を根本から考え直す眼が養われたからです。

2017（平成29）年4月に第10代学長に就任し、これまで2期6年にわたって学長職を務めてきました。学長になると学部籍を離れますので、過去6年間は人文学部の教職員や学生たちとの日常的な触れ合いがなくなり、この点はとても残念でした。また学長在職期間に、人文学部の多くの同僚たちが退職されましたので、人文学部所属の教員でも自分の知らない先生方が増えました。立場的には逆ですが、さながら「ここに、ヨセフのことを知らない新しい王が、エジプトに起った」（出1：8）かのような状況となり、最長老となった自分もいよいよ幕引きのときを迎えた次第です。

わたしは1987（昭和62）年10月の盛岡大学文学部助教授就任を皮切りに、聖学院大学（1993年3月～2004年3月）、そして本学と三つの大学で専任教員を務めてきましたが、その間に非常勤講師として、立教大学、国

立音楽大学、福岡県立大学、京都大学、北海道大学でも教える機会を与えられてきました。担当した科目は、哲学、哲学の人間学、聖書と英米文学、キリスト教学、キリスト教学概論、キリスト教思想史、宗教史学、ヨーロッパ文化概論、ヨーロッパ思想史、ヨーロッパ文化史、ドイツ近代思想、アメリカ社会論、米国文化論、人文学概論、大学史、英語、ドイツ語、大学院演習などと、多岐にわたっています。つくづく自分は“Jack-of-all-trades”（よろず屋、何でも屋）だと思います。挙句の果てに、非キリスト教大学の学長および理事長になったのですから、わが人生はまことに tragicomedy（悲喜劇）のようなものです。

というのは、盛岡大学と聖学院大学はいずれもキリスト教の大学でしたので、本来であれば自分の専門を最も活かせる大学だったはずです。しかし諸般の事情から必ずしも居心地がよろしくありませんでした。むしろ自分としては、北海学園大学に移ってきてから、ようやく精神の自由を得て、専門の学問研究に打ち込むことができるようになりました。このことは、後続の「業績一覧」によっても一目瞭然であろうと思います。ですから、本学に移籍してきたことは、自分にとって大変ラッキーなことだったと思います。仲介の労を取ってくださった土屋博先生に、あらためて深く感謝したいと思います。

とはいえ、学長職とか理事長職に就くことは、まったく想定外の出来事でした。これは神様が自分に与えられた試練であるか、あるいは人の弱みにつけ込む悪魔の悪戯（いたづら）であるか、いずれにせよ自分の欲せぬことでした。とりわけ、学長職に加えて理事長職をも兼務するようになってから、心身ともに相当な負荷がかかり、心かなりの青あざができたことも事実です。このような状態からようやく脱却できるかと思えば、いまは解放の日が来ることをただただ待ち望んでいます。ただし、自分が望んでいるように事がうまく進むかどうかはわかりません。「人は心に自分の道を考え計る、しかし、その歩みを導く者は主である」（箴 16：9）とあるように、自分が願った通りになるとは限らないからです。わたしとしては導かれるがままに歩を進めていくしかありません。

最後に、長い間お世話になり本当にありがとうございました。北海学園
大学人文学部の今後の発展をお祈りして、退職の辞とさせていただきます。

履 歴

安酸敏眞（やすかた・としまさ） 1952 年 1 月 26 日 鳥取県米子市生まれ

学 歴

- 1970 年 3 月 鳥取県立米子東高等学校卒業
- 1970 年 4 月 京都大学工学部合成化学科入学
- 1972 年 4 月 京都大学文学部哲学科基督教学専攻編入
- 1975 年 3 月 同上卒業（文学士）
- 1975 年 4 月 京都大学大学院文学研究科修士課程宗教学（キリスト教学）専攻入学
- 1977 年 3 月 同上修了（文学修士）
- 1977 年 4 月 京都大学大学院文学研究科博士課程宗教学（キリスト教学）専攻進学
- 1980 年 3 月 同上単位取得満期退学
- 1980 年 8 月 米国ヴァンダービルト大学大学院博士課程宗教学専攻入学
- 1985 年 5 月 米国ヴァンダービルト大学大学院博士課程宗教学専攻修了（Ph. D.）

職 歴

- 1980 年 4 月 （財）日本学術振興会奨励研究員（受入機関：京都大学） ～ 1980 年 8 月
- 1983 年 11 月 西独ゲッティンゲン大学神学部研究員 ～1985 年 3 月
- 1985 年 4 月 （財）日本生産性本部シンガポール協力室常勤嘱託 ～1985 年 9 月
- 1985 年 10 月 （財）日本学術振興会特別研究員（受入機関：京都大学） ～

1987 年 3 月

1987 年 4 月 (財) 日本生産性本部海外技術協力部常勤嘱託 ～1987 年 9 月

1987 年 10 月 盛岡大学文学部一般教育科助教授 ～1993 年 3 月

1993 年 3 月 聖学院大学人文学部欧米文化学科助教授 ～1996 年 3 月

1994 年 4 月 聖学院大学人文学部欧米文化学科長 ～1996 年 3 月

1996 年 4 月 聖学院大学人文学部欧米文化学科教授 ～2004 年 3 月

1999 年 4 月 聖学院大学大学院アメリカ・ヨーロッパ文化学研究科（修士・博士課程）教授 ～2004 年 3 月

2002 年 4 月 聖学院大学人文学部欧米文化学科長 ～2004 年 3 月

2004 年 4 月 北海学園大学人文学部英米文化学科教授～現在に至る

2004 年 4 月 北海学園大学大学院文学研究科教授 ～現在に至る

2010 年 4 月 北海学園大学人文学部長 ～2013 年 3 月

2014 年 4 月 北海学園大学図書館長 ～2017 年 3 月

2017 年 4 月 北海学園大学学長 ～現在に至る

2021 年 6 月 学校法人北海学園理事長 ～現在に至る（2023 年 3 月 31 日退任予定）

学 内 委 員（主なもの）

学内紀要委員，入試委員，入試制度委員，協議委員，大学院委員，将来構
想委員，人文学部長，図書館長，学長

所 属 学 会

日本基督教学会，京都大学基督教学会，Ernst-Troeltsch-Gesellschaft

学 位

Ph. D.（ヴァンダービルト大学，1985 年）

京都大学博士（文学）（京都大学，1997 年；学位記番号 文第 333 号）

受 賞

1987年9月 日本宗教学会賞受賞（受賞対象：*Ernst Troeltsch: Systematic Theologian of Radical Historicity* (Atlanta: Scholars Press, 1986)）

主 要 業 績

研 究 業 績（雑録その他も含む）

1. 著書（単著）

- 01 *Ernst Troeltsch: Systematic Theologian of Radical Historicity* (American Academy of Religion Academy Series No. 55) (単) 1986/12 Atlanta: Scholars Press（現在は Oxford: Oxford University Press より出版）. A5 版, xxx+219pp. ISBN1-55540-070-1; 1-55540-069-8 PBK
- 02 『レッシングとドイツ啓蒙』(単) 1998/10 創文社, A5 版, 430 頁。ISBN4-423-17108-2
- 03 『歴史と探求—レッシング・トレルチ・ニーバー』(単) 2001/03 聖学院大学出版会, A5 版, 205+6 頁。ISBN978-4-915832-39-2
- 04 *Lessing's Philosophy of Religion and the German Enlightenment: Lessing on Christianity and Reason* (American Academy of Religion Reflection and Theory in the Study of Religion Series) (単) 2002/01, New York: Oxford University Press. xvi+224pp. ISBN0-19-514494-5（本書の概要については, Oxford Scholarship Online (<https://academic.oup.com/book/25356>) に詳細な英文要旨が掲載されている）
- 05 『歴史と解釈学—《ベルリン精神》の系譜学』(単) 2012/07 知泉書館, A5 版, 600 頁。ISBN978-4-86285-135-2

- 06 『人文学概論—新しい人文学の地平を求めて』(単) 2014/07 知泉書館, 四六判, 277 + xi 頁。ISBN978-4-86285-192-5
- 07 『欧米留学の原風景—福沢諭吉から鶴見俊輔へ』(単) 2016/05 知泉書館, 四六判, 481 + 29 頁。ISBN978-4-86285-233-5
- 08 『増補改訂版 人文学概論—人文知の新たな構築をめざして』(単) 2018/03 知泉書館, 四六判, 296 + xiii 頁。ISBN978-4-86285-271-7
- 09 『キリスト教思想史の隠れた水脈—フィオーレのヨアキムからニーバーへ』(単) 2020/11 知泉書館, 四六判, xv + 385 頁。ISBN978-4-86285-323-3
- 10 『つむじ風に巻き上げられて—随筆・回想』(単) 2021/09 共同文化社, 四六判, 220 頁。ISBN978-4-87739-357-1
- 11 『「キリスト教学」の探究』(単) 2023/02 教文館, A5 版, 289 頁。ISBN978-4-7642-7468-6

2. 著書 (共著)

- 01 水垣 渉・小高 毅編『総説キリスト論論争史』(共) 日本基督教団出版局, 2003/07 (第五章の「近・現代」(プロテスタント) (441-528 頁) の部分を担当。啓蒙主義, ライマールス, レッシング, カント, シュライエルマッハー, ヘーゲル, シュトラウス, F.C. バウル, ビーダーマン, キルケゴール, チャニング, ブッシュネル, F.D. モーリス, トマジウス, I.A. ドルナー, リッチェル, ヘルマン, ハルナツク, ラウシェンブッシュ, ヨハannes・ヴァイス, シュヴァイツァー, M. ケーラー, トレルチ, バルト, ブルトマン, ティリッヒ, R. ニーバー, パネンベルクにおけるキリスト論の問題を論述)。ISBN978-4-8184-0496-9
- 02 古屋安雄・倉松功・近藤勝彦・阿久戸光晴編集『歴史と神学—大木英夫教授喜寿記念献呈論文集』上巻 (共) 聖学院大学出版会, 2005/11 (「中間時の思想—ラインホルド・ニーバーに関する一断想」を執筆。52-92 頁所収)。ISBN978-4-915832-63-5

- 03 *Frühes Christentum und Religionsgeschichtliche Schule*. Festschrift zum 65. Geburtstag von Gerd Lüdemann. Herausgegeben von Martina Janßen, F. Stanley Jones, und Jürgen Wehnert. (共) Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 2011/5 (“Ernst Troeltsch und die Konsequenz des historischen Denkens”を執筆。205-216 頁所収)。ISBN978-3-525-53977-4
- 04 久保田浩編『越境する宗教史』(共) リトン, 2020/12 「(「宗教史学派の体系家」(トレルチ)に見るディシプリンの越境」を執筆。下巻, 217-237 頁所収)。ISBN978-4-86376-084-4
- 05 加藤泰史編『スピノザと近代ドイツ—思想史の虚軸』(単) 岩波書店, 2022 (第二部第一章「レッシングとスピノザ」を執筆。97-119 頁所収)。ISBN978-4-00-001089-4

3. 翻訳書

- 01 ゲルハルト・デリング「神と神々—ヨセフスと異教徒の宗教」(単) 1985/12 L.H.フェルトマン・秦 剛平共編『ヨセフス・ヘレニズム・ヘブライズム I』山本書店, 131-145, 465-469 頁。
- 02 エルンスト・トレルチ『信仰論』(単) 1997/04 (『近代キリスト教思想双書』第3巻, 教文館, A5 版, 441 頁。ISBN4-7642-7162-1
- 03 フリードリヒ・ヴィルヘルム・グラーフ『トレルチとドイツ文化プロテスタンティズム』(編集・共訳) 2001/01 聖学院大学出版会, A5 版, 312+7 頁(「序論—自由主義文化プロテスタンティズムのアクチュアルな意義について」(3-23 頁), 「宗教と個性—エルンスト・トレルチの宗教理論の根本問題について」(193-228 頁)を翻訳すると同時に, 「あとがき」(304-312 頁)を執筆)。ISBN978-4-915832-40-6
- 04 カール・バルト『十九世紀のプロテスタント神学』(中巻) (共訳) 2006/08 新教出版社, A5 版 (「6 レッシング」[77-116 頁]と「8 ヘルダー」[173-206 頁]を翻訳)。ISBN978-4-400-30212-1

- 05 カール・バルト『十九世紀のプロテスタント神学』（下巻）（共訳）
2007/10 新教出版社，A5 版（「11 シュライエルマッハー」〔11-75 頁〕，「12 ヴェークシャイダー」〔76-87 頁〕，「13 デ・ヴェッテ」〔88-101 頁〕，「14 マールハイネケ」〔102-114 頁〕，「15 パウル」〔115-132 頁〕，「16 トールック」〔133-147 頁〕，「17 メンケン」〔148-172 頁〕，「20 シュヴァイツァー」〔222-234 頁〕，「21 ドルナー」〔235-251 頁〕，「22 ミュラー」〔252-265 頁〕，「23 ローテ」〔266-280 頁〕，「24 ホーフマン」〔281-294 頁〕，「25 ベック」〔295-308 頁〕，「26 フィルマール」〔309-323 頁〕，「27 コールブリュッケ」〔324-338 頁〕，「29 リッチェル」〔356-369 頁〕を翻訳）。ISBN978-4-400-30213-1
- 06 ヴォルフハルト・パネンベルク『現代に生きる教会の使命』（共訳）
2009/01 聖学院大学出版会，四六判（「エキュメニカルな職務理解」〔146-176 頁〕を翻訳）。ISBN978-4-915832-86-4
- 07 日本ルター学会編訳『宗教改革者の群像』（共訳）2011/11 知泉書館，A5 版（ホルスト・ヴァイゲルト「セバスティアン・フランク」〔371-387 頁〕を翻訳）。ISBN978-4-86285-119-2
- 08 アウグスト・ベーク『解釈学と批判—古典的文獻学の精髓』（単）
2014/05 知泉書館，A5 版，400 頁。ISBN978-4-86285-186-4
- 09 F・W・グラーフ編『キリスト教の主要神学者』下巻，（共訳）
2014/09 教文館，A5 版，390+vii 頁（「ヨハン・ゲアハルト」〔9-30 頁〕，「リシャール・シモン」〔31-43 頁〕，「フィリップ・ヤコブ・シュペーナー／ヨハン・ヨアヒム・シュバルディング」〔45-68 頁〕，「フリードリヒ・シュライアマハー」〔69-105 頁〕，「ヨゼフ・クロイトゲン」〔107-126 頁〕，「セーレン・キルケゴール」〔127-150 頁〕，「アドルフ・フォン・ハルナック」〔173-190 頁〕，「アルフレッド・ロワジー」〔191-209 頁〕，「エルンスト・トレルチ」〔211-235 頁〕，「カール・バルト」〔277-318 頁〕，「ラインホルド・ニーバー／H・リチャード・ニーバー」〔319-354 頁〕，「カール・ラーナー」〔355-380 頁〕，

- 「日本語版へのあとがき」〔381-385 頁〕を翻訳)。ISBN978-4-7642-7385-9
- 10 シュライアマハー 『『キリスト教信仰』の弁証』(単) 2015/08 知泉書館, 四六版, 182+46+x 頁。ISBN978-4-86285-214-4
 - 11 F・W・グラーフ, 安酸敏眞監訳『真理の多形性—F・W・グラーフ博士来日記念講演集』(共訳) 2020/03 北海学園大学出版会, A5版, 302 頁。第四章(63-75 頁), 論文一(121-156 頁), 論文二(157-250 頁), 「私の日本滞在記」(253-273 頁)を翻訳。巻末の「解題 グラーフ博士と「真理の多形性」」(275-295 頁)も執筆。ISBN978-4-910236-00-1
 - 12 シュライアマハー 『キリスト教信仰』(単) 2020/12 教文館, A5版, 1095+xv 頁。ISBN978-4-7642-1812-3

4. 学術論文

- 01 「エルンスト・トレルチにおける“Kompromiß”の概念」(単) 1979/12 京都大学基督教学会『基督教学研究』第2号, 104-118 頁。
- 02 「エルンスト・トレルチにおける《歴史の神学》の構想」(単) 1982/12 京都大学基督教学会『基督教学研究』第5号, 76-89 頁。
- 03 “The Encounter between Japanese Intellectuals and Troeltsch: A Historical Review.” (単) 1985/02 *Mitteilungen der Ernst-Troeltsch-Gesellschaft*, Bd.3, 18-37.
- 04 Ernst Troeltsch as the Systematic Theologian of Radical Historicity. (単) 1985/05 *University Microfilms International*. No. 8522454. 336pp (ヴァンダービルト大学博士論文のマイクロフィルム版).
- 05 「エルンスト・トレルチと現代の思想的境位」(単) 1989/03 『盛岡大学紀要』第8号, 53-63 頁。
- 06 「比較文化の神学的考察」(単) 1989/06 盛岡大学比較文化研究センター『比較文化研究年報』第1号, 23-42 頁。

- 07 「歴史の真理と理性の真理—レッシングの命題について」(単)
1990/03 『盛岡大学紀要』第9号, 89-98頁。
- 08 「バルトのレッシング解釈」(単) 1991/03 『盛岡大学紀要』第10号,
123-133頁。
- 09 「レッシングの神学思想—序説」(単) 1991/07 京都大学基督教学会
『基督教学研究』第12号, 75-105頁。
- 10 「『歴史の終焉』についての一考察—F. フクヤマ, K. レーヴィット,
R. ニーバーの歴史理解に関する比較研究」(単) 1992/09 盛岡大学
比較文化研究センター『比較文化研究年報』第4号, 29-58頁。
- 11 「トレルチの *Glaubenslehre* 研究—再評価のための試論」(単)
1993/03 『盛岡大学紀要』第12号, 151-162頁。
- 12 「レッシングとゲッツェの論争—その最初の鏖張り合い」(単)
1994/01 『聖学院大学論叢』第6巻, 179-192頁。
- 13 「レッシングとスピリチュアリズムスの伝統」(単) 1995/01 『聖学
院大学論叢』第7巻第2号, 159-176頁。
- 14 「レッシングの「スピノザ主義」(1)」(単) 1996/01 『聖学院大学
論叢』第8巻第2号, 249-268頁。
- 15 「若きレッシングの宗教思想」(単) 1996/10 京都大学基督教学会『基
督教学研究』第16号, 157-179頁。
- 16 「レッシング宗教哲学の研究」(単) 1996/10 京都大学文学博士論文,
A4, iii+207頁。
- 17 「レッシングの「スピノザ主義」(2)」(単) 1997/02 『聖学院大学
論叢』第9巻第2号, 157-170頁。
- 18 「「ドイツ的自由」の問題性—ドイツ的自由の理念の思想史的考察」
(単) 1997/03 『聖学院大学総合研究所紀要』第11巻, 95-135頁。
- 19 「レッシングと劇詩『賢者ナータン』—レッシングの『人間性の思想』」
(単) 1997/09 『聖学院大学論叢』第10巻第1号, 139-162頁。
- 20 「レッシングの神観」『日本の神学』第37号(1998年), 9-32頁。
- 21 「近代プロテスタンティズムにおけるキリスト像の変遷(1)」(単)

- 1998/09 『聖学院大学論叢』第11巻第1号, 111-142頁。
- 22 「十九世紀のキリスト像—十九世紀中葉から二十世紀初頭にかけて」
(単) 1999/01 『聖学院大学論叢』第11巻第3号, 193-217頁。
- 23 「レッシングにおける真理探求の問題」(単) 1998/12 京都大学基督教学会『基督教学研究』第18号, 153-174頁。
- 24 「トレルチにおける「万有在神論」の思想」(単) 2000/02 『聖学院大学論叢』第12巻第2号, 183-199頁。
- 25 「トレルチとセバステイアン・フランク」(単) 2000/12 京都大学基督教学会『基督教学研究』第20号, 21-45頁。
- 26 「セバステイアン・フランクについて」(単) 2001/02 『聖学院大学論叢』第13巻第2号, 187-204頁。
- 27 「「万有在神論」(Panentheismus) についての研究(課題番号10610027)」(単) 2001/03 平成10年度～平成12年度科学研究費補助金(基盤研究(C)(2))研究成果報告書。A4版, 82頁。
- 28 「ルターとセバステイアン・フランク—「永遠の敵」?」(単) 2002/02 『聖学院大学論叢』第14巻第2号, 203-220頁。
- 29 「セバステイアン・フランクにおける「第四の信仰」」(単) 2002/03 日本ルター学会『ルターと宗教改革』第3号, 33-53頁。
- 30 「セバステイアン・フランクの根本思想—スピリチュアリズムと歴史認識」2003/03 『聖学院大学論叢』第15巻第2号, 343-363頁。
- 31 「セバステイアン・フランクの根本思想」(単) 2003/09 日本基督教学会編『日本の神学』第42号, 36-58頁。
- 32 「アメリカニズムと宗教」(単) 2003/11 『聖学院大学論叢』第16巻第1号, 103-128頁。
- 33 「もう一つの「レッシングが事を記す」」(単) 2003/12 『キリスト教と諸学』第19号, 76-122頁。
- 34 「ニーバー兄弟とアメリカ」2004/03 『聖学院大学論叢』第16巻第2号, 61-91頁。
- 35 「H・リチャード・ニーバーのアメリカ文化論」(単) 2004/02 『聖学

- 院大学総合研究所紀要』第28号, 143-181頁。
- 36 「現代神学におけるレッシングの影」(単) 2004/07 『東北学院大学キリスト教文化研究所紀要』第22号, 1-36頁。
- 37 「トレルチ, マイネッケ, ローゼンツヴァイク」(共) 2004/07 『人文論集』(北海学園大学人文学会) 28号, 67-131頁(佐藤貴史氏と共同執筆。「はじめに」と第一章を安酸が執筆, 第二章と「むすびにかえて」を佐藤が執筆)。
- 38 「セバスティアン・フランクにおける終末論と神秘主義」(単) 2005/03 『人文論集』(北海学園大学人文学会) 30号, 35-70頁。
- 39 「セバスティアン・フランクにおける終末論と神秘主義—プロテスタント的スピリチュアリズムの思想構造の分析(課題番号15520060)」(単) 2005/06 平成15年度～平成16年度科学研究費補助金(基盤研究(C)(2))研究成果報告書。A4版, 63頁。
- 40 「トレルチと「歴史主義」の問題」(単) 2005/12 『年報 新人文』(北海学園大学大学院文学研究科) 第2号, 6-83頁。
- 41 「トレルチと「キリスト教学」の理念」(単) 2005/12 京都大学基督教学会『基督教学研究』第25号(水垣教授古稀記念号), 191-212頁。
- 42 「トレルチの神学論—再評価のための全般的考察」(単) 2006/03 『人文論集』(北海学園大学人文学会) 33号, 1-37頁。
- 43 「トレルチと「歴史主義」の問題(承前)」(単) 2006/12 『年報 新人文』(北海学園大学大学院文学研究科) 第3号, 36-111頁。
- 44 “Lessing as a Proponent of Modern Dialectical Theism.” (単) 2007/03 『人文論集』(北海学園大学人文学会) 36号, 85-100頁。
- 45 「アウグスト・ベークと文献学」(単) 2007/10 『人文論集』(北海学園大学人文学会) 37号, 128-174頁。
- 46 「村岡典嗣と波多野精一—嚮応する二つの「学問的精神」」(単) 2008/03 『人文論集』(北海学園大学人文学会) 39号, 199-238頁。
- 47 「いま「キリスト教学」を問う—学問史的考察」(単) 2009/03 『キ

- リスト教学再考—2007-2008 年度のシンポジウム』（日本基督教学会北海道支部），1-18 頁。
- 48 「キリスト教理解とその方法について」（単）2009/03 『キリスト教学再考—2007-2008 年度のシンポジウム』（日本基督教学会北海道支部），35-51 頁。
- 49 「アウグスト・バークの解釈学」（単）2009/12 『年報 新人文科学』（北海学園大学大学院文学研究科）第 6 号，8-40 頁。
- 50 「解釈学と歴史主義—A・バークと J・G・ドロイゼンを中心に」（単）2010/03 『人文論集』（北海学園大学人文学会）45 号，143-167 頁。
- 51 「「思想史」の概念と方法について—問題史的研究の試み」（単）2010/07 『人文論集』（北海学園大学人文学会）46 号，97-145 頁。
- 52 「ニーバー²と「エルンスト・トレルチの影」（単）2010/09 『聖学院大学総合研究所紀要』第 48 号，137-199 頁。
- 53 「ドロイゼンの「探究的理解」について」（単）2010/12 『年報 新人文科学』（北海学園大学大学院文学研究科）第 7 号，166-214 頁。
- 54 「クリオとヘルメース」（単）2011/03 『人文論集』（北海学園大学人文学会）48 号，43-95 頁。
- 55 「ディルタイにおける解釈学と歴史主義」（単）2011/07 『人文論集』（北海学園大学人文学会）49 号，1-33 頁。
- 56 「シュライアーマッハーにおける一般解釈学の構想」（単）2011/12 『人文論集』（北海学園大学人文学会）50 号，23-59 頁。
- 57 「ブルトマン再考—実存的「歴史性」の概念の再検討」（単）2012/12 京都大学基督教学会『基督教学研究』第 32 号，33-56 頁。
- 58 「エルンスト・トレルチにおける歴史化の概念」（共）2013/03 『人文論集』（北海学園大学人文学会）54 号，83-120 頁（塩濱健児氏と共同執筆）。
- 59 “Ernst Troeltsch and German Historicism.”（単）2013/ *Mitteilungen der Ernst-Troeltsch-Gesellschaft*, Bd. 23, 未刊。
- 60 「レッシングのキリスト教—伝記的解釈の試み」（単）2013/12 京都

大学基督教学会『基督教学研究』第33号, 169-190頁。

- 61 「『神学史』的研究方法の妥当性と限界?—深井氏のブルトマン解釈についての一断想」(単) 2014/03 日本基督教学会北海道支部『ヨーロッパ神学史の新しい見方(日本基督教学会北海道支部公開シンポジウム記録第3号)』53-68頁。
- 62 「レッシングとメンデルスゾーンの友情—普遍的「人間性」の理想を追い求めて」(単) 2015/03 『人文学の新しい可能性』(平成25-26年度北海学園学術研究助成総合研究報告書), 223-244頁。
- 63 「「永遠の契約」か, それとも「和解」か?—キリスト教信仰と学問研究をめぐるシュライアマハーとヘーゲルの対立」(単) 2015/03 『人文論集』(北海学園大学人文学会) 58号, 29-52頁。
- 64 「^{いま}現在, あらためて『人文学』を問う」(単) 2015/10 *Waseda Rilas Journal* (早稲田大学総合人文科学研究センター) No. 3, 245-253.
- 65 「福沢諭吉と西周の留学体験—わが国の知識人と留学(その一)」(単) 2016/03 『人文論集』(北海学園大学人文学会) 60号, 121-142頁。
- 66 「シュライアマハーの『キリスト教信仰』についての一考察」(単) 2020/03 『人文論集』(北海学園大学人文学会) 68号, 179-189頁。
- 67 「恐れ／畏れを生きる——キリスト教思想史家の視点」(単) 2022/03 『宗教哲学研究』(京都大学宗教学研究室) 39号, 1-13頁。
ISBN978-4-8122-2117-4

5. 解説・解題

- 01 「訳者のことば」(単) カール・バルト, 佐藤司郎・安酸敏眞・戸口日出夫・酒井修訳『十九世紀のプロテスタント神学』(中巻)(共訳) 2006/08 新教出版社, 362-366頁。ISBN978-4-400-30212-1
- 02 「解説」(単) カール・バルト, 安酸敏眞・佐藤貴史・濱崎雅孝訳『カール・バルト著作集13 十九世紀のプロテスタント神学 下』(共訳) 2007/10 新教出版社, 371-383頁。ISBN978-4-400-30213-1
- 03 「解説あとがき」(単) アウグスト・バーク, 安酸敏眞訳『解釈学と

- 批判—古典文献学の精髓』2014/05 知泉書館, 371-381 頁。
ISBN978-4-86285-186-4
- 04 「監訳者あとがき」(単) F・W・グラーフ編, 安酸敏眞監訳『キリスト教の主要神学者 下 リシャール・シモンからカール・ラーナーまで』(共訳) 2014/09 教文館, 387-390 頁, ISBN978-4-7642-7384-9
- 05 「解題 シュライアマハーと『キリスト教信仰』」(単) シュライアマハー, 安酸敏眞訳『『キリスト教信仰』の弁証』2015/08 知泉書館, 135-175 頁。ISBN978-4-86285-214-4
- 06 「訳者あとがき」(単) シュライアマハー, 安酸敏眞訳『『キリスト教信仰』の弁証』2015/08 知泉書館, 177-182 頁。ISBN978-4-86285-214-4
- 07 「解題 グラーフ博士と「真理の多形性」」(単) F・W・グラーフ, 安酸敏眞監訳『真理の多形性』(共訳) 2020/03 北海学園大学出版会, 275-295 頁。ISBN978-4-910236-00-1
- 08 「解説」(単) エリザベス・シフトン, 穂田信子訳『平静の祈り』2020/12 新教出版社, 319-343 頁。ISBN978-4-21328-4
- 09 「解説—訳者あとがきにかえて」(単) シュライアマハー, 安酸敏眞訳『キリスト教信仰』2020/12 教文館, 1069-1094 頁。ISBN978-4-7642-1812-3
- 10 「解説」(単) セバスティアン・フランク, 福原嘉一郎訳『パラドクサ』2023/05 教文館, 347-378 頁。ISBN978-4-7642-9998-6

6. 編著

- 01 細川泰子, 安酸敏眞編『教育は愛なり』ヨルダン社, (単) 1989/06, 229 頁。ISBN4-8428-0033-X C0016
- 02 安酸敏眞・安酸庸祐編『安酸映一追悼集』アイワード, (共) 2005/02, 229 頁。
- 03 安酸敏眞・安酸庸祐編『安酸家の原風景』アイワード, (共) 2005/02, 146 頁。

7. その他

(1) 辞典・事典

- 01 大貫 隆・名取四郎・宮本久雄・百瀬文晃編『岩波キリスト教辞典』(単) 2002/06 岩波書店(「啓蒙主義」,「神学(プロテスタン
ト神学)」,「宗教史学派」,「新プロテスタンティズム」,「大学(近
世以降)」,「リッチェル」,「カント」,「新カント派」,「ドイツ・イ
デアリスムス」,「フランク, セバスチャン」,「神学(近世から現
代)」,「モナド論」,「フォイエルバッハ, ルートヴィヒ」,「倫理(倫
理主義的神の国)」,「新人文主義」,「調停神学」,「ティーク, ルー
トヴィヒ」,「ヘルマン, ヴィルヘルム」,「予定調和」,「ローフス」,
「シェリング」,「トレルチ」,「フィヒテ」,「ライプニッツ」,「ヴォッ
ペルミン, エルンスト」の項目を執筆)。ISBN978-4-00-080202-x
- 02 島蘭進・石井研士・下田正広・深澤英隆編『宗教学文献事典』(単)
2007/11 弘文堂(F.W. グラーフ『トレルチとドイツ文化プロテ
スタンティズム』, トレルチ『トレルチ著作集』, レッシング『賢
人ナータン』の項目を執筆)。ISBN978-4-3351-6048-6
- 03 井上順孝編『世界宗教百科事典』(単) 2012/12 丸善(株)出版事業
部(「プロテスタント概論」の項目を執筆)。ISBN978-4-621-
08577-6
- 04 東京神学大学神学会編『新キリスト教組織神学事典』(単)
2018/03 教文館(「トレルチ」の項目 [pp.281-285] を執筆)。
ISBN978-4-7642-4104-6
- 05 『ドイツ哲学・思想事典』(単) 2018/11 入稿, ミネルヴァ書房(「ト
レルチ」,『賢人ナータン』,『人類の教育』の項目), 未刊行。
- 06 『新版 キリスト教大事典』(単) 2019/09 入稿, 教文館(「近代ブ
ロテスタント史」,「ヴィーコ」,「ヴィンデルバント」,「コーエン」,
「解釈学」,「シュライアマハー」,「トレルチ」,「キリスト教の絶対
性」,「レッシング」,「断片論争」,「ネオロギー」の項目), 未刊行。
- 07 『啓蒙思想の百科事典』(単) 2023/01, 丸善(株)出版事業部(「18 世

(2) 学会発表

- 01 「ラインホルド・ニーバーの歴史理解とその問題性」(単)
1977/03 日本基督教学会関西支部会。
- 02 「レッシングの問い」(単) 1987/04 日本基督教学会関東支部会。
- 03 「レッシングにおける歴史の問題」(単) 1987/09 日本宗教学会第
46 回学術大会。
- 04 “Was ist, der systematische Einheitsgedanke von Ernst Troeltschs
Lebenswerk?” (単) 1988/09 第3回国際エルンスト・トレルチ学
会(於: 西独アウクスブルク市)。
- 05 「トレルチの *Glaubenslehre* について」(単) 1992/09 日本基督教
学会第40回学術大会。
- 06 「レッシングとスピリチュアリズムの伝統」(単) 1994/10 日本
基督教学会第42回学術大会。
- 07 「レッシングの神観」(単) 1997/08 日本基督教学会第45回学術
大会。
- 08 「セバ스티アン・フランクの『パラドクサ』について」(単)
2000/09 日本ルター学会2000年度学術大会。
- 09 「セバ스티アン・フランクの霊性主義における歴史批判の意義」
(単) 2002/09 日本宗教学会第61回学術大会。
- 10 「セバ스티アン・フランクの根本思想」(単) 2002/09 日本基督
教学会第50回学術大会。
- 11 “Lessing as a Proponent of Modern Dialectical Theism.” (単)
2006/12 Lessing Society Session, MLA Annual Convention,
Philadelphia, U.S.A.
- 12 「いま「キリスト教学」を問う」(単) 2007/06 日本基督教学会北
海道支部公開シンポジウム「キリスト教学再考」(2007.6.30)。
- 13 「キリスト教理解とその方法について」(単) 2008/06 日本基督教

学会北海道支部公開シンポジウム「キリスト教学と組織神学」
(2008.6.28)。

- 14 「J・G・ドロイゼンにおける歴史主義と解釈学」(単) 2010/09 日本宗教学会第 69 回学術大会。
- 15 “Ernst Troeltsch and German Historicism.” (単) 2011/10 The 10th International Ernst-Troeltsch-Kongress, Ernst-Troeltsch Forschungskolloquium (10. Oktober 2011), München, Germany.
- 16 「「永遠の契約」か、それとも「和解」か？」(単) 2014/12 京都大学基督教学会第 13 回学術大会 (2014.12.13)。
- 17 「シュライアマハーの『キリスト教信仰』についての一考察」(単) 2019/09 日本宗教学会第 78 回学術大会。

(3) 学術講演・公開講座

- 01 「キリスト教と現代—トレルチの現代的レリヴァンス」(単) 1988/08 「大学キリスト者の会」。
- 02 「レッシングと Deutscher Idealismus」(単) 2001/01 京都ヘーゲル讀書會冬季研究會。
- 03 「もう一つの「レッシングが事を記す」」(単) 2002/10 聖学院大学 2002 年度秋のキリスト教週間「キリスト教と諸学」(2002.10.23)。
- 04 「現代神学におけるレッシングの影」(単) 2003/11 東北学院大学キリスト教文化研究所 (2003.11.28)。
- 05 「近代合理主義と宗教」(単) 2005/11 北海学園大学人文学部第 13 回市民公開講座 (2005.11.5)。
- 06 「近代西欧に見る死生観の変遷」(単) 2007/11 北海学園大学人文学部第 15 回市民公開講座 (2007.11.24)。
- 07 「解釈学と歴史主義—A・ベークと J・G・ドロイゼンを中心に」(単) 2010/01 京都ヘーゲル讀書會冬季研究會 (2010.1.10 京大会館)。

- 08 「ニーバー²と「エルンスト・トレルチの影」」(単) 2010/05 ラインホルド・ニーバー研究会第4回例会(2010.5.15 聖学院本部)。
- 09 「ニーバー再考—その歴史理解を中心に」(単) 2013/02 ラインホルド・ニーバー研究会第6回例会(2013.2.18 聖学院本部)。
- 10 「思想史の研究方法について—キリスト教思想史研究の工房より」(単) 2014/01 思想史研究会(2014.1.22 北海学園大学)。
- 11 「ニーバーのルネサンス解釈の思想史的考察」(単) 2014/02 ラインホルド・ニーバー研究会例会(2014.2.28 聖学院本部)。
- 12 「現在、あらためて《人文学》を問う」(単) 2014/12 私立大学戦略的研究基盤形成支援事業「近代日本の人文学と東アジア文化圏—東アジアにおける人文学の危機と再生—」, キックオフ・シンポジウム「新しい人文学の地平を求めて—ヨーロッパの学知と東アジアの人文学」(2014.12.06 早稲田大学小野記念講堂 14:00-18:00)。
- 13 「レッシングの立場—汎神論論争とのからみあいにおいて」(単) 2015/07 第13回一橋哲学フォーラム第3回スピノザ・コネクション(2015.8.25 一橋大学佐野書院 12:40-19:40)。
- 14 「ドイツ思想史の一断面—ベルリン墓標めぐり」(単) 2018/11 日本法政学会講演(2018.11.3 北海学園大学 50 番教室)。
- 15 「人文学をどう再構築するか—新しい人文学への一つの試論」(単) 2018/12 私立大学戦略的研究基盤形成支援事業シンポジウム「新しい人文学への展望—過去・現在・未来」(2018.12.22 早稲田大学 戸山キャンパス 33 号館 3 階第一会議室 13:30-17:30)。
- 16 「「わたしの著書」— Einzelgänger の足跡」(単) 2022/08 日本基督教学会北海道支部会(2022.08.11)。
- 17 「キリスト教と人格教育— 朴憲郁先生の主題講演へのコメント」(単) 2022/09 日本基督教学会第70回学術大会(2022.09.01)。
- 18 「人格教育のゆくえ」(単) 2022/10 第325回経営者セミナー, 一般社団法人倫理研究所・札幌大通り倫理法人会(2022.10.08)。

- 19 「《キリスト教学》の再検討 ― 有賀鐵太郎遺品資料を踏まえて」
(単) 2022/12 京都大学キリスト教学研究室創立 100 周年記念シンポジウム (2022.12.17)。

(4) 書評

- 01 E. トレルチ著, 近藤勝彦訳『歴史主義とその諸問題 (下)』(ヨルダン社), (単) 1988/06 『本のひろば』第 360 号 (1988 年 6 月号), 24-25 頁。
- 02 フランクリン・L・バウマー著, 鳥越輝昭訳『近・現代ヨーロッパの思想』(大修館書店), (単) 1993/02 『いずみ』(盛岡大学・盛岡大学短期大学部図書官報) 第 34 号, 5 頁。
- 03 B. A. Gerrish. *Continuing the Reformation: Essays on Modern Religious Thought* (Chicago: University of Chicago Press, 1993)
(単) 1994/08 『聖学院大学総合研究所 Newsletter』第 4 巻第 1 号, 28-29 頁。
- 04 芦名定道著『ティリッヒと弁証神学の挑戦』(創文社), (単) 1996/12 『宗教研究』(日本宗教学会) 310 号 (第 70 巻第 3 輯), 158-164 頁。
- 05 近藤勝彦著『トレルチ研究 (上・下巻)』(教文館), (単) 1997/08 『日本の神学』(日本基督教学会) 第 36 号, 83-88 頁。
- 06 “Geschichtsgestaltung: Troeltsch-Deutung in Japan” (単) 1999/09 *Mitteilungen der Ernst-Troeltsch-Gesellschaft*, Bd. 12, 223-230.
- 07 Peter C. Hodgson. *God's Wisdom: Toward a Theology of Education* (Louisville, Kentucky: Westminster John Knox Press, 1999), (単) 2000/08 『聖学院大学総合研究所 Newsletter』第 10 巻第 2 号, 19-20 頁。
- 08 Mark D. Chapman. *Ernst Troeltsch and Liberal Theology: Religion and Cultural Synthesis in Wilhelmine Germany* (Oxford: Oxford University Press, 2001). (単) 2002/12 *Mitteilungen der*

- Ernst-Troeltsch-Gesellschaft*. Band 15 (München, 2002), 102-109.
- 09 Gérard Vallée. *Soundings in G. E. Lessings Philosophy of Religion* (Lanham, New York, & Oxford: University Press of America, 2000) (単) 2003/12 *Studies in Religion / Sciences Religieuses* 31/2, 250-251.
- 10 藺田坦『クザーヌスと近世哲学』(創文社), (単) 2004/09 『日本の神学』(日本基督教学会) 第 43 号, 216-224 頁。
- 11 フリードリヒ・ヴィルヘルム・グラーフ著, 近藤正臣・深井智朗訳『ハルナックとトレルチ』(聖学院大学出版会), (単) 2007/12 『年報 新人文』 第 4 号, 322-329 頁。
- 12 石川明人『ティリッヒの宗教芸術論』(北海道大学出版会), (単) 2008/09 『基督教學』(北海道基督教学会) 第 43 号, 33-38 頁。
- 13 フリードリヒ・ヴィルヘルム・グラーフ著, 野崎卓道訳『プロテスタンティズム—その歴史と現状』(教文館), (単) 2008/10 『本のひろば』 第 608 号 (2008 年 11 月号), 2-3 頁。
- 14 梅津順一『ヴェーバーとピューリタニズム—神と富との間』(新教出版社), (単) 2011/09 『日本の神学』(日本基督教学会) 第 50 号, 156-160 頁。
- 15 小柳敦史『トレルチにおける歴史と共同体』(知泉書館), (単) 2016/11 『宗教研究』(日本宗教学会) 第 387 号 (第 90 巻第 3 輯), 141-147 頁。
- 16 ラインホルド・ニーバー著, 高橋義文・柳田洋夫訳『人間の運命 キリスト教的歴史解釈』(聖学院大学出版会), (単) 2017/07 『本のひろば』 第 716 号 (2017 年 8 月号), 10-11 頁。
- 17 菊地順『ティリッヒと逆説的合一の系譜』(聖学院大学出版会), (単) 2018/08 『本のひろば』 第 730 号 (2018 年 9 月号), 14-15 頁。
- 18 加納和寛『アドルフ・フォン・ハルナックにおける「信条」と「教義」』(教文館), (単) 2019/12 『本のひろば』 第 744 号 (2019 年

12月号), 18-19頁。

- 19 ラインホルド・ニーバー, 高橋義文・柳田洋夫訳『悲劇を越えて』(教文館), (単) 2023/02 『本のひろば』第782号(2023年2月号), 8-9頁。

(5) 奨励 (一部のみ収録)

- 01 「たった一度の人生」(単) 1993年10月28日聖学院大学全学礼拝奨励, 聖書:伝道の書 第3章16-22節(『つむじ風に巻き上げられて』(共同文化社, 2021年)176-183頁に収録)。
- 02 「ナルニアの国への入り口」(単) 1994年5月6日聖学院大学全学礼拝奨励, 聖書:マルコ福音書 第10章13-16節(『つむじ風に巻き上げられて』184-190頁に収録)。
- 03 「A Single Eye all Light?」(単) 1997年6月23日聖学院大学全学礼拝奨励, 聖書:マタイ福音書第6章22-23日(『つむじ風に巻き上げられて』190-198頁に収録)。
- 04 「道——キリストを歩く」(単) 1998年7月2日聖学院大学全学礼拝奨励, 聖書:ヨハネの第一の手紙第2章6節;ヨハネの第二の手紙4節
- 05 「脚下照顧」(単) 1999年12月1日聖学院大学全学礼拝奨励, 聖書:ローマ人への手紙 第13章12-14節。
- 06 「麦と毒麦のたとえ」(単) 2001年10月24日聖学院大学全学礼拝奨励, 聖書:マタイ福音書 第13章24-30節(『つむじ風に巻き上げられて』198-205頁に収録)。
- 07 「丘の上の町(a city upon a hill)」2003年5月9日聖学院大学全学礼拝奨励, 聖書:マタイ福音書 第5章13-16節(『つむじ風に巻き上げられて』205-213頁に収録)。

(6) 随筆・研究ノート

- 01 「我が国におけるエルンスト・トレルチ受容史(1)」(単) 1987/06

- 『形成』 No. 198, 20-25 頁。
- 02 「我が国におけるエルンスト・トレルチ受容史(2)」(単) 1987/07
『形成』 No. 199, 11-18 頁。
- 03 「我が国におけるエルンスト・トレルチ受容史(3)」(単) 1987/09
『形成』 No. 201, 28-33 頁。
- 04 「キリスト教教育における『神聖なる実験』」(単) 1988/02 『学苑
だより』(盛岡大学) 第14号, 5 頁。
- 05 「ポスト・モダンのキリスト教神学の可能性を求めて」(単)
1988/11 『教会と聖書』 1988 年 11 月号, 49 頁。
- 06 「キリスト教と現代—トレルチの現代的レリヴァンス」(単)
1989/02 『「大学キリスト者」紀要』 第6号, 7-15 頁。
- 07 「細川泰子先生のキリスト教教育理念」(単) 1992/09 細川泰子先
生追悼集刊行会『細川泰子先生追悼集』, 125-129 頁。
- 08 「ニーバーからトレルチへ, そして再びニーバーへ」(単) 1992/06
『形成』 No. 258/259, 55-63 頁。
- 09 「アメリカにおけるトレルチの再評価」(単) 1993/02 『福音と世
界』 1993 年 2 月号, 49-51 頁。
- 10 「たった一度の人生」(単) 1994/12 『緑信叢書』(聖学院大学・女
子聖学院短期大学宗教センター) 第16号, 24-29 頁。
- 11 「真理探求者レッシングに魅せられて」(単) 1998/11 『創文』 No.
404, 22-24 頁。
- 12 「武藤先生の思い出」(単) 2000/03 武藤一雄先生御夫妻追悼文集
編集委員会編『無きが如くに有りて生く』燈影社, 188-191 頁。
- 13 「脚下照顧」(単) 2000/10 『緑信叢書』(聖学院大学・女子聖学院
短期大学宗教センター) 第22号, 51-55 頁。
- 14 「海外特別研究期間報告」(単) 2001/01 『Seigakuin University
General Research Institute Newsletter』 Vol. 10-4, 15-16 頁。
- 15 「図書館とわたし—知識の森の必要性」(単) 2001/04 『ぱびるす』
第32号, 3 頁。

- 16 「『夢追い人』の半生—Intellectual Autobiography」(単) 2003/03
聖学院大学人文学部欧米文化学科ホームページ, 「欧米の広場」
Topics, in: http://www.seigakuin-univ.ac.jp/admission/oubei/library/topics_09.html
- 17 「丘の上の町」(単) 2004/05 『緑信叢書』(聖学院大学キリスト教
センター) 第30号, 54-59頁。
- 18 「安酸家の原風景—安酸映一の生涯とその家族的背景」(単)
2005/02 安酸敏眞・安酸庸祐編『安酸家の原風景』アイワード,
31-77頁。
- 19 「『夢追い人』の半生—Intellectual Autobiography」(単) 2005/02
安酸敏眞・安酸庸祐編『安酸家の原風景』アイワード, 124-144
頁。
- 20 「マイセン磁器とレッシング」(単) 2005/03 北海学園大学人文学
部『人文フォーラム』22号(2005.3), 14-15頁。
- 21 「レッシングと図書館」(単) 2006/03 北海学園大学『図書館だよ
り』第28巻第1号, 4頁。
- 22 「遠い日の語らい」(単) 2009/01 『本のひろば』第611号(2009
年3月) 1頁。
- 23 「「読む」ことと「書く」こと」(単) 2009/03 北海学園大学人文
学部『人文フォーラム』30号(2009.3), 8-9頁。
- 24 「「新しい人文学」をめざして」(単) 2011/03 『北海学園教育開発
ニュース』第1号(2011.3), 3頁。
- 25 「ボルゲーゼ美術館におけるベルニーニ体験」(単) 2013/03 『平
成24年度 ヨーロッパ研修旅行』(ヨーロッパ研究会), 56-58頁。
- 26 「『神学史』的研究方法の妥当性と限界—深井氏のブルトマン解釈
についての一断想」(単) 2014/02 日本基督教学会北海道支部『小
冊子』第3号。
- 27 「オーストリア図書館紀行」(単) 2015/04 『図書館だより』第37
巻第1号, 6-10頁。

- 28 「新しい人文学の学知を求めて—人文学部の改革私案—」(単)
2014/02 『北の大地から』(北海学園大学人文学部開設 20 周年記念誌) 168-184 頁。
- 29 「ユニバーサル化した大学のただ中で—自分で考える力 育む教育を—」(単) 2015/03 『北海道新聞』(夕刊) 2015 年(平成 27 年) 5 月 18 日(水曜日), 第 5 面(文化欄) 囲み記事
- 30 「人文学を学ぶ意義—「パンのための学問」がもてはやされる現代において」(単) 2015/07 『創文』 2015 夏 No. 18, 1-3 頁。
- 31 「「文化国家」とわが国の文教政策」(単) 2015/12 『図書館だより』 第 37 巻第 3 号, 2-4 頁。
- 32 「大学図書館の意義」(単) 2016/04 『図書館だより』 第 38 巻第 1 号, 1 頁。
- 33 「北海岳友会創立 60 周年に寄せて」(単) 2017/12 北海学園大学 II 部北海岳友会会報『こまくさ』 第 10 号, 1 頁。
- 34 「会報十五号の発刊を祝して」(単) 2018/03 『謝学』 第十五号, 2 頁。
- 35 「『日本生産性本部』での日々」(単) 2018/07 『せいさんせい』(北海道生産性本部) Summer No. 254 (2018.7.1) 3 頁。

(7) 翻訳 (単行本として刊行されたものを除く)

- 01 G.E. レッシング「人類の教育」(単) 1996/09 『聖学院大学論叢』 第 9 巻第 1 号, 119-138 頁。
- 02 フリードリヒ・ヴィルヘルム・グラーフ「真理の多形性—ドイツ文化プロテスタンティズムのアクチュアルな意義について (2000 年 5 月 18 日, 京都大学大学院における講演)」(単) 2000/12 京都大学基督教学会『基督教学研究』 第 20 号, 113-135 頁。
- 03 フリードリヒ・ヴィルヘルム・グラーフ「人格と人間の尊厳—現代の倫理的紛争におけるエルンスト・トレルチ」(単) 2001/03 『紀要』(東京神学大学総合研究所) 第 4 号, 51-74 頁。

- 04 フリードリヒ・ヴィルヘルム・グラーフ「近現代文化における宗教（抄訳）」（単）2006/07 『人文論集』（北海学園大学人文学会）34号，103-171頁。
- 05 フランクリン・バウマー『西欧思想—中世から現代に至る西欧思想史』監修（安酸ゼミ翻訳）2009/02 スタジオパイカ，132+ii頁。
- 06 「アウグスト・ベーク『文献学的諸学問のエンチクロペディーならびに方法論』—翻訳・註解（その1）」（単）2008/07 『人文論集』（北海学園大学人文学会）40号，1-58頁。
- 07 「アウグスト・ベーク『文献学的諸学問のエンチクロペディーならびに方法論』—翻訳・註解（その2）」（単）2008/12 『人文論集』（北海学園大学人文学会）41号，53-94頁。
- 08 「アウグスト・ベーク『文献学的諸学問のエンチクロペディーならびに方法論』—翻訳・註解（その3）」（単）2009/03 『人文論集』（北海学園大学人文学会）42号，213-281頁。
- 09 「アウグスト・ベーク『文献学的諸学問のエンチクロペディーならびに方法論』—翻訳・註解（その4）」（単）2009/07 『人文論集』（北海学園大学人文学会）43号，27-51頁。
- 10 「アウグスト・ベーク『文献学的諸学問のエンチクロペディーならびに方法論』—翻訳・註解（その5）」（単）2009/11 『人文論集』（北海学園大学人文学会）44号，57-95頁。
- 11 ジョン・パスモア『人間の完成する可能性』（抄訳）（単）2012/07 『人文論集』（北海学園大学人文学会）52号，1-37頁。
- 12 「アウグスト・ベーク『文献学的諸学問のエンチクロペディーならびに方法論』—翻訳・註解（その6）」（単）2013/08 『人文論集』（北海学園大学人文学会）55号，39-102頁。
- 13 「アウグスト・ベーク『文献学的諸学問のエンチクロペディーならびに方法論』—翻訳・註解（その7）」（単）2014/03 『人文論集』（北海学園大学人文学会）56号，119-189頁。

- 14 シュライアマハー『キリスト教信仰』の翻訳と注解(その一)(単)
2017/03 『人文論集』(北海学園大学人文学会) 62 号, 75-119 頁。
- 15 シュライアマハー『キリスト教信仰』の翻訳と注解(その二)(単)
2017/08 『人文論集』(北海学園大学人文学会) 63 号, 29-57 頁。
- 16 シュライアマハー『キリスト教信仰』の翻訳と注解(その三)(単)
2018/03 『人文論集』(北海学園大学人文学会) 64 号, 43-95 頁。

(8) 研究報告

- 01 「レッシングにおける歴史の問題」(単) 1988/03 『宗教研究』(日本宗教学会) 第 61 巻第 4 輯 275 号, 73-74 頁。
- 02 「セバ스티アン・フランクの霊性主義における歴史批判の意義」
(単) 2003/03 『宗教研究』(日本宗教学会) 第 76 巻第 4 輯 335 号,
401-402 頁。
- 03 「J・G・ドロイゼンにおける歴史主義と解釈学」(単) 2011/03
『宗教研究』(日本宗教学会) 第 84 巻第 4 輯, 263-265 頁。
- 04 「新しい人文学の学知を求めて—人文学部の改革私案」(単)
2012/03 『新人文主義の位相—基礎的課題』(平成 22・23 年度北
海学園学術研究助成共同研究報告書), 3-22 頁。
- 05 シュライアマハー『「キリスト教信仰」の弁証』(単) 2015/08 知
泉書館書, 182+46+x 頁(2. 翻訳書 10 と内容的にはほぼ同一)。

(9) 雑録

- 01 「形成二〇〇号を祝して(2)」(単) 1987/09 『形成』No. 201, 11
頁。
- 02 「現代と宗教」(単) 1988/09 『盛岡大学第 10 回公開講座のご案内
—現代を生きる』, 5-6 頁。
- 03 「解説あとがき」(単) 1989/06 細川泰子『教育は愛なり』ヨルダ
ン社, 225-229 頁。
- 04 「学者の悲しいさがか…」(単) 1992/02 『いずみ』(盛岡大学・盛

- 岡大学短期大学部図書官報) 第 32 号, 3 頁。
- 05 「つむじ風に巻き上げられて」(単) 1994/06 聖学院大学・女子聖学院短期大学『全学礼拝週報 Chapel News』1994 年 6 月 No. 6, 1 頁。
 - 06 「新刊案内」(単) 2002/03 『聖学院大学欧米文化学科 Newsletter』No. 1, 第 10 面。
 - 07 「新任教員あいさつ・自己紹介」(単) 2004/05 『北海学園大学学報』第 56 号 (2004 年 5 月 15 日), 6 頁。
 - 08 「新入文学の形成」(単) 2004/08 北海学園大学人文学部『人文フォーラム』21 号 (2004. 8), 8 頁。
 - 09 「編集後記」(単) 2004/08 北海学園大学人文学部『人文フォーラム』21 号 (2004. 8), 21 頁。
 - 10 「あとがき」(単) 2005/02 安酸敏眞・安酸庸祐編『安酸映一追悼集』アイワード, 229 頁。
 - 11 「まえがき」(単) 2005/02 安酸敏眞・安酸庸祐編『安酸家の原風景』アイワード, 3-6 頁。
 - 12 「編集後記」(単) 2005/03 北海学園大学人文学部『人文フォーラム』22 号 (2005. 3), 19 頁。
 - 13 「編集後記」(単) 2005/03 北海学園大学大学院文学研究科『年報新入文学』1 号 (2005. 3), 262 頁。
 - 14 「歴史の背景にある思想世界を探る」(シリーズ学問は楽しい 6) (単) 2005/06 北海学園大学『大学案内 2006』, 59 頁。
 - 15 「編集後記」(単) 2007/12 北海学園大学大学院文学研究科『年報新入文学』4 号 (2007. 12), 341 頁。
 - 16 「まえがき」(単) 2009/02 フランクリン・バウマー『西欧思想—中世から現代に至る西欧思想史』監修 (安酸ゼミ翻訳), スタジオパイカ, i-ii 頁。
 - 17 「英米文化学科 1 年生のみなさんへ」(単) 2009/03 北海学園大学人文学部『英米文化学科 1 年生に薦めたい本—第 1 集』, 扉頁。

- 18 「編集後記」(単) 2009/12 北海学園大学大学院文学研究科『年報
新人文学』 6号 (2009. 12), 199 頁。
- 19 「はじめに」(単) 2010/04 北海学園大学『履修の手引き 2010 年
度(平成 22 年度) 日本文化学科・英米文化学科』 巻頭。
- 20 「人文学部への招待」(単) 2010/06 北海学園大学人文学部ホーム
ページ <http://www.jin-hgu.jp/information/index.html>。
- 21 「巻頭言 神は細部に宿る」(単) 2010/07 北海学園大学『人文
フォーラム』 第 33 号, 1 頁。
- 22 「巻頭言 ふるさとの心象」(単) 2011/03 北海学園大学『人文
フォーラム』 第 34 号, 1 頁。
- 23 「送別の辞」(単) 2011/03 北海学園大学『人文論集』 第 48 号,
1-2 頁。
- 24 「はじめに」(単) 2011/04 北海学園大学『履修の手引き 2011 年
度(平成 23 年度) 日本文化学科・英米文化学科』 巻頭。
- 25 「人文学部で学ぶ学生諸君へ」(単) 2011/04 北海学園大学人文学
部ホームページ <http://www.jin-hgu.jp/information/index.html>。
- 26 「巻頭言 明るい時代の人間性」(単) 2011/07 北海学園大学『人
文フォーラム』 第 35 号, 1 頁。
- 27 「巻頭言 二十歳の季節」(単) 2012/03 北海学園大学『人文フォー
ラム』 第 36 号, 1 頁。
- 28 「人文学の新しい学知をめざして」(単) 2012/03 『北海学園大学
学報』。
- 29 「東北の復興について」(単) 2012/03 『北海学園大学 学報』。
- 30 「日本文化の古層—『日本文化演習報告書』 発行に寄せて」(単)
2012/03 『平成 23 年度日本文化演習報告書』, 巻頭。
- 31 「人文学部で学ぶあなたへ」(単) 2012/04 北海学園大学人文学部
ホームページ <http://www.jin-hgu.jp/information/index.html>。
- 32 「巻頭言 翻訳についての雑感」(単) 2012/07 北海学園大学『人
文フォーラム』 第 37 号, 1 頁。

- 33 「人文学部のカリキュラム改革について—その必要性, 課題, 基本的方向性」(単) 2012/11 人文学部の第 10 回教授会 (2012 年 11 月 29 日) にて配布。
- 34 「カリキュラム改革について」(単) 2013/03 北海学園大学『人文フォーラム』第 38 号, 1 頁。
- 35 「新しい日本文化理解の可能性—『日本文化演習報告書』第 2 号に寄せて」(単) 2013/03 『平成 24 年度日本文化演習報告書』, 巻頭。
- 36 「ブロック大学英語研修のすすめ—「国際文化演習報告書」の発行に寄せて」(単) 2013/03 『国際文化演習ブロック大学報告書 2012』, 1 頁。
- 37 「はしがき」(単) 2013/03 『ヨーロッパ研修旅行』(ヨーロッパ研究会), 1-3 頁。
- 38 「編集後記」(単) 2013/03 『ヨーロッパ研修旅行』(ヨーロッパ研究会), 62 頁。
- 39 「献辞」(単) 2011/03 北海学園大学『人文論集』第 54 号, 1-2 頁。
- 40 「「人文学の新しい可能性」をふり返って」(単) 2013/08 北海学園大学『人文フォーラム』第 39 号, 6-7 頁。
- 41 「人文学の新しい可能性—人文学部開設 20 周年記念シンポジウム」(単) 2013/09 『北海学園大学 学報』(2013 年 9 月 1 日) 第 1 面
- 42 「送る言葉」(濱忠雄先生)(単) 2014/03 北海学園大学『人文論集』第 56 号, 14-15 頁。
- 43 「巻頭言 新入文学についての愚考」(単) 2014/12 『年報 新入文学』第 11 号, 1-4 頁。
- 44 「はじめに」(単) 2015/03 『人文学の新しい可能性』(平成 25-26 年度北海学園学術研究助成総合研究報告書), 1-3 頁。
- 45 「送る言葉」(常見信代先生)(単) 2016/03 北海学園大学『人文論集』第 60 号, 15-16 頁。
- 46 「「グローバル人材」の育成」(単) 2017/05 『北海学園大学 大学

案内 2018』 1 頁。

- 47 「伝統を継承しつつ将来を切り拓く」(単) 2017/06 北海学園大学『学報』第 110 号, 第 1 面。
- 48 「AIM HIGH (望みを高く持つ)」(単) 2017/06 北海学園大学『学報』第 110 号, 第 2 面。
- 49 「プロフィールと学長としての抱負」(単) 2017/09 北海学園大学同窓会『豊平會報』第 79 号, 第 2 面。
- 50 「ミッションスクールたれ」(単) 2017/09 北海学園大学『学報』第 111 号, 第 1 面。
- 51 「学長室からの光景」(単) 2017/09 北海学園大学『学報』第 111 号, 第 2 面。
- 52 「北海学園大学の研究力」(単) 2017/11 『未知なる道を切り拓く北海学園大学の研究力』裏表紙(ホームページにもほぼ同様の内容を掲載)。
- 53 「グローバル化の時代に地域と世界をつなぐ有為な人材の育成を目指して」2018/01 『朝日新聞』1 月 1 日号。
- 54 「『文友』第四〇号の発刊によせて」(単) 2018/03 『文友』第 40 号, 7 頁。
- 55 「献辞」(買買提先生・本城誠二先生)(単) 2018/03 北海学園大学『学園論集』第 175 号, i-ii 頁。
- 56 「北海学園大学体育会ボクシング部創立 50 周年に向けて」(単) 2018/10 『北海学園大学体育会ボクシング部創立 50 周年記念誌』1 頁。
- 57 「開会挨拶」(単) 2018/03 北海学園大学開発研究所『開発研究所六十年史』179-180 頁。
- 58 「「地域と世界をつなぐ人材」の育成をめざして」(単) 2018/05 『北海学園大学 大学案内 2019』1 頁。
- 59 「海外留学に挑戦しよう」(単) 2018/04 『2018 年度留学ガイド』1 頁。

- 60 「社会人としての第一歩」(単) 2018/03 北海学園大学『学報』第113号, 第1面。
- 61 「卒業アルバムの発刊によせて」2018/06 北海学園大学『2018 北海学園大学卒業アルバム』024 頁。
- 62 「新しい教学と経営のシステムの必要性」2019/01 『北海学園大学教育開発ニュース』第45号, 2 頁。
- 63 「『北翼』第五六号の発刊を祝して」2019/03 北海学園大学体育会『北翼』56号, 3 頁。
- 64 「『文友』第四一号の発刊によせて」(単) 2019/03 北海学園大学文化協議会本部『文友』第41号, 7 頁。
- 65 「卒業アルバムの発刊によせて」2019/06 北海学園大学『2019 北海学園大学卒業アルバム』024 頁。
- 66 「未知なる道を切り拓く北海学園大学の研究力」2019/06 『未知なる道を切り拓く北海学園大学の研究力』裏表紙。
- 67 「祝辞」2019/10 北海学園大学少林寺拳法部創部五十周年記念誌『拳友』7 頁。
- 68 「卒業アルバムの発刊によせて」2020/06 北海学園大学『2020 北海学園大学卒業アルバム』024 頁。
- 69 「第七回シンポジウムのバックストーリー——深井智朗氏の研究不正事件とそこに含まれる人文学／人文科学の重要問題——」(単) 2020/09 『人文論集』第69号 2-11 頁。
- 70 「With コロナ時代の学びについて——モバイルな形態の新しい学び模索すべきではないか」(単) 2020/11 『全私学新聞』令和2年11月13日発行, 第1面「論壇」。
- 71 「アフターコロナの大学についての提言」(単) 2021/03 私立大学情報教育協会『大学と情報』(2020年度 No. 2) 巻頭言。
- 72 「シュライアマハーの『キリスト教信仰』を訳し終えて」(単) 2021/03 『週刊読書人』2021年3月12日発行, 第8面。
- 73 「ありふれたもの」(単) 2021/03 北海学園大学『学報』第125号,

第 1 面。

- 74 「北海学園大学の研究力」 2021/03 『未知なる道を切り拓く北海学園大学の研究力』裏表紙。
- 75 「図書館についての私的断想—北海学園大学図書館学課程 50 周年を祝して」(単) 2021/03 『北海学園大学図書館学課程 50 周年記念誌』 8-11 頁。
- 76 「「明けない夜」と「暮れない日」」(単) 2022/03 北海学園大学『学報』第 129 号, 第 1 面。
- 77 「北海学園大学の沿革と将来展望」(単) 2023/03 日本私立大学協会北海道支部『創立 60 周年記念誌』。
- 78 「二期六年の学長職を辞するにあたって」(単) 2023/03 北海学園大学『学報』第 132 号, 第 1 面。

(10) インタビュー・取材記事

- 01 「今度は日本語で」 1987/10 『中外日報』昭和 62 年 10 月 2 日号, 第 13 面。
- 02 「この先生抜きでは語れない われらが学科長!!」 2002/12 『聖学院大学欧米文化学科 Newsletter』No. 3, 第 6 面。
- 03 「哲学の道へ」 2003/03 『聖学院大学欧米文化学科 Newsletter』No. 4, 教授たちの人生失敗談, 第 6 面。
- 04 「機関長に聞く!」 2010/09 北海学園大学『学報』第 83 号, 2010 年(平成 22 年) 9 月 1 日, 第 8 面。
- 05 「本から自分が変わるような知識を」 2013/12 『2014 新入生おすすめ本』, 14-15 頁。
- 06 「機関長に聞く!」 2014/06 北海学園大学『学報』第 98 号, 2014 年(平成 26 年) 6 月 1 日, 第 7 面。
- 07 「人文学部から初の選出 安酸教授 学長に就任」 2017/06 『北海学園大学新聞』再刊第 161 号, 第 2 面。
- 08 「安酸敏眞さん 北海学園大学学長」 2017/09/06 『札幌人図鑑』

第 1354 回, J : COM, <https://jinzukan.myjcom.jp/sapporo/post/1537>。

- 09 「けいざいナビ北海道・トップの逸本」2017/11 『テレビ北海道』
11 月 18 日放映。

(11) 入学式および卒業式での式辞

- 01 「AIM HIGH (望みを高く持つ)」2017/04/02, 平成 29 年度入学式,
於：きたえーる。
- 02 「アルマ・マータ (alma mater)」2017/09/30, 平成 29 年度 9 月卒業式, 於：ガーデンパレス。
- 03 「永劫の心のすみか」2018/03/21, 平成 29 年度卒業式, 於：きたえーる。
- 04 「開拓精神君知るや」2018/04/ 3, 平成 30 年度入学式, 於：きたえーる。
- 05 「同窓の絆」2019/09, 平成 30 年度 9 月期卒業式, 於：ガーデンパレス。
- 06 「自己研鑽の場としての大学」2019/02, 平成 31 年度入学式, 於：きたえーる。
- 07 「卒業生・修了生の皆さんへのはなむけの言葉」2020/03, 令和元年度卒業式。
- 08 「令和 2 年度の 9 月期卒業式に寄せて」2020/09, 令和 2 年度 9 月期卒業式, 於：ガーデンパレス。
- 09 「ありふれたもの」2021/03, 令和 2 年度卒業式, 於：きたえーる。
- 10 「令和 3 年度の 9 月期卒業式に寄せて」2021/09, 令和 3 年度 9 月期卒業式, 於：ガーデンパレス。
- 11 「明けない夜」と「暮れない日」2022/03, 令和 3 年度卒業式, 於：きたえーる。
- 12 「自らの人生の開拓者であれ！」2022/04, 令和 4 年度入学式, 於：きたえーる。

- 13 「令和4年度の9月期卒業式に寄せて」2022/09, 令和4年度9月期卒業式, 於: ガーデンパレス。
- 14 「無くてならぬ唯一のもの—Unum Necessarium (The One Thing Necessary)」2023/03, 令和4年度卒業式, 於: きたえーる。

(12) 発題・一般講演

- 01 「UIの明確化と戦略性—北海学園大学教育の課題と展望」(単) 2013/10 第47回北海学園教育研究集会(2013.10.30 北海学園大学)。
- 02 「新しい人文学の地平を求めて」(単) 2014/11 第2回人文学の挑戦, 紀伊国屋書店札幌本店インナーガーデン(2014.11.8, 16:00-17:30)。
- 03 「私立大学職員としての初任者心得」(単) 2018/06 平成30年度私大協初任者研修会基調講演(ガーデンパレス)。
- 04 「真理探究とアカデミック・キャピタリズムの狭間で」(単) 2018/06 私大協事務局長相当者会議(2018.06.26 北海学園大学国際会議場)。
- 05 「人文学の非実用的有用性」(単) 2018/07 地域連携特別講座(2018.07.05 北広島市)『2018(平成30)年度 第4回 地域連携特別講座記録集～道民カレッジ～』(2019年1月, 北海学園大学地域連携推進機構) 1-23頁。
- 06 「現代大学事情」(単) 2018/07 京都大学経済学部同窓会(2018.07.13 札幌グランドホテル)。
- 07 「北海学園大学のこれから」(単) 2022/10 北海学園大学同窓会拡大全国支部長会議(2022.10.22 札幌パークホテル)。

(13) 北海通信(私家版PDF)

No. 1 (2008.1.6)～No. 29 (2008.7.20) 毎週日曜日刊行。

競争的研究資金の交付実績

I. 科学研究費補助金

- 01 奨励研究 A, 昭和 60-61 年度, 「近代的歴史意識の成立とその神学的意義」, 研究代表者, 200 万円…ディルタイ, ヘーゲル, ヘルダー, レッシングを対象として近代的歴史意識の成立を発展的に追跡する試み。
- 02 一般研究 (C), 平成 6 年度, 「レッシングの神学思想のスピリチュアリズム的背景についての研究」, 研究代表者, 90 万円…「スピリチュアリズム」の伝統との連関において, レッシングの神学的・宗教哲学的思想を解釈しようとする試み。
- 03 研究成果公開促進費, 平成 10 年度, 研究代表者, 160 万円…『レッシングとドイツ啓蒙』(創文社, 1998 年)の刊行費用(1. 著書(単著) 02 参照)。
- 04 基盤研究 (C) (2), 平成 10-12 年度, 「『万有在神論』(Panentheismus) についての研究」, 研究代表者, 230 万円…レッシングの「ヘン・カイ・パーン」がスピノザ主義ではなく, スピリチュアリズムに由来する「万有在神論」であることを論証。併せて, レッシングに固有な「万有在神論」と, セバスティアン・フランク, フェヒナー, トレルチ, ハーツホーン, 西田幾多郎の主唱する「万有在神論」との異同を明らかにしようと企てた。
- 05 基盤研究 (C) (2), 平成 15-16 年度, 「セバスティアン・フランクにおける終末論と神秘主義」, 研究代表者, 290 万円…セバスティアン・フランクの霊性主義の思想構造を, とくに終末論と神秘主義とにスポットを当てて分析しようと試みた。
- 06 基盤研究 (C) (一般), 平成 21-23 年度, 「解釈学と歴史主義—A・ベークと J・G・ドロイゼンについての事例研究」, 研究代表者, 442 万円…ベークとドロイゼンにおいて《解釈学》と《歴史主義》のモチーフがいかに密接に関連し合っているかを究明した。
- 07 基盤研究 (B) (一般), 平成 23-26 年度, 「ラインホルド・ニー

バーの宗教・社会・政治思想の研究」(研究代表者 高橋義文), 研究分担者, 950 万円(総額)…聖学院大学総合研究所のニーバー研究を側面的にサポート。

- 08 研究成果公開促進費, 平成 24 年度, 研究代表者, 190 万円…『歴史と解釈学—《ベルリン精神》の系譜学』(知泉書館, 2012 年)の刊行費用(1. 著書(単著) 05 参照)。
- 09 基盤研究(C)(一般), 平成 25-27 年度, 「《ベルリン精神》の内的相剋としてのシュライアマッハーとヘーゲルについての研究」, 研究代表者, 481 万円…ベルリン大学草創期における二大巨匠シュライアマッハーとヘーゲルの神学的・宗教哲学的思想の共通点と差異を究明した。
- 10 基盤研究(C)(一般), 平成 28-31 年度「「キリスト教学」の範型としてのシュライアマッハー＝トレルチ的伝統の再検証」, 研究代表者, 468 万円…わが国の「キリスト教学」がシュライアマッハー＝トレルチ的な神学観を範型としていることを実証した。

II. 科学研究費補助金以外

- 01 American Academy of Religion Academy Series 出版助成, 昭和 61 年度, 研究代表者, 出版費用全額…ヴァンダービルト大学に受理された学位論文が American Academy of Religion (AAR) の Academy Series No. 55 に選定され, *Ernst Troeltsch: Systematic Theologian of Radical Historicity* (Atlanta: Scholars Press, 1986) として出版された。
- 02 国際交流基金フェローシップ事業助成金, 平成 11 年度, 「万有在神論に関する比較研究」, 研究代表者, 86.2 万円…アウクスブルク大学での半年間の在外研究に対して, 渡航費と滞在費とが支給された。
- 03 聖学院大学研究叢書出版助成, 平成 12 年度, 研究代表者, 100 万円…「聖学院大学研究叢書 2」に選定され, 『歴史と探求—レッシ

ング・トレルチ・ニーバー』(聖学院大学出版会, 2001 年)として出版された。

- 04 AAR Reflection and Theory in the Study of Religion Series 出版助成, 平成 13 年度, 研究代表者, 出版費用全額…AAR の新しいシリーズに選定され, *Lessing's Philosophy of Religion and the German Enlightenment* (New York: Oxford University Press, 2002) として出版された。

送る言葉

北海学園大学人文学部英米文化学科 小 柳 敦 史

安酸敏眞先生が6年の任期を終えて学長を退任されると同時に、北海学園大学を退職されることになります。私は安酸先生が学長に就任された2017年4月に北海学園大学人文学部に着任したので、北海学園大学ではもっぱら学長としての安酸先生の姿しか存じ上げません。従いまして、『人文論集』に安酸先生を送る言葉を記すのに私はあまり適役とは言えないのですが、安酸先生に感謝を伝えることのできる貴重な機会なので、僭越ながらお引き受けいたしました。

当時の私のように北海学園大学の外におり、学問を通じて安酸先生を知っていた者はみな、安酸先生が学長に選出されたことを知って驚いたものです。なぜなら、安酸先生は、堅実で重厚な思想史研究の大家として知られており、学長職のような《俗事》からは努めて距離を取っているという印象があったからです。2022年8月に、日本基督教学会北海道支部のシンポジウムでのご自身の講演に安酸先生は『『わたしの著書』——Einzelgängerの足跡』というタイトルを付けました。Einzelgängerとは、「独歩者」あるいは「一匹狼」というような意味であり、キリスト教思想研究に携わる者にとってもまた、安酸先生は孤高の研究者であるというのが一般的なイメージであると言えるでしょう。学長就任以前の経歴や業績をここで詳しく紹介することは必要ないと思いますが、安酸先生の研究において主要な関心の対象となってきた、18世紀ドイツの思想家レッシングに関する著作と、19世紀末から20世紀初頭にかけてドイツで活躍した神学者・哲学者であるトレルチに関する著作が、いずれもオックスフォード大学出版からアメリカ宗教アカデミーの叢書の一部として出版されているという事実は特筆しておかねばなりません。難解で知られる思想家のテクス

トをドイツ語で読み込み、世界中の研究者と読者に向けて英語の単著として発表するのはとてつもなく大変な作業ですが、それをレッシングとトレルチという時代の異なる対象について二度行い、その両方が定評ある叢書に収められていることは、少なくとも我が国の近代キリスト教思想研究においては他の追随を許さない偉業です。学会や研究会の懇親会で安酸学長のことが話題になった際に、他の大学に所属する研究者たちから「安酸先生のような立派な学者を学長に選ぶというのは、北海学園大学の皆さんの高い見識を示していますね」と言われ、鼻の高い思いをしたことは一度や二度ではありません。

とはいえ、立派な研究者がすなわち良き学長であるとは限らないでしょう。「孤高の研究者」であればなおのこと不安もよぎります。しかし、この不安が杞憂でしかなかったことは、学長としての安酸先生の働きを知る人間には明らかでしょう。学長在任期間の後半はコロナ禍と重なりました。研究者という一家言ある人間が集まり、またそれぞれに基本的な発想を異にする学部を擁する組織である総合大学の舵取りは、緊急時にあってひときわ困難を極めたはずです。しかし安酸学長はこの難しい時期にある大学に落ち着きをもたらし、導いてくださいました。とりわけ印象深かったのは、コロナ禍が始まって間もない2020年4月に、学生に対する総額5億円の給付金を支給したことに加え、その他の奨学金の拡充も図り、そうした支援のための寄付を広く学内外に呼びかけたことです。安酸先生はかねてから、欧米では市民同士の支え合いの実践として当たり前になされている寄付と慈善（チャリティ）の重要性を語っておられました。コロナ禍における学生への支援とそのため寄付の呼びかけは、大学という組織は国の補助金と学費収入にのみ依存するのではなく、市民社会によって支えられるべきものであるという安酸先生の考えが具体化したものだと言えます。そしてこのような働きにおいて、孤高な研究者のなかに秘められていた、大学を、そして社会をより良きものにしたいという情熱が発露していたのです。

ご本人が優れた研究者である安酸先生によって、本学の研究環境が大幅

に改善したことも多くの教員が実感していることでしょう。研究費が今日の研究活動に合わせて柔軟になったことは代表的な例です。私が着任した6年前には、基本的には出張のための「車馬賃」と図書費しか個人研究費に含まれていなかったことを思い返すと隔世の感があります。また、北海学園大学出版会が2019年に設立され、研究成果を公表する手段が身近に用意されたことも、本学の研究活動を一層活性化し、社会に開かれたものとする道を開きました。

時おり私が学長室を覗き込むと、中へと招き入れてくださり、近況をお話する機会がありました。その際、安酸先生はしばしば「現在の私の一番の仕事はより良い大学にすることですから、研究者としてはもう店じまいです」とか、「なかなか忙しくて、三日間もドイツ語のテキストを読めないんです。そうすると、カンが鈍ってしまってダメですね」というようなことをおっしゃっていました。学長とは比べものにならないほどわずかな業務しかないにもかかわらず、3カ月くらいドイツ語に触れないことがザラになっている私には恐ろしい言葉でしたが、そのような研鑽を長年積み重ねて来たからこそ安酸先生のお仕事が生み出されてきたものだと納得したものです。しかし、驚くべきことに、そのような多忙な学長職に身を碎きながらも、安酸先生は研究活動と著作活動を止めることはありませんでした。学長在職中に何冊かの本が刊行されましたが、とりわけ日本の学術界へのインパクトが大きかったのは、18世紀終わりから19世紀前半にドイツで活躍した神学者シュライアマハーの大著『キリスト教信仰』の翻訳出版（教文館、2020年）です。この書物は近代プロテスタント神学の最重要著作の一つでありながら、その難解な内容によりこれまで誰も翻訳を成し遂げることができませんでした。本書の翻訳により、近代プロテスタント神学の精髓に日本語で触れることができるようになったことは、キリスト教研究に従事する者にとってのみならず、近代ヨーロッパの哲学、文学、歴史、政治思想などに関心を持つ読者にとって極めて大きな意義を有しています。

学長在職中の研究活動としては、安酸先生の盟友であり、トレルチ研究

の世界的権威である、ミュンヘン大学名誉教授のF・W・グラーフ教授を2019年秋に日本へ招聘し、北海学園大学・京都大学・東京大学・東北学院大学でシンポジウム等のイベントを開催したことも感慨深く思い出されます。私もトレルチを主たる研究対象にしていますので、安酸先生とグラーフ先生という、尊敬する——が故にいつかは乗り越えなくてはならない——偉大なトレルチ研究者と多くの時間をご一緒できたことは、とても貴重な経験でした。なお、この時各地で行われた講演の記録は、北海学園大学出版会の第一号出版物として『真理の多形性』のタイトルで出版されています。

学長就任により、人文学部の教育からは離れた安酸先生でしたが、大学院生への指導は継続され、長年にわたり安酸先生の指導を受けてきた塩濱健児氏が、2018年3月にトレルチについての博士学位論文により、文学研究科英米文化専攻で最初の博士学位を取得したことも学長在職期間中の喜ばしい出来事でした。なお、塩濱氏の博士論文で重要な役割を果たしている「脱歴史化」のモチーフをめぐっては、私と安酸先生の解釈には大きな差があります。私は『年報 新人文』第15号（2018年）において、「脱歴史化」はトレルチ自身において積極的な意味は与えられていないが、興味深いモチーフであると評価しました。これに対して安酸先生は2020年の著書『キリスト教思想史の隠れた水脈』（知泉書館）において、「脱歴史化」のモチーフはトレルチ自身の歴史主義を理解するための重要な概念だと評価しているのです。トレルチの同じテキストに基づいてまったく異なった解釈が出てくるところに思想史研究の面白さを感じます。おそらく、私も安酸先生もお互いを納得させるには至っていないので、今後も機会がいただけるなら、議論を続けられることを願っています。

現在、私は安酸先生が担当されていた科目である「人文学概論」を、安酸先生が執筆された『人文学概論 増補改訂版』（知泉書館、2018年）を教科書として用いて講義しています。人文学部の教職員と学生の皆さんはご存知の通り、この授業は人文学部での学びの導入として、1年生の前期に必修科目として置かれています。そして、人文学部の教職員と学生の皆さ

んはやはりご存知の通り、『人文学概論』という教科書は大変に格調高く、重厚な内容を持った書物です。学期の初めには受講生からしばしば「なんでこんな難しい本を教科書にしているのですか？ 学長が著者だからですか？」という質問が寄せられます。この文章を読む学生もいるでしょうから断言しておきますが、もちろん、そういうことではありません！ 人文学の入門書は何冊かありますが、いずれも文学の部分は文学の専門家、歴史の部分は歴史の専門家、哲学の部分は哲学の専門家が書いた、複数の著者による論集の形式をとっており、一人の著者が人文学の幅広い領域について記した書物は、安酸先生の『人文学概論』の他に存在しないのです。「専門領域に詳しい人が分担して書いた本の方が良いのでは？」という疑問があるかもしれません。確かに、ある程度人文学の全体像が把握できていて、各分野についてさらに詳しく学びたいという段階の学生・読者には、論集タイプの本が専門的な知識を提供してくれるという意味で有効でしょう。しかし、論集タイプの本は、文学や歴史といった人文学の諸分野間の関係づけや体系的な理解を読者に委ねます。それは、これから人文学の見取り図を得ようとしている初学者にとって容易な作業ではありません。それゆえ、たとえ内容に偏りや、場合によっては誤りが含まれているとしても、「人文学」というものについて一定の見取り図を描くことを一人の著者が引き受け、その結果を提示する書物が、人文学への導きとしてはより適切なのです。実際、学期当初に上がっていた「なんでこんなに難しい本を教科書に…」という疑問（あるいは不満）は後半になるとかなり減っていき、「なぜ、著者はここを強調しているのですか？」という著者の意図を問う質問や、「この箇所の記述は前に読んだ〇〇章の内容を踏まえると納得がいきます」といった本の全体を視野に入れた考察が増えていきます。人文学についての一人の著者による全体的な理解が提示されていればこそ、そのような読み方へと読者は導かれます。そしてこれは、文化現象についての先人の理解（を記したテキスト）と対話をするという、人文学の基礎的方法論を身につける経験となります。当然ながら、人文学の研究者であれば誰もが人文学についての全体的な理解を一人で描けるというわけでは

ありません。『人文学概論』は、安酸先生の広範な学識と体系的な思索力があってこそ可能になった尋常ならざる著作であり、だからこそ類書が存在しないのです。この著作は北海学園大学人文学部の「人文学概論」の授業で安酸先生自身が教科書として用いるために執筆されました。この尋常ならざる著作は、私たち人文学部の全員にとってかけがえのない共有財産に他なりません。とは言え、現在この授業を担当している者としては、いつまでもこの財産に頼っていくわけにはいかず、私なりの『人文学概論』を書かなくてはならないのかもしれませんが、しかし、それは大変な課題です。せめて、あと10年は「人文学概論」を担当しながら研鑽を積む時間をいただきたいと思います。安酸先生からいただいた財産の豊かさに感謝すると同時に、それを創造的に引き継いでゆく責任の大きさを思うと、途方に暮れるばかりです。

安酸先生は2021年6月より学校法人北海学園理事長を兼任されています。少し前に安酸先生とお話しした際に、「理事長としていろいろやらなければならないことがあるし、もう研究は店じまいです」とおっしゃっていました。私は安酸先生の学識と人格に全幅の尊敬と信頼を寄せる者ですが、この言葉だけは信じていません。研究面でも、まだまだ教えていただきたいことがたくさんあります。現在、共同で進めている有賀鐵太郎研究は是非とも形にいたしましょう。それから、トレルチについての研究成果を日本語の書物として一冊にまとめるというのはいかがでしょうか。「送る言葉」の場を借りて安酸先生に感謝を伝えようとしたはずが、最後は単なるおねだりになってしまいました。どうぞ今後とも、人文学部に、北海学園大学に、そしてまた、日本のキリスト教学に、進むべき道を示し続けていただきたく存じます。

19 世紀プロテスタント神学における 歴史叙述と教会史

— フェルディナント・クリスティアン・バウル試論 —

佐 藤 貴 史

はじめに — 神にとっての「19 世紀という問題」

1. 本論文の背景, 研究史的位置づけ, 目的
2. 歴史家における主観と客観
 - (1) 『教會的歴史叙述の諸時期』の位置, 課題, 三つの要素
 - (2) 理念と歴史
 - (3) 教会史とキリスト教の本質
3. 教會的歴史叙述と教會の理念
 - (1) 「歴史叙述の実用的観点」の克服 — バウルとシェリング
 - (2) 教會の意味
 - (3) 教会史の時代区分

おわりに — 鏡を映す鏡

はじめに — 神にとっての「19 世紀という問題」

『エスの系譜 — 沈黙の西洋思想史』¹とは互盛央の作品である。通常, とりわけフロイトの名前とともに想起される「エス」の系譜を, 主に言語学と国民国家の関係からあぶり出していく本書(講談社学術文庫版)に, 國分功一郎が「解説」を寄せている。國分によれば, 互のエス論のポイントは

¹ 互盛央『エスの系譜 — 沈黙の西洋思想史』(講談社, 2010 年)。その後, 2016 年に講談社学術文庫の一冊として出版される。

「19世紀、あるいは、18世紀末と20世紀初頭をも含めた広義の19世紀である」²。「なぜ19世紀は、かくも執拗にエスを論じたのか？」³と、國分は問う。その結末と行方については、是非とも互の作品を読んでいただきたい。

19世紀はおのれのうちなるエスによって突き動かされる人間、そして言語と国民国家とともに生きざるをえない人間にとってのみ問題として現れたわけではない。人間の外なる超越的な神に対しても19世紀は困難な問題をもたらしたのであった——思想史の問題として見る場合、〈19世紀という時代〉が神と人間に大きな挑戦を突きつけたのであり、主語は神ではない。20世紀のプロテスタント神学者、とりわけカール・バルト(Karl Barth, 1886-1968)は近代キリスト教の危機を克服しようとして、彼以前、とくに19世紀のキリスト教神学者に対して激しい批判を繰り広げたとみなされることもあるが、ここではあの通俗的なバルト解釈について述べる必要はないだろう。もちろん、名著——文字通り、名著！——『19世紀のプロテスタント神学』を読めば、過去の神学者に対する彼一流の厳しい物言いがあちこちに見られる。しかし、それは次の「序言」の言葉を前提としての言い方であることを見落としていけない。

今日われわれが再び求めているようなすぐれた釈義と教義学が真にすぐれたものであるという証拠と保証をどこかに求めるとすれば、それはこの釈義と教義学を打ち出す御本人が昨日や一昨日の神学上の隣人たちの歴史的現実に対して、どれだけ鋭いだけではなく開かれた眼をもっているかということの中に求められねばならない⁴。

² 國分功一郎「解説 来るべき本文——19世紀という問題」(互盛史『エスの系譜——沈黙の西洋思想史』, 講談社〔講談社学術文庫〕, 2016年), 318頁。

³ 同上書, 325頁

⁴ Karl Barth, *Die protestantische Theologie im 19. Jahrhundert. Ihre Vorgeschichte und ihre Geschichte* (Zollikon: Evangelischer Verlag AG, 1947), VI. (カール・バルト『19世紀のプロテスタント神学 上』佐藤敏夫・

神学史、とくに 19 世紀のプロテスタント神学史に対してバルトが払っている深い敬意を見誤ると、おそろしく凡庸なプロテスタント・キリスト教神学史がお目見えすることになるだろう。

19 世紀のドイツ哲学を代表するヘーゲル（Georg Wilhelm Friedrich Hegel, 1770–1831）は、わが国においては盛んに翻訳され、いまなお研究され続けている。これに対して、プロテスタント・キリスト教世界の巨人であるシュライアマハー（Friedrich Daniel Ernst Schleiermacher, 1768–1834）の翻訳や研究は、わが国では皆無とは言わないが、圧倒的に少ないと言わざるをえないだろう⁵。いや、そもそも 19 世紀のプロテスタント神学者は、同時代のヘーゲルのみならず、20 世紀のプロテスタント神学者と比較しても、真剣な研究の対象になっていると言い難い状況である。バルトの『19 世紀のプロテスタント神学』の目次に出てくる神学者が、どれくらいわが国で熱心に取り上げられているかを考えてみるだけで十分だろう。

バルトによれば、「……フェルディナント・クリスティアン・バウルが心を動かされた問題なしには、みずからの主題をある程度理解し把握するキリスト教神学はもはやまったく考えられない、と言わなければならない」⁶。19 世紀ドイツにチュービンゲン学派を創設したフェルディナント・クリス

岩波哲男・高尾利数・小樋井滋〔訳〕、カール・バルト著作集 11、新教出版社、1971 年、iv 頁）。

⁵ 最近、シュライアマハーの『キリスト教信仰』（教文館、2020 年）が安酸敏眞によって翻訳された。アウグスティヌスやルターの翻訳とも並ぶ、日本のキリスト教研究における貴重かつ重大な学問的遺産である。しかし同時に、この優れた翻訳を用いて、誰がシュライアマハー神学を本格的に研究するのか——いや、できるのか——ということもいま問われているのではないだろうか。

⁶ Barth, *Die protestantische Theologie im 19. Jahrhundert*, 451.（カール・バルト『19 世紀のプロテスタント神学 下』安酸敏眞・佐藤貴史・濱崎雅孝〔訳〕、カール・バルト著作集 13、新教出版社、2007 年、117 頁）。

ティアン・バウル (Ferdinand Christian Baur, 1792-1860)⁷ は、歴史批判的方法を積極的にキリスト教神学に取り入れながら、古代宗教史、宗教哲学、新約聖書研究、キリスト教教義史、最初期キリスト教研究、教会史などの領域において多大な学問的影響と成果を残した偉大なプロテスタント神学者である。彼の周りには多くの神学者たちがいたし、ダーフィット・フリードリヒ・シュトラウス (David Friedrich Strauß, 1808-1874) やアルブレヒト・ベンヤミン・リッツェル (Albrecht Benjamin Ritschl, 1822-1889) のように、バウルから影響を受けながらも、師とは必ずしも同じ方向に向かうことなく、そこから離れていった神学者もいた。

本論文の目的はバウルの思想を考察することであるが、しかしそれにしてもバルトが言う「フェルディナント・クリスティアン・バウルが心を動かされた問題」とは何であろうか。本論文の背景と研究史的位置づけとともに、その目的についてももう少し詳しく次節で考えてみることにしよう。

1. 本論文の背景、研究史的位置づけ、目的

20世紀の著名なキリスト教教理史家ヤロスラフ・ペリカンは、19世紀は「歴史的神学の歴史」における「黄金時代」⁸である可能性について言及し

⁷ 本論文では、Baur のカタカナ表記を「バウル」とする。以前は「パウル」という表記が多かったと思われるが、最近では「パウア」や「パウアー」も見受けられる。邦語ならびに邦訳文献の引用の関係から判断して、本論文では「バウル」を用いることとする。

⁸ Jaroslav Pelikan, *Historical Theology. Continuity and Change in Christian Doctrine* (Oregon: WIPF & STOCK, 2014; Orig. pub. 1971), 51. ペリカンによれば、「歴史的神学」「歴史神学」(historical theology) はきわめて両義的な用語である。なぜなら、通常、historical theology は「キリスト教信仰と教理の起源に関する研究」だけでなく、「教会史」や「その方法論が歴史的であるような神学的な予備教育の諸学科すべて」も示すことがあるからである。ペリカンは「歴史神学」は「教会史の緩やかな類義語」として使われる

ている。彼にとって、「ローマ・カトリックであろうと、プロテスタントであろうと、キリスト教神学における研究と調査が近代の歴史学的方法、とくに新約聖書とドグマの発展の歴史的考察によって支配されるにいたった 19 世紀において、フェルディナント・クリスティアン・バウルほど抜きでていた歴史的な神学者（historical theologian）は存在しなかった」⁹。言い換えれば、「近代の歴史学的方法」を大胆に神学へ取り入れた 19 世紀のキリスト教神学は、真理や超越性の危うさを深刻に受け止めなければならぬ時代を目の当たりにすると同時に、バウルという異才を生み出した世紀であった。それでは、その類まれな歴史的な神学者が生きた世紀はキリスト教にとっていかなる時代だったのだろうか。

本論文の主題であるバウルに関係する思想史の見取り図を得たいならば、もう古い研究に属するが、クラウド・ウェルチによる 2 巻組の『19 世紀のプロテスタント思想』を読むことがいまなお有益である。彼は、そこでみずからの主題を「神学の可能性という問い」「キリスト論の可能性という問い」「キリスト教と文化という問い」の三つに分け、主にバウルを「キリスト論の可能性という問い」のなかで論じている¹⁰。

ことがあると述べ、続けて次のように書いている。「神学研究は四つの基本的なカテゴリー、すなわち聖書神学、組織神学、歴史神学、実践神学へと分けられた。この構造の内部で、歴史神学はキリスト教史を表す用語であったし、通常それはより広い範囲のうちに含められた教理史や伝道史のような専門的な関心領域をともなった教会史と同等であった」。Ibid., xiv-xv. バウル自身が浩瀚な教会史研究を残しているので、訳し分けが難しいところだが、彼に historical theology あるいは historical theologian という用語を用いるときは、狭い意味での「歴史神学」「歴史神学者」ではなく、歴史学的方法論に基づいた「キリスト教信仰と教理の起源」ならびにその発展の研究、そしてその後の教会史研究という意味を込めて「歴史的な神学」「歴史的な神学者」という訳語を選択した方が賢明だと思われる。

⁹ Ibid., 52.

¹⁰ Claude Welch, *Protestant Thought in the Nineteenth Century, Volume I, 1799-1870* (New Haven and London: Yale University Press, 1972), 4-5.

ウェルチによれば、19世紀半ばのプロテスタント神学にとってキリスト論はその時代の中心的課題であった。簡潔に述べれば、それは「一体イエスという歴史的形姿は信仰の対象として近づくことができるのかどうか（そしていかにしてそれはできるのか）という新しい焦眉の問題」であり、「イエスの認識可能性」と「理想の現実化に対する個としての歴史的形姿の意義」に関わる難問である¹¹。パウルにとって、キリスト教は「歴史家によって知られる歴史的基礎をもたなければならず、理想と歴史的キリストのあいだの関係は必然的なもの」¹²であった。もちろん、歴史研究が信仰を生み出すわけではないが、「信仰は……歴史研究によって形成され、試されなければならない」¹³。その意味において、ウェルチにとってパウルは「(少なくともハルナック〔が登場する〕までは) 19世紀における教会と神学のもっとも偉大な歴史家」であり、「『歴史的神学』の理念」を十分な仕方で展開させた神学者であった¹⁴。

「近代プロテスタントのキリスト論」を論じた安酸敏眞は、「古代におけるような大々的な「キリスト論論争」は存在しない」ことを断ったうえで、近代プロテスタント神学の背後には、「キリスト論の問題が最も根本的な問題として伏在している」と書いている¹⁵。19世紀も含む近代という時代に、キリスト論がもっとも先鋭化して出現せざるをえない理由として、彼は次のように述べている。「なぜなら、近代性の要請に従えば、普遍的な価値や真理は万人が近づき得るものでなければならないが、キリスト教信仰はその実像を客観的に確定し得ぬナザレのイエスという過去の特種個人に、(少なくとも原理的に) 普遍的な意義を付与するからである」¹⁶。ウェ

¹¹ Ibid., 145.

¹² Ibid., 156.

¹³ Ibid., 157.

¹⁴ Ibid., 155.

¹⁵ 安酸敏眞「近代プロテスタントのキリスト論」(『キリスト論論争史』, 水垣渉・小高毅 [編], 日本キリスト教団出版局, 2003年), 441頁。

ルチと同様、安酸もまた「近代的・学問的な「歴史的な神学」を確立した」のはバウルだと言う¹⁷。

切り口は少し異なるが、ウェルチも安酸も近代のキリスト教そして 19 世紀のバウルが普遍と特殊、キリスト教神学の文脈で言えば信仰のキリストと歴史のイエスのあいだに必然的関係があるのかどうかという問題に直面していたことを告げている。もちろん、バウルはキリスト教信仰にとって歴史的基礎の存在が不可欠であり、だからこそ彼は新約聖書や最初期キリスト教の歴史を熱心に研究した。しかし、事はそう簡単ではなかったことも確かである。

実はウェルチのプロテスタント思想史の第 2 巻の目次にもバウルの名前が出てくる。「歴史と信仰」と題されたその章では、キリスト論とはいささか違う角度からバウルの歴史的な神学が論じられている。彼によれば、バウルが取り入れた歴史学的方法は「教会やその神学の歴史のプロテスタント的理解に対して重大な意義をもっていた」¹⁸。まさにこの問題こそ、バルトが『19 世紀のプロテスタント神学』のなかで指摘した、「フェルディナント・クリスティアン・バウルが心を動かされた問題」であり、彼の「神学的な根本問題」である¹⁹。

バルトは明確に述べている。少し長いがすべて引用しよう。

バウルの問題は、彼自身が教會的歴史叙述と名づけたものである。教

¹⁶ 同上書。

¹⁷ 同上書、471 頁。安酸が翻訳した F.D.E. シュライアマハー『『キリスト教信仰』の弁証——『信仰論』に関するリュッケ宛ての二通の書簡』（安酸敏眞[訳]、知泉書館、2015 年）でも、バウルの批判がシュライアマハーのキリスト論における歴史的な事実の希薄さに対して向けられていることがわかる。

¹⁸ Claude Welch, *Protestant Thought in the Nineteenth Century, Volume II, 1870-1914* (New Haven and London: Yale University Press, 1985), 173.

¹⁹ Barth, *Die protestantische Theologie im 19. Jahrhundert*, 451. (『19 世紀のプロテスタント神学 下』, 117 頁, 118 頁)。

会の歴史はもちろんエウセビオス以来、全体的にあるいは部分的に、非常にしばしば叙述されてきた。パウルはこの試みの叙述に、つまり神学的な歴史記述に、固有の書物をささげたが(『教會的歴史叙述の諸時期』*Die Epochen der kirchlichen Geschichtsschreibung*, 1852)、彼はその書物を、この神学的学科の方法そのものは自分にいたるまでまだ特別な調査対象とはなっていないかった、という事実確認でもって始めなければならない。ひとは神学者として歴史を観察し、歴史を書き記したとき、何を欲しているかわかっているつもりだったし、どうやってこれをなすべきかわかっているつもりだったが、しかしパウルがはじめてこの両方を疑問に伏し、従来この行為を支配していた意図が不十分だということと、実際のやり方がどうだったかを暴き、自分の側でこれに答えを与えることができると考えた²⁰。

このようなバルトの指摘は、超自然主義や合理主義に安易に訴えることが難しくなりつつあった19世紀という時代のなかで、キリスト教信仰に求められる歴史的基礎を考究したパウルの「神学的な根本問題」の再検討を、われわれに促していると言うことができる。しかし、わが国の研究状況を振り返ると、このバルトの言葉がどれほど真剣に受け止められているかは甚だ心もとない。パウル研究自体が日本語圏では、部分的言及を除けば、文字通り皆無という状況であり、英語ならびにドイツ語圏でも、つねに注目され研究されてきたとはとても言えない状況だと判断できる²¹。以

²⁰ Ibid. (同上訳書, 118頁)

²¹ 最近の研究動向については以下の論文集を参照されたい。*Ferdinand Christian Baur und die Geschichte des frühen Christentums*, herausgegeben von Martin Bauspiess, Christof Landmesser und David Lincicum (Tübingen: Mohr Siebeck, 2014). パウルの重要なテキストの翻訳としては、ホジソンたちによる一連の翻訳とは別に、最近出版された以下の書物も有益である。*Ferdinand Christian Baur. A Reader*. Edited by David Lincicum and Johannes Zachhuber (London: T & T Clark, 2022).

下では、もっとも信頼できるバウル研究を取り上げ、本論文の研究史的位
置づけを確認したうえで、実際にパウルのテキストを読んでみることにし
よう。

バウル研究を志す者は、今から 50 年以上前に出版されたピーター・C・
ホジソンの『歴史的神学の形成——フェルディナント・クリスティアン・
バウル研究』²²を繙くことが何よりもまず求められる。誤解してほしくな
いが、ホジソンの研究はいまなおバウル研究への最善の入り口であり、そ
れほどこの書物が優れており、現在においても不動の地位を築いていると
いう意味である²³。

ホジソンの研究は、キリスト教信仰と歴史的認識の本質的關係からパウ
ルの歴史的な神学を包括的に考察したものである。彼はパウルの思想的キー
ワードをどのように英語に翻訳すべきかについても細心の注意を払っており、
一朝一夕では彼の研究を乗り越えることはできない。それゆえ、本論文
もまたそのような野心的——そして無謀な——試みは早々に断念する。

ホジソンはその著書のなかで「教会の理念」と「その理念が実現される
歴史的な形式」のあいだの關係が『教會的歴史叙述の諸時期』の解釈枠組み
だとしながら²⁴、次のような評価をその書物に与えている。「『教會的歴史
叙述の諸時期』は疑いもなくパウルの成熟した歴史的な方法と教会の神学の
言明にとって重要であり、教会史を書くさいに用いられたさまざまなタイ

²² Peter C. Hodgson, *The Formation of Historical Theology. A Study of Ferdinand Christian Baur* (New York: Harper & Row, 1966).

²³ ほほ同じ時期にヴォルフガング・ガイガーもまたドイツ語でバウル研究を
公刊している。Wolfgang Geiger, *Spekulation und Kritik. Die Geschichts-
theologie Ferdinand Christian Baur's* (München: Chr. Kaiser Verlag, 1964).
本論文では、主題の關係からガイガーの研究は考察の対象から外している。
ホジソンとガイガーの研究内容の違いについてはホジソン自身がまとめた
いるので、本論文の注 26 であげたホジソンの“General Introduction”を参
照されたい。

²⁴ Hodgson, *The Formation of Historical Theology*, 31.

ブの方法の考察はけっして凌駕されていない」²⁵。本論文の目的はホジソンによるバウル評価、とくに「教会の理念」と「その理念が実現される歴史的形式」のあいだの関係の問題に導かれながら、歴史叙述や教会史の観点からパウルの歴史的神学の一面を明るみに出すことである。もちろん、ホジソンは『教會的歴史叙述の諸時期』について論じている。しかし、彼はパウルのさまざまな著作、論文、説教、そして手紙も同時に扱っている。『教會的歴史叙述の諸時期』の分析がそれらのなかに埋もれてしまっている側面があることも否めないだろう²⁶。だいぶ前置きが長くなってしまった。早速パウルのテキストを繙くことにしよう。

2. 歴史家における主観と客観

(1) 『教會的歴史叙述の諸時期』の位置、課題、三つの要素

最初に『教會的歴史叙述の諸時期』(1852)が、パウルの著作のなかでどのような位置におかれているかを確認しておきたい。この問題に答えることはそれほど難しくはない。なぜなら、バウル自身が彼の著作『キリスト

²⁵ Ibid.

²⁶ ホジソンは1966年に前述のバウル研究書を上梓したのち、1968年に『教會的歴史叙述の諸時期』と、パウルの死後に出版された『キリスト教教義史講義』(*Vorlesungen über die christlichen Dogmengeschichte*)の「序論」を英訳し出版している。Ferdinand Christian Baur, *On the Writing of Church History*. Edited and translated by Peter C. Hodgson (New York: Oxford University Press, 1968). 彼によれば、両者はパウルの教会史と教義史の関係を考察するうえで「相互に補完的な」(Peter C. Hodgson, “General Introduction” in *On the Writing of Church History*, 11) テキストである。ただ、本論文ではパウルの教会史理解とその方法論に焦点を絞って、彼の歴史的神学の一面を解明する。本論文の2の冒頭で述べるように、バウルは『教會的歴史叙述の諸時期』をみずからの教会史の「序論」とみなしており、その意味では学問的に無理な問題設定をしているとは言えないはずである。以下の分析では、上記のホジソンによる秀逸な英訳も参照した。

教と最初期 3 世紀間のキリスト教会』(1853)²⁷ の「第一版の序言」のなかで、『教會的歴史叙述の諸時期』は『キリスト教と最初期 3 世紀間のキリスト教会』への「序論」であり、そこでは「教会史一般とそこでの主要な一般的諸原則に関するわたしの見解」が説明されていると書いているからである²⁸。そして、さらに彼はこう続けるのであった。「わたしの立場は、一言で言えば、その純粋な客観性のなかで解釈することがそもそもできるかぎり、もっぱら関わるべきものとは純粋に歴史的なもの (der rein geschichtliche), すなわち歴史的に所与のもの (das geschichtlich Gegebene) ということである」²⁹。

バウルによれば、これまで「歴史叙述の方法」は「その固有の探究の対象」とはされてこなかった³⁰。しかし、彼にとって教会史は「より狭く限定

²⁷ 『キリスト教と最初期 3 世紀間のキリスト教会』 (*Das Christentum und die christliche Kirche der drei ersten Jahrhunderte*) の第一版が 1853 年に、続いて改訂された第二版が 1860 年に出版された。また、その第三版はタイトルが *Das Christentum und die christliche Kirche der drei ersten Jahrhunderte* から *Kirchengeschichte der drei ersten Jahrhunderte* に変えられたうえで、彼の死後、1863 年に出された。

²⁸ Ferdinand Christian Baur, *Das Christentum und die christliche Kirche der drei ersten Jahrhunderte*, *Ausgewählte Werke in Einzelausgaben*, Bd. III, herausgegeben von Klaus Scholder, mit einer Einführung von Ulrich Wickert (Stuttgart: Friedrich Frommann Verlag, 1966), iv. また、次の英訳も参照した。Ferdinand Christian Baur, *Christianity and the Christian Church of the First Three Centuries*. Edited by Peter C. Hodgson and translated by Robert F. Brown and Peter C. Hodgson (Oregon: Cascade Books, 2019).

²⁹ Baur, *Das Christentum und die christliche Kirche der drei ersten Jahrhunderte*, iv-v

³⁰ Ferdinand Christian Baur, *Die Epochen der kirchlichen Geschichtsschreibung* (1852), *Ausgewählte Werke in Einzelausgaben*, Bd. II, herausgegeben von Klaus Scholder, mit einer Einführung von Ernst Wolf (Stuttgart: Friedrich Frommann Verlag, 1963), 3.

された領域」であるがゆえに、そこでは歴史叙述の方法に関わる問いは「より一層特定され具体的な形態」を獲得することができ、この点は「普遍的な世界史」よりも勝っていると言う³¹。

「教会的歴史叙述の諸時期を……特徴づけること」をその課題とする本書には考察すべき「三つの要素」がある³²。第一に、教会的歴史叙述を代表するような「個々の教会史家の個性」³³を理解しなければならない。しかし、これらの歴史家は異なる特徴をもつと同時にお互いに共有している特徴もあるので、第二にその特徴にしたがって「彼らをさまざまな集団へとえり分けること」が必要となる。そして、この第二の要素に基づいて、それぞれの教会的歴史叙述がもっている主要形式を際立たせることで、第三に「一つの相互関係のなかへと、これらの形式をもたらしこと」³⁴ができるのである。また、こうした関係において「全体を駆け抜ける発展の過程(Entwicklungsgang)がその個々の契機の内的連関のなかで知られるにいたる」³⁵とも、バウルは書いている。もちろん、これだけで十分という意味ではない。しかし、これら三つの要素を踏まえながら、誰も否定できない本質的事柄として彼が強調するのは、「歴史研究は没頭しなければならない大量の個別的なものから……ふたたびまた普遍的なものへと、すなわち諸世紀の流れを通過する遠い旅路を導いてくれる視点であり、光り輝く星々であるはずの諸理念(Ideen)へと舞い上がること」³⁶である。

このようにバウルの課題を整理してみると、彼は『教会的歴史叙述の諸時期』を彼の教会史への「序論」とみなし、そこには「教会史一般とそこでの主要な一般的諸原則に関するわたしの見解」が示されていると書いて

³¹ Ibid.

³² Ibid, 4.

³³ Ibid.

³⁴ Ibid.

³⁵ Ibid., 4-5.

³⁶ Ibid., 5.

いたが、同時にそれは教會的歴史叙述の歴史，すなわち教會史がどのように叙述されてきたかの歴史——これ自体は直接的な意味での教会史ではない——を描いているのであり、こうした歴史の考察から彼自身の教会史も生じていることがわかるだろう。

(2) 理念と歴史

バウルは『教會的歴史叙述の諸時期』の「序論」のなかで、歴史の意味を中心に、歴史家の主観とその歴史家が考察する客観（対象）の関係について詳細に論じている。彼によれば、歴史は「客観的な意味」と「主観的な意味」の両方をもっている³⁷。すなわち、歴史は「客観的に生じたもの〔客観的出来事〕」（das objektiv Geschehene）であると同時に「生じたもの〔出来事〕の主観的知識」（das subjective Wissen des Geschehenen）である³⁸。この両者の関係は、すぐに次のような問題を提起せざるをえない。「いかにして生じたものに関する知識は生じたものそれ自体と関係するのか」³⁹。これは言い換えれば、出来事を認識する歴史家の主観とその歴史家の対象である客観の関係を問うているとすることができる。

バウルによれば、このような歴史一般のなかで議論される主題は、教会史の領域においても取り上げられるはずである。すでに述べたように、教会史は「より狭く限定された領域」であるがゆえに、「主観的意識に対して客観的に与えられたものをはっきりと立てること」⁴⁰がその課題となったとき、歴史的描写において重要なものがより明確になる。さらにバウルは、歴史家はいくつかの重要な問いをもつことなく、全体においても、そのより重要な部分においても、普遍史を追跡することはできないと言う。そこで彼があげている問いのなかで、今後の議論にとってもっとも重要なもの

³⁷ Ibid., 13.

³⁸ Ibid.

³⁹ Ibid.

⁴⁰ Ibid., 15.

は「いかなる理念 (Idee) が動的原理 (das bewegende Prinzip) として全体を通り抜けていくのか」⁴¹であろう。この場合の「全体」とは、歴史の全体であることは言うまでもなく、バウルにとって歴史を理解することとは究極的には全体的歴史のなかで働く理念を理解することとほぼ同義であると言ってよい。

また、バウルは理念について次のようにも語っている。

あらゆるものが一つの出発点から出てくる。そのなかでは、全体としての時間的現象 (ganze zeitliche Erscheinung) によって実現されるべき理念が明確かつはっきりと表現されているのである。そして、一度始まった発展 (Entwicklung) は一つの連関 (Zusammenhang) のなかである点から別の点へと移行し、その連関のなかではあらゆる個別的なものを全体 (das Ganze) に基づいている理念と関係づけること、一つのものが他のものに向けて位置するような関係を規定することは難しいことではありえない⁴²。

ここでは歴史は「全体としての時間的現象」と言い換えられており、やはり理念はこの現象を通じて実現されていくものと理解されている。そして、この実現の過程が「発展」という言葉で表現されている点も見逃してはいけない。発展は「連関」であり、その連関のなかでは「個別的なもの」は「全体に基づいている理念」と関係づけられるのである。バウルにとって理念とは歴史の「動的原理」であると同時に、それは「全体」に基礎づけられていると言えるだろう。

(3) 教会史とキリスト教の本質

歴史の描写は、さまざまな方向に向かう可能性をもっている。このこと

⁴¹ Ibid.

⁴² Ibid.

は教会史にもあてはまるだろう。始まりにおいては一致していた教会がカトリックとプロテスタントに分裂した事実を考えれば十分である。教会的歴史叙述も同様であり、各歴史家の神学的立場はそれぞれの歴史叙述を条件づけているのである。しかし、議論が十分に展開されているとは言い難いが、このような多様な教会的歴史叙述の可能性のなかで、パウルは「あらゆる神学的見解のなかで最初にしてもっとも重要な課題は、キリスト教の本質を究明すること（das Wesen des Christenthums zu erforschen）にのみ向かっていくことができる」⁴³と書き、キリスト教の始まりにさかのぼること、そしてキリスト教の形成に関わる資料を正確に研究することが重要であることを強調している。先の引用では理念の発展が指摘されていたが、パウルの思想のなかでは発展とは逆の方向、すなわち起源への立ち返りも重要な位置を占めていると言えよう。

とはいえ、教会史がさまざまな神学的立場に基づいて叙述されることはこれまでの歴史を振り返っても避けられない事実である。かくしてパウルは次のように述べるのであった。

たとえ主観的意識の明晰さに向けて客観的に与えられたものの内実を調査しようとする普遍的課題がつねに同じままであるとしても、それにもかかわらずその課題の解決のためになされた試みはきわめて異なっており、あらゆる重要な点で以下のことが示されている。すなわち、同一の対象がどれほど異なる仕方で解釈されうるのかだけではなく、対象に関する見解がどのように時代意識を規定する一般的関係の条件にしたがってくり返し変化するのか。別個の歴史的描写のなかで考えられうるさまざまな立場を代表しているように、このようなすべての試みはともに、教会的歴史叙述の諸時期を形成しており、その連続する諸時期において、深みで働きその課題の解決に向けて奮闘する

⁴³ Ibid., 17.

精神（Geist）は、最初は緩やかに、現在のものの見方のなかにあるような段階へとみずからを高めた⁴⁴。

この引用では、歴史家の主観に与えられた客観的に生じたものは、仮にそれを考察しようとする課題が同じであっても、歴史家が生きている時代意識に応じて解釈に大きな差異が出てくることが述べられている。そして、その差異が教会的歴史叙述の諸時期を形成しているのである。しかも、ここでは「精神」という言葉が、まるで理念と同じ意味であるかのように用いられている点も見逃せない。

バウルはきわめて抽象的な仕方では理念と歴史、歴史家の主観とそこに与えられた客観的に生じたものの関係を論じている。このような彼の歴史観、より限定して言えば教会史観がどこに向かうかについてももう少し議論を追いかけてみたい。

3. 教会的歴史叙述と教会の理念

バウルは具体的に個々の教会史家・神学者に即して、教会的歴史叙述の変化と諸時期の傾向を論じているが、ここではその内容を逐一取り上げることはやめよう。参考までに彼が考察の対象とした主な教会史家・神学者の名前を一部だけあげれば次のようになる。ヘゲシップス、エウセビオス、ヒエロニムス、トゥールのグレゴリウス、マティーアス・フラーキウス・イリーリクス、ゴットフリート・アルノルト、ヨーハン・ザロモ・ゼムラー、クリスティアン・ヴィルヘルム・フランツ・ヴァルヒ、ゴットリープ・ヤーコプ・プランク、ハインリヒ・フィリップ・コンラート・ヘンケ、フィリップ・コンラート・マールハイネケ、ヨハン・アウグスト・ヴィルヘルム・ネアンダー、ヨハン・カール・ルードヴィヒ・ギーゼラー、カール・アウ

⁴⁴ Ibid., 17-18.

グスト・ハーゼ——率直に言って、新しい時代になればなるほど、聞いたことのない教会史家・神学者の名前が出てくる。バルトの『19 世紀のプロテスタント神学』の目次にも名前程度しか知らない神学者が多数登場していたが、筆者にとってはそれ以上に不明な名前の連続であり、おそらく日本でもほとんど研究がなされていない、あるいは言及すらされない名前ではないだろうか。それゆえ、筆者の非力は当然のこととして、ここではパウルの思想を理解するうえで必要な部分に限定して論述を続けることにしたい。彼自身が、これらの教会史家・神学者の個性をどのように把握し、類型化し、そしてそれぞれの類型を関係づけているかについては、来るべき本格的なパウル研究を待つことにしよう。

(1) 「歴史叙述の実用的観点」の克服——パウルとシェリング

資料の増大とともに、パウルは教会史が批判的に考察されてきたことを認める。しかし、それでもなお彼によれば、そこには欠けているものがある。それは「とりわけ歴史的発展がそのなかで叙述されるべき現象と理念の行き違い」⁴⁵に由来し、次のような表現でこの事態を説明している。

理念は、まだはるか彼方で漠然とした形をとりながら、その理念が関係づけられなければならない現象のうえを漂っている。理念は、魂が身体に対して行うように、歴史資料を通過し、魂を吹き込むには、そしてこのような有機的統一のなかで——キリスト教会の歴史がその経過をたどる——多数の現象の動的原理であるには十分にいまだ強くもないし活き活きともしていない⁴⁶。

理念がその力を発揮していないことが指摘されているわけだが、そこに付された注を読むと、それは「歴史叙述の実用的観点から歴史叙述の普遍

⁴⁵ Ibid., 259.

⁴⁶ Ibid., 259–260.

的・一般的観点への進歩」(der Fortschritt von dem pragmatischen Standpunkt der Geschichtsschreibung zum univelsellen) の欠如と言い換えられている⁴⁷。続けて、彼はシェリングの『大学における学問研究の方法に関する講義』(*Vorlesungen über die Methode des akademischen Studium*) において、シェリングもまた適切な仕方でバウルが考えている歴史叙述の区別を指摘していると述べる。バウルは「歴史叙述の実用的観点」を批判するシェリングのテキストを長く引用しながら⁴⁸、彼の立場を教会史へ適用することを促している。たとえば、バウルは次のような個所をシェリングのテキストから引用しているので、その一部を読んでみよう。

近代人には、実用的精神を歴史学における最高のものとみなす傾向があり、実用的精神という称号を付与することが最大の称賛を意味すると考えて、彼らは互いにこの称号で飾りたてあっている。……歴史の実用的目的は、自らのなかから普遍性を締め出し、その結果、必然的に限定された対象を求める。教訓の目的は、出来事を適切に、そして経験的に基礎づけられた仕方で結びつけていくことを求める。この結びつけによって、たしかに悟性は啓蒙されるが、理性は他の補足なしには不満足なままにとどまる。……歴史が理性にとって完成したものになるのは、経験的原因が、一方で悟性を満足させつつ、それと同時に、より高い必然性の現象の道具や手段として使用されるときにおいてこそなのである。このような形での叙述においてこそ、歴史はまちがいなく、無限なる精神においてのみ創作されうる、きわめて偉大な、最高の驚嘆に値するドラマという印象を与えることができるのであ

⁴⁷ Ibid., 260 (n. 1).

⁴⁸ 例を一つあげれば、シェリングは、ポリュビオスが行ったような、「戦争の技術のためにという特定の意図」をもった歴史の取り扱いを「実用的」と呼んでいる。シェリング『学問論』(西川富雄・藤田正勝[監訳]、岩波書店〔岩波文庫〕、2022年)、216頁。

る⁴⁹。

バウルはこのシェリングの引用をさらに論じることにはしていないが、肯定的に引用していることは明かである。引用の前半ではバウルが言うところの「歴史叙述の実用的観点」から「普遍性」が締め出されていると書かれている。また、その後半には、やはりバウルが重視する「歴史叙述の普遍的・一般的観点」によって「偉大な、最高の驚嘆に値するドラマ」が創作されうるとある。この引用の意図はシェリングの思想の教会史への適用を望んでいるだけではなく、「その哲学的概念のもっとも深い真理を確かにする彼〔バウル〕自身の学問分野」⁵⁰を示しているのだとする研究者もいる。先のバウルの引用には理念がまだ「現象のうえを漂っている」とあったが、彼はこの事態を克服するためにも、「歴史叙述の実用的観点から歴史叙述の普遍的・一般的観点への進歩」を遂行しようとしたと理解できるだろう。その意味では、教会的歴史叙述の課題はバウルの時代までなおも継続していたと言うことができるのである。

(2) 教会の意味

教会的歴史叙述はいくつかの時期を構成するが、その転回点の一つは宗教改革に求められると同時に、そこでは教会の理念が重要な役割を果たすことになる。バウルによれば「教会のカトリック的概念とプロテスタント的概念の区別を行うものすべては、教会の歴史が分割される二つの偉大な時代の境界上にある」⁵¹。また、彼は「教会における宗教改革以前と以後の

⁴⁹ Baur, *Die Epochen der kirchlichen Geschichtsschreibung*, 260 (n. 1). シェリング『学問論』, 216-221 頁。

⁵⁰ Johannes Zachhuber, *Theology as Science in Nineteenth-Century Germany: From F. C. Baur to Ernst Troeltsch* (Oxford: Oxford University Press, 2013), 70. 同時に、そこではバウルがシェリングにおける「歴史と芸術の同一化」を無視していることも指摘されている。

時代の違いは理念とその現象がお互いに向けてあるような関係の相違にしたがってのみ規定されうる」⁵²とも書いており、やはり理念と現象の関係は教会概念の区別、そして時代の違いに深く関わっていることがわかるはずである。

それでは、パウルにとって教会とはいかなる意味を有しているのだろうか。『『教会的歴史叙述の諸時期』におけるパウルの教会神学の簡便な要約」⁵³と呼ばれる箇所を読んでみよう。

教会はキリスト教が現れる現実的形式 (die reale Form) である。もし人が教会の理念 (die Idee der Kirche) を問うならば、人はキリスト教それ自体を問うている……キリスト教は本質的に、あらゆる時代のキリスト教的意識が——それがいかなる形式で生じようとも——キリストの人格のなかで (in der Person Christi) 観照したもの、すなわち神と人間の一致 (die Einheit Gottes und des Menschen) 以外の何ものでもない。いかに人がキリスト教の本質 (das Wesen des Christentums) を理解しようとも……キリスト教の本質はその絶対的な概念と表現を神と人間の一致のなかにもっている。……キリスト教会の歴史的發展の実質的内実もまた、まさにこの一致以外のものではありえないのである⁵⁴。

パウルにとってキリスト教が現象として現れるのは教会という「現実的形式」を通じてであり、「教会の理念」を問うことは「キリスト教それ自体」を問うことである。また、ここではくり返し「神と人間の一致」が強調されている。パウルにとって、「キリスト教の本質」も「キリスト教会の歴史

⁵¹ Baur, *Die Epochen der kirchlichen Geschichtsschreibung*, 262.

⁵² Ibid.

⁵³ Hodgson, *The Formation of Historical Theology*, 124.

⁵⁴ Baur, *Die Epochen der kirchlichen Geschichtsschreibung*, 263.

的發展の実質的内実」も「神と人間の一致」にその起源が求められるのであり、彼の本質論と歴史（叙述）論はキリスト論に基礎づけられているのである。

ところで、バウルにとって教会の歴史的発展のなかで、理念はみずからを実現する形式をとることになる。別のテキストではバウルは、「教会に向けてみずからを形成するキリスト教」⁵⁵（das zur Kirche sich gestaltende Christenthum）という表現を用いており、キリスト教それ自体は理念であっても、その理念は教会という「現実的形式」を通じて、その時代にふさわしい形式で現象するのである。そして、教会という「現実的形式」を叙述するのが教会史の課題であり、その形式に応じて教会史の時期もまた区別されるのである。それでは、バウルはいかなる形式を教会史のなかに見たのだろうか。

（3）教会史の時代区分

先にホジソンが指摘したように、バウルの歴史叙述論において「教会の理念」——言い換えれば「キリスト教それ自体」——と「その理念が実現される歴史的形式」のあいだの関係は彼の思想のなかでも大きな意味をもっている。バウルは、教会の形式に焦点を当てながら教会史の諸時代を区分するが、そのさい重大な画期は宗教改革以前と宗教改革以後のあいだにおかれる。この点を踏まえながら、さらに詳しくバウルの議論を追いかけてみたい。

バウルによれば、「教会の理念がみずからを実現する二つの主要形式とは教義（Dogma）と組織（Verfassung）である」⁵⁶。これらの形式はあらゆる時代に現れるが、時代に応じてその強度が異なっており、たとえば、この二つの形式に注目すると宗教改革以前はさらに二つの時代に分けること

⁵⁵ Baur, *Das Christentum und die christliche Kirche der drei ersten Jahrhunderte*, v.

⁵⁶ Baur, *Die Epochen der kirchlichen Geschichtsschreibung*, 263.

ができる。

最初の諸世紀は教義の発展の時代であり、そこで中心を占めているのは「キリストの人格に関する教説」⁵⁷——ロゴス、三位一体、キリストの二つの本性とその関係——である。「キリスト論の中心から、そしてそのなかで示された根本的見解の類比にしたがって教義を形成しようとする努力は最初の6世紀の教会史の本質的内実である」⁵⁸。パウルにとって、このような時代において教会は「その意識の絶対的内実であるところの神と人間の一致を……キリスト教信仰のあらゆる教義のうちにもたらそうとする、抗いがたい衝動」⁵⁹をみずからのなかにもっている。

宗教改革以前の最初の時代が教義の発展の時代であるならば、そのあとに続く中世全体を含む時代は「位階制」(Hierarchie)、より限定すれば「教皇権」(Papstthum)の歴史である⁶⁰。この時代は教皇権のうちに「実現された教会の理念が観照される絶対的形式」⁶¹を見るのであり、パウルは次のように総括している。

教会の最初の発展からそれ自体として実現しようとした教会の理念は位階制という制度の頂点としての教皇権のうちに実現されており、その見える現象におけるカトリック教会(die katholische Kirche in ihrer sichtbaren Erscheinung)は教会の理念の完全にして妥当な現実的具現である⁶²。

教義、位階制、教皇権のなかで現実的形式としての教会は理念を、そし

⁵⁷ Ibid.

⁵⁸ Ibid., 264.

⁵⁹ Ibid.

⁶⁰ Ibid., 264-265.

⁶¹ Ibid., 265.

⁶² Ibid., 266.

てキリスト教それ自体を実現していく。

しかし、このような時代も宗教改革という「重大な転回点」⁶³を前にして、大きな変化を余儀なくされた。バウル曰く、「その転回点から教会の理念は、みずから編んだ織物をふたたびほどく傾向だけをもっているように見える」⁶⁴。まさに織物がほどけるように、堅牢な教会のなかにも動揺が生じた。「教会に魂を吹き込む精神は、いまや抵抗や抗議、対立、存在するものの否定である」⁶⁵。バウルによれば、こうして宗教改革の結果として、教会のあいだには「見える教会と見えざる教会」⁶⁶という本質的区別が設けられたのである。

見える現象としての教会は、そこで「その理念の絶対的内実」、そして理念と現象の一致を主張する⁶⁷。バウルは、このような教会の形式が支配的な時代を「教会の絶対主義の時代」⁶⁸と呼ぶ。教会が絶大な権力をもつところでは、個人は「教会の客観性」のなかに「みずからの存在と意識の中心点」をもつことになる⁶⁹。しかし、主観として個人がみずからの状態に満足することができなくなったとき、その主観は「宗教的意識の本質的内実を形成するすべてのものに対して絶対的な主観であること」⁷⁰に目覚めることになる。このような教會的歴史叙述は、宗教改革を「重大な転回点」として、カトリックからプロテスタンティズムへの教会史を叙述していることは確かである。バウルは、次のようにカトリックとプロテスタンティズムを対比する。

⁶³ Ibid., 267.

⁶⁴ Ibid.

⁶⁵ Ibid., 267-268.

⁶⁶ Ibid., 268.

⁶⁷ Ibid., 269.

⁶⁸ Ibid.

⁶⁹ Ibid.

⁷⁰ Ibid.

プロテスタンティズムは主観的自由、信仰と良心の自由、そして主観の自律の原理であり、それらは教会のカトリック的概念のあらゆる他律と対立している⁷¹。

このように描写すると、パウルはカトリック教会に対するプロテスタント教会の優位を主張しているように思われるかもしれない。果たしてそうだろうか。ここで指摘すべき点は、パウルは単純に宗教改革を軸にしたプロテスタンティズムの優位を前提にしているとは言い切れないということである。先に述べたように、宗教改革以後の時代の教会は魂を吹き込まれたが、同時にみずからのうちに対立や否定を抱えることになった。パウルは「あらゆる方向でこれまでの肯定は否定と対立する」⁷²と書いている。キリスト教はそれぞれの時代に特定の教会の形式を通じて、みずからを歴史のなかで実現していく。歴史における理念と現象、普遍と特殊、そして肯定と否定の弁証法的関係が、パウルによる教会史の解釈枠組みである。そうであるならば、宗教改革以後のプロテスタンティズムの成立によって理念の運動が終わったとはけっして言えないのではないか。カトリック的肯定がプロテスタント的否定によって終わりを迎えるのが、彼の教会史理解ではないはずである。以下の引用が、キリスト教会の歴史における理念の発展について明確に語っている。

キリスト教会の歴史が教会の理念の運動であり、したがって単に偶然的な連鎖で継起する一連の変化から成っているのではないかどうかということに関して、一体まだ疑念があるべきであろうか。もし人が教会の理念について正当に語るとすれば、この理念もまた他のあらゆる理念と同じく、一連の現象のなかに自己を実現するためにみずから自身の外に出る、活き活きとした衝動をみずからのうちにもっていなければ

⁷¹ Ibid.

⁷² Ibid., 268.

ばならない。こうした一連の現象は、一般に理念とその現象とのあいだに生起する関係のさまざまな側面とみなされうるだろう⁷³。

バウルは「時代の普遍的な合言葉」として、「キリスト教のヒューマニズム化、合理化、主観化、内在化、精神化」について語っている⁷⁴。理念の不断の運動と教会の形式の変化は歴史におけるキリスト教の現れ方と密接な関係にあることがわかり、その現れ方が教会史の諸時期を形成するのである。その意味では、プロテスタンティズムが達成した諸原理もまた、彼にとっては歴史における弁証法的運動の一段階に過ぎないのかもしれない。

おわりに ― 鏡を映す鏡

バウルは、「鏡」の比喩を使って歴史家（歴史叙述家）の役割について次のように書いている。

歴史叙述家（Geschichtsschreiber）は、彼が ―― それがいかなる種類のものであったとしても ―― 主観的見解や関心のあらゆる一面性から自由になり、事柄それ自体の客観性のなかにみずからをおく限りにおいてのみ、みずからの課題に適合することできる。そして、その結果、彼は歴史を彼自身の主観性の反映とする代わりに、むしろみずからが歴史的現象がその真の現実的な形態のなかで観照されるような単なる鏡（Spiegel）となる⁷⁵。

ここでは歴史家はみずからの主観性を歴史に反映させるのではなく、歴史的現象が歴史家の主観に反映されるという意味では、歴史家は鏡にすぎ

⁷³ Ibid., 260-261.

⁷⁴ Ibid., 274.

⁷⁵ Ibid., 259.

ないと言われている。歴史家が鏡になったとき、彼は「事柄それ自体の客観性」のなかにおかれているのであり、それは究極的にはみずからの主観性が克服されたところの鏡に歴史における理念、精神、そして真理が映し出される瞬間である。ところが別のテキストを読んでみると、パウルは鏡の比喩で歴史家ではなく、歴史を語っていることがわかる。

歴史一般であるものとは、永遠に明瞭な鏡 (der ewig klare Spiegel) である。その鏡のなかで、精神 (der Geist) はみずから自身を観照し、みずから自身の像を観察する。それは精神が即自的であるところのものが、対自的にも、つまりみずから自身の意識に対しても存在するためであり、またみずからを歴史的に生成したものの原動力 (die bewegende Macht des geschichtlich Gewordenen) として知るためである⁷⁶。

この引用においては、歴史が「永遠に明瞭な鏡」に喩えられている。歴史のなかを運動する精神は歴史にみずからを映すことで即自的状态から対自的状态になり、そのとき精神はみずからが「歴史的に生成したものの原動力」であることを知る。

精神はみずからを歴史に映し、歴史家はその主観性を克服したところで、歴史のなかに映った精神をみずからに映す。そうであるならば、パウルにとって、精神を媒介にしながら鏡を映す鏡こそ歴史家であり、そこに歴史叙述が成立するのである。限定された意味での教会史もまた、キリスト教の歴史に映しだされた理念が、その歴史的現象としての教会のなかでいかなる原動力として働いているかを、教会史家がみずからの鏡に映し出していく作業である⁷⁷。

⁷⁶ Ferdinand Christian Baur, *Lehrbuch der christlichen Dogmengeschichte* (Darmstadt: Wissenschaftliche Buchgesellschaft, 1979), 59.

⁷⁷ プロテスタント神学者エルンスト・トレルチは次のように書いている。「宗教史的な教義学のいま一つの偉大なる試みは、ヘーゲルによってなされ、彼

とはいえ、このような歴史観そして歴史叙述論においては最終的に歴史家の主体は必要なくなると理解してよいのだろうか。いや、それ以上に、神の場所はいくどこにあり、歴史家はそれをただ歴史のなかにのみ見出すということであろうか。本論文の冒頭で神にとっての「19 世紀という問題」という表現を用いたが、まさに 19 世紀は超自然主義的な場所を失った神に大きな問題を突き付けたのである。神はみずからの場所を探し求めてさまよう。バウルは神に歴史という新たな場所を用意したかもしれない。しかし、果たしてそれは神にとって満足のいく場所であったのだろうか。神が鎮座すべき場所はどこか。パウルの歴史的な神学は、究極的には神がいかなる場所に鎮座していたかを教会史として叙述すると同時に、その叙述の方法が神の場所を描くのに果たしてふさわしいものであったかを歴史叙述論として展開したと考えられるはずである⁷⁸。

の神学上の弟子たち、とりわけ有名なチュービンゲン学派によってさらに進められた。ここでは歴史哲学全体と同じく、宗教の歴史哲学もまた、神的な本質とその生命の論理的運動法則という確固たる概念に帰せしめられた。この意味でキリスト教的な生の世界は……論理的に必然的な、神的精神の自己運動を完成させる、宗教史の出来事として構成されたのである。キリスト教とは神的精神の自己実現であり、その精神はみずからに向けて有限な精神を救済する歴史的運動のなかにある」。キリスト教の観点から見たパウルの歴史理解としては、簡潔であるが的を射た指摘である。Ernst Troeltsch, “Die Dogmatik der »religionsgeschichtlichen Schule«” in *Gesammelte Schriften, Zweiter Band, Zur religiösen Lage, Religionsphilosophie und Ethik* (Aalen: Scientia Verlag, 1962), 506. 以下の邦訳も参照した。「『宗教史学派』の教義学」（『トレルチ著作集 2』、高森昭 [訳]、ヨルダン社、1986 年）、218 頁。

⁷⁸ 本文ではふれなかったが、森田雄三郎『キリスト教の近代性——神学的思惟における歴史の自覚』（創文社、1972 年）に所収されている「歴史的運動としてのキリスト教（F.C.パウルの神学的歴史理解）」は、部分的言及を除けば、おそらく日本における唯一のまとまったバウル論である。もともとは同志社大学神学部の記事『基督教研究』第 33 巻 1 号、1964 年に「パウルの

* 本研究は JSPS 科研費 21K00092 の助成を受けたものです。

歴史理解」として公表されたものであり、のちに上記の書物における一つの章を構成する論文として「補足」がなされたとある（森田『キリスト教の近代性』, 119 頁（注 1））。パウルの思想展開の区分など、いまでは修正が必要な論述も見受けられるが、大きな問題意識としては啓発的な論文である。森田にとって、「弁証法的発展と目的論的発展という点ではパウルとトレルチは対照的ではあるが、ハルナックにおけるあいまいさをふたたび発展として再把握し、歴史全体から理解しようとした点では、トレルチはパウルの企図を徹底したといえる」（151 頁）。しかし同時に、この三人の神学者の思想的流れは「共通した基本線」によっても支えられていたと言う。「それは、キリスト教は歴史的宗教であり、キリスト教の理解は本質的に歴史的批判であるという思考である。この基本的態度に関しては、ハルナックもトレルチも、パウルの設定した自由な学的批判という枠を越えなかったといえよう」（152 頁）。さらに森田は、パウルにはじまるプロテスタント神学史を延長する。すなわち「パウルからハルナック、トレルチへと至る線は、ブルトマンおよびバルトに比較されるとき、歴史的キリスト教をしてそれ自体を語らしめようとする基礎的思考において一貫している。したがって、その線上における進歩は原理的進歩というよりは原理応用の進歩といえるであろう。これにたいして根本的原理の変更を主張するのがブルトマンとバルトである。その相違は、自由主義神学の歴史理解がいわば「地平的」（horizontal）把握へと向けられたのにたいして、弁証法神学はいわば「垂直的」歴史へと関心を集中することにある」（158 頁）と、彼はプロテスタント神学史を総括している。「地平的」と「垂直的」という言葉での歴史理解に古さを感じることは否めないが、パウルからハルナック、トレルチへと至る線、そしてこれら三人の神学者の違いのみならず、のちのブルトマンとバルトの神学的立場との関係を「原理応用の進歩」と「根本的原理の変更」という視点で叙述する森田のプロテスタント神学史の学問的妥当性は、いまだ日本ではパウルもハルナックも本格的に研究がなされていないものの、改めて問われてよいのではないだろうか。

〈翻訳〉F・W・グラーフ
「序章 多くの分裂を孕んだ人物」
(『エルンスト・トレルチ 世界地平の中の
神学者 一つの伝記』より)

(訳) 小 柳 敦 史

本稿はミュンヘン大学プロテスタント神学部名誉教授フリードリヒ・ヴィルヘルム・グラーフ博士の著書『エルンスト・トレルチ 世界地平の中の神学者 一つの伝記』(Friedrich Wilhelm Graf, *Ernst Troeltsch. Theologe im Welthorizont. Eine Biographie*, C. H. Beck, München, 2022) の「序章 多くの分裂を孕んだ人物」(Einleitung: Der Vielspältige)を訳出したものである。2023年は、19世紀終わりから20世紀初めに活躍したドイツの神学者・哲学者エルンスト・トレルチの没後100年にあたる。この記念すべき年を前にして、トレルチ研究の第一人者であるグラーフ氏による広範な評伝が出版された。

グラーフ氏が牽引してきた、トレルチの批判改訂版全集(Kritische Gesamtausgabe; KGA)の出版プロジェクトは全27巻の計画のうち19巻が刊行され、完成に近づきつつある。そして、そこに含まれる新たな資料も活用されることで、1980年代以降、トレルチに関する多くの研究書が出版されてきた。しかしながら、トレルチの生涯全体を扱った評伝はこれまで、1991年に出版されたドレッシャーの著作ⁱしか存在しなかった。グラーフ氏による新たな評伝は、近年新たに確認された書簡や草稿などの新資料を基に執筆された記念碑的著作である。出来ることなら本書全体を翻

ⁱ Hans-Georg Drescher, *Ernst Troeltsch. Leben und Werk*, Vandenhoeck & Ruprecht, Göttingen, 1991.

訳して日本語を解する読者に提示したいところだが、600頁を超える大著なので、そのすべてをすぐに訳出することは訳者の能力では不可能である。そこで取り急ぎ、本書の問題関心を知ることのできる「序章」を訳出することとした。

「序章」はトレルチ没後の物語である。第1節では、アドルフ・フォン・ハルナックの弔辞の分析を中心に、葬儀の様子が描かれる。第2節では、葬儀の参列者や生前に関わりのあった人物の紹介を通じて、トレルチの活動領域の広さが伝えられる。第3節では、現在に至るまでのトレルチに対する評価の変遷が概観された上で、トレルチを「多くの分裂を孕んだ人物」(Der Vielspältige)として論じるという本書の基本方針が示される。以上で「序章」が閉じられた後、原著では全22章をかけてトレルチの生涯がその誕生から順にたどられていく。

従って、ここに訳出した「序章」において、トレルチはすでに死んでいると同時にまだ生まれておらず、主人公たるトレルチ自身の言動やテキストの分析は基本的にはなされない。しかしながら、時代状況および歴史的背景を可能な限り視野に入れながら神学的テキストを解釈し、その作業を元に神学的テキストを時代状況を読み解く資料として用いるという、グラーフ氏の〈神学史〉(Theologiegeschichte)の魅力は「序章」においても存分に発揮されている。この記述スタイルの特徴は、聖書の引用箇所の解釈にはじまり、20世紀初頭の知識社会の状況という同時代的コンテキストへも十分に目配りをした上で、手稿資料に残された感嘆符の数にまでこだわりを見せる、ハルナックの弔辞の分析において典型的に表れている。

ただし、そのようなグラーフ氏のテキストの魅力を拙訳が十分に表現できているかは心許ない。また、訳語の選択においても、特に官職名や葬送儀礼に関する用語など、訳者の乏しい知識では確信を持って決定できなかったものも多い。翻訳の間違いや適切な訳語についてご教示いただけると大変ありがたい。なお、聖書からの引用については、原則として『聖書聖書協会共同訳』に従った。

(訳者記)

*

*

*

弔辞

1923年2月3日土曜日、昼の12時頃のベルリンのヴィルマースドルフ。9ヶ月前の1922年5月11日に初めて開設された火葬場の中央大ホールは満員である。著名な学者や芸術家、影響力ある政治家やジャーナリスト、若い研究者や数多くの学生たちが、ある者は座り、ある者は立ちながらひしめき合っていた。今日では少数の人に記憶されているに過ぎないが、当時は最も高名な知識人の一人であったエルンスト・トレルチに別れを告げるためである。妻マルタと9歳の息子エルンスト＝エバーハルト、それからエルンスト・トレルチの弟ドルフは、かつての陸軍元帥であり将来の大統領であるパウル・フォン・ヒンデンブルクの車で火葬場に向かっていった。マルタたちは、玄関ホールとなっている切妻様式の建物や前の庭でひしめき合いながら待っている人だかりの中を歩いていかななくてはならなかった。そこにいる人たちはもはや中に入ることができなかったのも、低く垂れ込めた灰色の雲の下、拡声器によって放送される葬儀に外で耳を傾けていた。彼らは8度そこそこの気温と、強い突風、激しいにわか雨に凍えていた。しかし、ホールの中もたいして暖かいわけではなかった。

弔問客の多くは動揺していた。「ここ数年で、エルンスト・トレルチの死よりも精神面でのドイツ（das geistige Deutschland）を揺るがした死はないと言っても過言ではない。この精神面でのドイツは今もなおドイツの核心であり、将来の再生の希望である」と、保守的な政治学者であり出版人であるアドルフ・グラボウスキーは、彼が編集していた雑誌『新しきドイツ』（*Das neue Deutschland*）の3月号に記すことになる¹。「数百人規模の弔問客の集まり」²についての報道もあった。

2月1日早朝のトレルチの突然の死そのものが、近しい友人たちを心底驚かせ、多くの学問上の論争相手や政治的な敵対者たちをも動揺させた。1920年頃、世界的に最も有名なドイツの人文学分野の学者だったアドル

フ・フォン・ハルナックもまた目に見えてショックを受けていた。ハルナックは、カイザー・ヴィルヘルム協会の会長や、プロイセン邦立図書館長、ベルリン大学（フリードリヒ＝ヴィルヘルム大学）教会史講座主任教授としてではなく、プロテスタントの牧師の襟飾をつけた黒い僧服に身を包んで、キーワードを記した4ページばかりの原稿だけを頼りに「エルンスト・トレルチへの弔辞」を述べた。ほとんどの参列者は、この弔辞を、心を揺さぶり、琴線に触れ、とても故人に寄り添ったものであると感じた。「火葬場に遺体が横たえられるとハルナックが弔辞を述べた。冷淡なまでに抑制的だと陰口を叩かれることもしばしばであるハルナックだが、深く心をとらえる言葉を見出した」³と芸術史家のヴェルナー・ヴァイスバッハはかなり後年になってから回想している。ヴァイスバッハはトレルチの友人の一人であり、1890年代半ばにユダヤ教からプロテスタントに改宗した人物である。

前奏としてヨハン・セバスチャン・バッハの「おお永遠、そは雷のことば」がパイプオルガンで演奏されてから、ハルナックが14歳年下の友人に向けて追悼演説を行った。ハルナックはスピーチを「主の平和が私たちと共にありますように」という説教の挨拶によって始めた。そして続いて、イザヤ書40章1-2a節と6-8節から説教のためのテキストを朗読し、会衆が「アーメン」の声でそれを確認した。それからハルナックは葬儀の会衆に「喪に服している敬虔な皆さん」と語りかけた。ゲルハルト・テアシュテゲンのコラルから引用で説教を締めくくることによって、ハルナックは彼が述べたことを強調した。その後、ハルナックは会衆とともに主の祈りを唱えた。それに続いて新たな曲がパイプオルガンで演奏された。ハルナックは、葬儀の中で彼が司式をした礼拝の部分を、それに続く学問的および政治的な追悼演説から区別することを心がけた。

ハルナックによって選択されたテキストは、彼がトレルチの神学と心の信仰を熟知していることを認識させる。「おお永遠、そは雷のことば」は、ヨーハン・リスト作詞による讃美歌であり、1642年にリストの「天の歌」第四部に、「無限なる永遠性についての真摯な考察」として発表されたもの

である。葬儀の会衆はこの讃美歌を、死者が生涯に成したことへの仄めかしとして聞いたに違いない。なぜなら、リストの詞は、ヨーハン・ゲルハルトの1606年に出版された『聖なる黙想』の中の、「地獄ノ刑罰ノ永遠性ニツイテ。永遠ナル悪ノ苦痛」というタイトルを持つ50番目の黙想を改変したのだからである。1700年頃の古ルター正統主義の指導的な教義学者だったヨーハン・ゲルハルトは、ここでダンテの「地獄篇」から中心的なモチーフを採用している。それゆえ、リストの詞の第一節を読誦することでハルナックは、トレルチが博士論文を書いた際に主題とした人物であるヨーハン・ゲルハルトだけではなく、同時にダンテをも仄めかしたのだ。多くの葬儀参列者は、ハルナックがトレルチとともに、1921年7月3日に盛大なドイツ・ゲーテ祭典を催したことに思いを馳せたことだろう。トレルチはその祭典でハルナックに続いて、「浄化の山」について講演したのだった⁴。

説教のためのテキストの選択も注目に値する。イザヤ書40章1-2a節と6-8節によってハルナックは、プロテスタントの葬儀礼拝でとても大切にされていた、旧約聖書の預言者のテキストを選んでいる。

「慰めよ、慰めよ、私の民を」と、あなたがたの神は言われる。「エルサレムに優しく語りかけこれに呼びかけよ」(中略)「呼びかけよ」と言う声がする。私は言った。「なんと呼びかけたらよいでしょうか。」「すべての肉なる者は草、その栄えはみな野の花のようだ。草は枯れ、花はしぼむ。主の風がその上に吹いたからだ。まさしくこの民は草だ。草は枯れ、花はしぼむ。しかし、私たちの神の言葉はとこしえに立つ。

「エルサレムに優しく語りかけよ」という引用は、参列していた大勢のユダヤ人への呼びかけの試みだと読まれるべきである。さらに決定的なことは、時間と永遠の止揚不可能な緊張によって、トレルチが生涯をかけて取り組んだ中心的テーマを宗教的な反省の中心へと押し出す契機が、テキストを通して開けてくることである。テキストはハルナックに、「なんと呼びかけたらよいでしょうか」と、彼自身の役割を主題化する可能性も提供

する。さらに、不朽の永続的な神の言葉によって、プロテスタント的伝統のアイデンティティを構成するトボスが示される。そうすることで、ハルナックは友の哲学上の業績をも、そこに暗黙のうちに含まれているプロテスタント神学の構造のなかで理解しやすいものにすることができた。それに加えて、テキストは、あらゆる葬儀の基底にある慰安の契機を含んでいる。このようにして説教者は、キリスト教の葬送におけるレトリックの伝統的な要素、すなわちラウダティオ（讃美）、ラメントティオ（悲嘆）、コンソラティオ（慰安）を取り上げた。

おそらく、参列者は全員が、説教者と故人が固い友人関係によってお互いに結びついていたことを知っていた。ハルナックは、まずは職業に特殊な役割という距離のうちに超然と留まることによって、人生におけるこのような近さに存する困難を抑えこんだ。説教の締めくくりの部分において初めて、ハルナックはトレルチと交わしたたくさんの会話に言及するに至る。ハルナックが友の「学問的遺言」だと定式化した『歴史主義とその諸問題』の結末部の文章を詳細に引用した後で、ハルナックは会話のなかでトレルチに発言させる。その後でハルナックは、トレルチの気難しく、すぐに人を傷つけ、また自身も傷つきやすい「人格」の特徴を描き出した。ベルリン日報に掲載されたスピーチの最終段落に従えば、説教者はそれから棺の方を向いたようである。ハルナックはここで死者に直接「愛しきかけがえのない友よ」と呼びかけて、改めて故人を悼んだ。「私たちはもう君に会うことはなく、もう君の声を聞くこともない。ああ、自然な感情を押さえつけるのはいかにつらく、いかに苦しいことか」⁵。

死者へのこの直接の呼びかけによって——これは説教の草稿には見あたらない！——ハルナックはプロテスタントの説教あるいは説教論の基本的な原則に抵触した。プロテスタントの伝統では、ヴィッテンベルクの宗教改革者以来、追悼説教は故人との仮想的なコミュニケーションを助長しないということが確定的なことだとみなされてきた——故人はもはや聞くことができないのだから。棺や墓の前での説教は厳密に、死者の今や確実に完結した個人的な人生の物語を、嘆き悲しむ会衆の前で宗教的に表象す

ることに役立つものでなくてはならない。会衆の絶望を言語化し、慰めを媒介するためである。それゆえに、追悼客の代表である公衆の前で(あるいは少なくともベルリン日報の学芸欄の読者の前で)友に直接語りかけるというハルナックのレトリック上の戦略には驚かざるを得ない。ハルナックは、親密な友人として、トレルチの死が彼にどれほどのショックを与えたのかを葬儀の会衆に向けて明らかにしようとしたのだろうか。それとも、死者へと直接語りかけたことは、「生きている者の神」についての慰めに満ちた福音に権威を持たせるための手段として用いられたのだろうか。「君がその下へと向かった神は、死んだ者の神ではなく、生きている者の神であり、神に受け入れられた死者は神の傍らで生きている」と、ハルナックはベルリン日報に掲載された講演録のなかで書いている。この一文もまた、説教の草案においてはどこにも示唆されていない。

この、友人への完全に非プロテスタント的な直接の呼びかけを度外視すれば、ハルナックはプロテスタントの葬送文化における伝統的な説教の原則に、悠然と、極めて見事に従っている。すなわち、故人の個人的な人生の物語と、思想の道のり、そして敬虔の秩序体系を解釈し、独自性のうちにある普遍的な要素、すなわち個々人の人生の有限性が理解されうるようにしている。ハルナックの説教の構想から認識できるのは、説教者が自身の行為の限界を魅惑的なほどの精密さで意識し続けているということである。ハルナックはトレルチの学問面での伝記を、なんらかの完結した、完全に最終的に妥当する判断を下すことができるという仕草なしに主題化した。そしてハルナックは、解釈する私たちの理性の宗教的限界を繊細に際立たせる。「トレルチはどうやら、さらにとても多くの実りを約束していた彼の仕事から引き剥がされてしまったようです。しかし、一つの人生がその内側に留められるかどうかを誰が判断できるのでしょうか!」。なぜ疑問符ではないのだろうか。なぜ説教者は草案においてこの箇所に確言的な感嘆符を書き留めたのだろうか。草案中の記号は確かにもっぱらハルナック自身のためのものであるが、同時にレトリックのためのト書きであるとも考えられる。まさしくそこに、こうした記号を解釈する可能性がある。

弔辞のためのハルナックのキーワード集には全体として62個の感嘆符が認められる。大学教員および神学上の知識人としてのトレルチについて確認するいくつかの発言がある。それはハルナックにとってとりわけ重要であると思われるものだった。「古代と近代のあらゆる文献からの恐ろしいまでの消費力(トレルチが読んだもの!)」。「しかし、彼は異質な教義学者だった!学生や同僚たちはそのことにすぐに気がついた」。別の感嘆符は、筆舌に尽くしがたい喪失についての嘆きとして、説教者によって用いられているように見受けられる。「彼は人生には何か意味があること、そして歴史には意味があることを堅く信じていた!」。いくつかの箇所ではハルナックは、二つあるいは三つの感嘆符を記している。「人間!!」、「南ドイツ人!!多血質!彼の頬が赤らむ!!」「道徳的なものの尊厳!!」「永遠的なものに私たちが慣れること!!」。いくつかの記述はハルナックにとって、三つの感嘆符を書きつけるほどに重要だった。「講義とゼミナール!!!」「彼の笑い声!!!」「鉱滓が十分にできた!!!しかし、それはただ彼の中で光り輝く金属の流れがとても大きいからなのだ」。ただ一つの語が四つもの感嘆符を与えられている。「自由!!!!」⁶。

イザヤ書のテキストの比喩によってハルナックは、このまごうことない断片的な人生という枯れてゆく草の中に、神の不朽の言葉、すなわち時間を超越した内実を可視化しようと試みた。ハルナックは葬儀の会衆に、友の神学上の根本的洞察を想起させようとしたのだ。生から死へと向けられた沈鬱な気分させる眼差しは、死から永遠へと向かう眼差しのために超越されなくてはならない、という預言者の言述はハルナックにとって、歴史の流れのなかの超歴史的な拘束力を求める、トレルチの穏やかならぬ不断努力を、プロテスタント的な反省の地平に書き込むために役立った。ハルナックがスピーチした相手の会衆の生活世界は一般に、大学、研究所、そしてアカデミーに規定されていた。説教者は一般的なこと、すなわち、ベルリン大学とプロイセン・アカデミーがここ二年の間に被ったつらい喪失から話を始めた。アイヒェンドルフの「私たちの眺めるものは変わっていく」——アルバン・ベルクが1904年に新たに曲をつけた——の最初の二

節の引用に続いて、ハルナックはトレルチを、永遠なる神の言葉を求めて格闘した神学者として評価する。学問上の伝記の描写は、トレルチの個人的な敬虔さの記述へと到達する。ベルリンの歴史哲学者もまた、「私たちの福音主義的なキリスト教の伝統の核心」と「赦し」の必然性についての知を保持していたのである。

1905年5月にエルンスト・トレルチは故郷の街の市役所の黄金のホールにて、アウクスブルク・シラー祭のための祝辞を述べた⁷。ハルナックはそのことも仄めかす。「思考は私の計り知れないほどの王国であり、言葉は私の翼の生えた道具だ」という表現は、シラーの1804年の詩「芸術の忠誠」に由来する。ハルナックがこの表現を記憶から呼び起こし、わずかに変形して書き込んだのは、トレルチの哲学的反省を特に規定するものを特徴づけるためであった。それは、諸現象からなる所与の世界を、思考からなるコスモスとして反省によって見通すことである。

最後の祈りの前に、ハルナックはゲルハルト・テアシュテージェンによって1745年に生み出されたコラル「今や一日が終わった」の最終節を引用した。「どの日もその翌日に伝える。／私の人生は放浪、／偉大な永遠へと向かう。／ああ、永遠よ、なんと美しい。／私の心を君に慣れさせよう。／私のふるさとはこの時間のうちにはない」。このテアシュテージェンとの関連づけもまた、トレルチの神学プログラムと、そのプログラムに反映されている敬虔に対する説教者の高い感受性を認識させる。テアシュテージェンはトレルチにとって、ドイツ改革派教会の最も重要な神秘主義者であり、ヨアヒム・ネアンダーと並んでドイツ改革派教会で最も影響力ある作詞家であるとみなされていた。プロテスタンティズムの文化的意義についての歴史学的著作においてトレルチは、「心ある詩人テアシュテージェン」は「諸宗派を超えてはつきりと自分の立場を決め、魂の選ばれた指導者として神の友を集めた」と述べた⁸。このようにしてハルナックは暗黙のうちに、あらゆる宗派のかなたにある神との神秘的な直接性に対するトレルチの高い評価をも主題化したのである。

残念ながらオルガンでの二つめのコラルの後では他にさらに多くの講

演者が悲しみを表明しなければならなかった。それゆえ、ハルナックの感銘を与える語りにもかかわらず、葬儀はすぐに沈鬱な雰囲気との式典となった。「エルンスト・トレルチの葬送の際に講演者以外のおそらく私たち全員が受けた苦悶」を、テオドール・ホイスは14年後にもなお思い出している⁹。

プロイセン科学アカデミーの物理学・数学部門の事務長として、ベルリンの生理学者マックス・ルブナーがトレルチに敬意を表した。トレルチは死の直前である1922年11月30日にはじめて、アカデミーの正会員に選出されていたのだが、その空間に足を踏み入れることはもはやできなかった。フリードリヒ・ヴィルヘルム大学を代表して、学長である医学者アルトゥール・ヘフターが、そして哲学部を代表して哲学者・教育学者であるエドゥアルド・シュプランガーが話した。ハイデルベルクで共に過ごした時期からすでに故人をよく知っており、1922年からベルリンで教えていた歴史家エーリヒ・マルクスは、1914年にトレルチをバイエルン科学アカデミーに受け入れることに携わった人物である。彼が、かつての学長かつバーデン州上院議員が亡くなったことに対するハイデルベルク大学の悲しみを表明した。トレルチの学生であったアルベルト・ディートリヒの登場はさらにづらいものだった。ディートリヒは、そのあまりに長すぎる話のなかで、感情の高まりを避けるすべを心得ていなかった。左派リベラルのドイツ民主党(DDP)の指導的な政治家であり、トレルチ夫妻と親しい友人であったドイツ国財務大臣兼法務大臣オイゲン・シファーは、フリードリヒ・ナウマンとマックス・ヴェーバー亡き後の党が、そして共和国全体が、影響力ある先駆的思想家を再び失ってしまったことを嘆いた。新聞報道からは、この後さらに政治機関や学生団体の代表者たちが発言したことが推測される。「ドイツの大学の代表者たちが、感動的な言葉で偉大な教師との別れを告げた。学生団体の代表は偉大な指導者を失ったことの心痛を表明した。故人の個人的な友人たちは棺に最後の挨拶を手向けた。(ドイツ民主党)、政府の代表者、ならびにその他の公的な人物たちは、最後の機会にトレルチの人柄を褒め称えた」¹⁰。

ベルリンの国民経済学者ルートヴィヒ・ベルンハルトは、以上のような語りを陳腐化だと感じた。葬儀の日のうちに、ベルンハルトはハルナックに宛てて次のように書いた。「トレルチに向けたあなたの語りが私に感銘を与えたので、私はあなたに対して私の感動を表現せずにはいられません。あなたの言葉の力強さと美しさはあまりに偉大で、私は「ドイツのなかでこのように話すことができるのはただ一人なのではないか?」と繰り返し自問しました。語りえないものをまったくシンプルな言葉によって感じ取らせ、それによって聴衆が巻き込まれざるを得なくし、そしてあなたの魅惑的な力を全員に投げかけるのは、あなたに特有のわざです。それだけに、あなたの後にまったく陳腐な調子で語られることが許されたことは、私をとてつらい気持ちにさせました」¹¹。

生活世界と葬儀の会衆

死を悼む人たちの豪華な集まりは、エルンスト・トレルチを形成し、トレルチ自身が多かれ少なかれその形成に決定的な仕方で参与してきた生活世界の複雑な多様性を反映していた。エルンスト・トレルチは1922年以来、フリードリヒ・ヴィルヘルム大学哲学部の学部長であった。トレルチは学部長への選出を、学部内の政治的に右派の教授たちや、急進的ナショナリストの教授たち、反デモクラシーの教授たちによって自分が以前よりも受け入れられたことのしるしと解釈した。そうした教授たちは、トレルチの親共和国的な姿勢や、とりわけドイツ民主党への参与を非難していたのである。在職中の学部長が死んだ際に、哲学部の多くの教授たちが、トレルチの葬儀に参列するべき義務を感じたのは驚くようなことではない。確かに、その当時は数学・自然科学講座もその一部であったフリードリヒ・ヴィルヘルム大学の哲学部の58人の教授全員が出席したわけではない。しかし、多くの教授たちが、トレルチの敵対者たちすらも臨席したのは驚くべきことだった。

学部の同僚の輪のなかから、まずは親しい友人やよく知る間柄の人が挙

げられる。とりわけ、遅くとも1901年以降はトレルチと意見を交わし合っていた歴史学者フリードリヒ・マイネッケと、国民経済学者ハインリヒ・ヘルクナーである。彼らはそれぞれの妻と共に葬儀に来ていた。フランス革命を専門とする優秀な女性歴史学者ヘドヴィク・ヒンツェ——彼女は1933年にユダヤ系であるという理由でドイツを追われる——は、1916/17年の冬学期以来、トレルチのゼミナールに熱心に参加していた。彼女は夫であり、国制史・行政史・経済史および政治学講座の主任教授を担当していたオットー・ヒンツェと一緒に来た。トレルチはオットー・ヒンツェのことも高く評価しており、彼らはいくつもの夕べを共に過ごしてきた。東欧史家のカール・シュテーリンもとりわけ悲嘆にくれていた人の一人に数えられる。シュテーリンはかつて、アウクスブルクの聖アナギムナジウムでトレルチと同級生だった。その他に、以下のような人たちも参列していた。ハルナックの義理の兄弟である軍事史家ハンス・デルブリュック。彼の編集していた雑誌『プロイセン年報』に、故人は何度も投稿していた。そして、トレルチの引き立てによって教授へと昇進した、労働運動についての社会民主主義的な歴史家であるグスタフ・マイアー。彼はリベラル・プロテスタントの知識人政治家を、その政治的な勇気を理由として賛美していた。非常に多くの読者を獲得した近代資本主義についての理論家である社会学者ヴェルナー・ゾンバルト。彼は、自身のベルリン大学への招聘の決め手となったのがエルンスト・トレルチの所見であることを知っていた。さらに、農業史家マックス・ゼーリンク、トレルチと懇意にしていたゲルマニスト・文学研究者であるコンラート・ブルダッハ、ロマンス語学者・ダンテ研究者のエドゥアルト・ヴェヒスラー、心理学者ヴォルフガング・ケーラー、新カント派の哲学者アロイス・リール、医学の素養のある心理学者・哲学者であり、そのゼミナールでは時おりシュテファン・ゲオルゲが詩を披露していたマックス・デソワールも来ていた。アルバート・アインシュタインも葬儀に姿を現した。

トレルチの死は、単なるローカルな、すなわち一地域の学術界の出来事を超えるものだった。トレルチをよく知り、また親しかった教授仲間が大

勢、故人に敬意を表するための長旅を自らに課した。ミュンヘンからは、ロマンス語学者カール・フォスラーが来た。ハイデルベルクからは、優れた新約聖書学者であるマルティン・ディベリウスと、ユダヤ教からプロテスタント教会へと改宗した哲学者・神学者であるハンス・エーレンベルクが到着した。エアランゲンから来ていたのは親しい友人であった哲学者パウル・ヘンゼルと、企業家ロルフ・ホフマンだった。トレルチは、1922年に設立されたホフマンのブルクベルク哲学アカデミーに、理事長として責任を負っていたのである。

トレルチは、リベラル左派の「ドイツ民主党」のベルリンの候補者リストの一位でプロイセン国民議会選挙に立候補して当選しており、党大会の講演者としてもドイツ民主党に参加していた。それゆえ、多くのドイツ民主党指導者の姿が見られたことは驚くべきことではない。オイゲン・シファーと並んで、(同様にユダヤ教からプロテスタント教会へと改宗した)国会議員ゲオルク・ゴータインがやってきた。ゴータインは1921年以来、反セム主義防止協会の代表であった。さらに、市民階級の女性運動に参加していた国会議員であるゲルトルート・ボイマー、社会政策家マリー・バウム、それからハルナックの娘アグネス・フォン・ツァーン＝ハルナックもやってきた。ツァーン＝ハルナックは、フリードリヒ・ヴィルヘルム大学に女性として初めて——1908年に——入学することができた人物である。それからもちろん、エリー・ホイス＝クナップも、夫テオドールを伴ってそこにいた。彼女は、トレルチとともに何度もドイツ民主党の選挙演説会に参加していた。トレルチが支援していた民主主義学生同盟から来ていた学生に数えられるのは、トレルチの授業の受講者だったエルンスト・レマーと、歴史学徒であり、テオドール・モムゼンの孫であるヴィルヘルム・モムゼンである。エーリッヒ・アウエルバッハ、ハンス・バロン、ゲルハルト・マズア、ハンス・ヨナスといった若きユダヤ系知識人たちも、彼らの学問上の教師への誠実さをはっきりと示していた。

プロイセンの学問・芸術・国民教育省の次官補、後には政務次官として、トレルチは1919年3月から1921年4月までプロイセン州政府の一員で

あった。葬儀に際して、1921年11月から1925年1月までプロイセンの文部大臣を務めた、リベラル右派のドイツ人民党に所属するオットー・ベアリッツと、将来のプロイセン国務長官であり1921年には学問・芸術・国民教育大臣であったカール・ハインリヒ・ベッカーが政府を代表した。ベッカーはトレルチより11歳年少の傑出したオリент学者であり、1902年から1908年にはハイデルベルクでの時間を共に過ごしていた。この時からすでに、ベッカーはトレルチから目をかけられていた。

第一次世界大戦中、トレルチは帝国宰相テオバルト・フォン・ベートマン・ホルバークの重要な政治的助言者だった。同様に、帝国最後の宰相マックス・フォン・バーデンとも親密な関係を保った。バーデン大公国上院の構成員として初めて議会活動をした時から、トレルチはマックス・フォン・バーデンをよく知っていたのである。ベルリンに異動してからのトレルチはマックス・フォン・バーデンに何度も長い手紙を送り、軍事的および一般的な政治状況や、帝国の首都の政治家階級や学術的エリートのなかで対立を引き起こしていた戦争目的をめぐる論争について情報を提供した。それゆえ、葬儀に際してドイツ政府も公式に代表を送ることを望んだのは驚くべきことではない。トレルチの友人であり、当時の運輸大臣だったヴィルヘルム・グレーナーが最初の妻であるヘレーナと一緒に来ており、ドイツ政府を代表して、黒・赤・金のリボンをつけた花輪を棺に供えた。グレーナーの近くには、社会民主主義の憲法学者グスタフ・ラートブルッフが立った。

ハイデルベルクからベルリンへの異動によってトレルチは——この葛藤をはらんだ歴史についてはさらに後で語られることになる——、神学部から哲学部へと移った。それでもなおトレルチは、神学的な討議において一層力強く存在感を保ち続けた。それだけに、いろいろな意味で敵視された、慣例を脱したトレルチの《近代的神学》を決然と批判した者たち自身が、突然に人生から引き離された者に、あらゆる学問的な意見の相違にもかかわらず、最後の敬意を示すことを内的に義務だと感じたのだった。ベルリン大学のサークルの中で、美しく、しかも明晰であるがゆえに憧れの的だっ

た女性神学生マーゴット・ハールは、トレルチをフリードリヒ・ヴィルヘルム大学で最上の雄弁家だとみなしていた。彼女が長い会話の中でこだわりを見せたのは、組織神学者アルトゥーア・ティティウスとならんで、ベルリンの神学者のなかでトレルチにもっとも強硬に対立していた教会史家カール・ホルすらも葬儀に参列したことであった。牧師の娘であったハール自身も、当時の友人で、組織神学の私講師でありサロンの社会主義者だったパウル・ティリッヒの同伴者として姿を現した。ティリッヒは、この日の晩に、『フォス新聞』に追悼文を発表することができた。ティリッヒがハルナックの弔辞を聞きながら泣いていたとき、トレルチの最後の助手の一人だったルートヴィヒ・マルクーゼも、もはや涙を押し止めることができなかった。

長年にわたりトレルチと親しかった友人の多くは、葬儀のためにヴィルマースドルフまで来る力を奮い起こすことができなかった。フリードリヒ・ナウマンの義理の兄弟であり、リベラル・プロテスタントの指導的な週刊紙である『キリスト教世界』の編集者だったマルティン・ラーデは、前衛的なまでにラディカルであった若き組織神学者トレルチをすでに支援しており、プロイセン国民議会のドイツ民主党議員団における一般的な政治活動によってもトレルチをととてもよく知っていた。ラーデは、2月3日、マルブルクの彼の学者机から離れず、尊敬する友人の文章をもう一度読んだのだった。Du で呼び合う親しい友人だったカール・ノイマンの物語は明らかにさらに劇的だった。ノイマンはマンハイムの裕福なユダヤ人家庭出身のハイデルベルクの美術史家で、ヤーコプ・ブルクハルトの腹心の弟子であり、かつトレルチの熱狂的な崇拝者であった。それまでの数ヶ月の間に二度の自殺未遂をした後だった彼は、友人の死を知った時、深刻な虚脱状態に陥ってしまった。それゆえ、ノイマンはハイデルベルク大学の精神病院へと入院しなければならなかった。退院後、ノイマンはトレルチのために誰の心をも捉えるほどに思いやりのある追悼文を書いた。ノイマンはトレルチがベルリンに異動した時には別れの夕べを企画し、そこにはハイデルベルクの街の名士たちの代表者が数多く出席したのだった。

トレルチの愛弟子の一人である神学者オットー・フロメルは、トレルチのハイデルベルクでの最初の講義をすでに聴講しており、「芸術と宗教」をテーマにした夕方の少数向けゼミにも数学期にわたって参加していた人物である。彼は、ハイデルベルクの都市教区牧師として、ベルリンには向かわないことを決断した。すなわち、フロメルは葬儀の時間の間、父親のようであった友への追悼文を書くために自分の仕事部屋にこもったのである。

軽蔑され、忘れられたが、片付けられたわけではない

トレルチが死んでからの数日および数週の間に、ヨーロッパの新聞と雑誌、ならびにアメリカ合衆国のいくつかの雑誌に、140を超える追悼文が発表された。葬儀の会衆の大きさや、追悼文の尋常ではない多さを強調したい。エルンスト・トレルチは彼の名声の頂点で亡くなったのである。しかしながら英語圏と日本とは異なり、ドイツではすでに死後まもなく、自由主義者として追放され、1933年以降一般には忘れ去られた。1920年代後半以降、トレルチの本の売れ行きは明らかに下がっていた¹²。この事態は第一に、「学問における精神的革命」——1921年にトレルチ自身がそう呼んでいる——、すなわち、ブルジョワ的で相対主義的だとして軽蔑された近代的歴史主義に対する反リベラルなフロント世代の知識人たちの反乱と関係がある。

戦間期のプロテスタント神学における反歴史主義革命の若々しい主唱者たちは、自分たちを真のキリスト教信仰と宗教改革の神学の精神で神学を刷新するアヴァンギャルドだと理解していた。それゆえ、カール・バルトやフリードリヒ・ゴーガルテンのような神学者たちはトレルチのなかにもっばら、歴史主義的に相対化する思考様式によって実存的に重大な事柄である信仰の実質を規範的に拘束力のないものに解消してしまう、ブルジョワ的な文化プロテスタンティズムを見たのである。しかしこれは、まさしくベルリン時代のトレルチが、彼の知的エネルギーの大部分を、あら

ゆる「文化価値」の歴史的・文化的な相対性への歴史学的認識という条件の下で、個人を超える拘束力ある規範性を根拠づけることに注いだことを念頭に置くと、不条理な非難である。

プロテスタンティズムの批判者マルティン・ハイデガー——トレルチの集中的な読者だった——や、カール・シュミット(彼も同様にトレルチをとても集中して読んでいた)のようなこの時代の新たな哲学の〈存在の思想家たち〉もまた、ヴァルター・ラーテナウの友人でありかつ多くのユダヤ人学生の教師だった人物ときっぱり距離をとった。共和国に対する保守的な反対者とフェルキッシュなラディカル・ナショナリストは、ドイツの政治思想の伝統を西欧的な政治理論の自由で民主主義的な指導理念に向けて開け放とうと試みた、「ヨーロッパ的文化総合」の理論家を必要としなかった。国民社会主義はなおさら、さまざまな分断における、異なる思想を持つものへの寛容、つまり敬意と、数多くの異なる者たちの妥協への用意に基づく自由な共生の秩序についての、共和国を信頼する思想の大家とみなされた知識人への関心をまったく持たなかった。国民社会主義は、その攻撃的な記憶の政治によって、エルンスト・トレルチの思い出を消し去ることに首尾よく成功した。トレルチの弟子であるヴァルター・ケーラーが、ハイデルベルク大学教会史講座の主任教授としてある種の国内亡命をしていた1941年に、今日でもなお読むべき価値のある、エルンスト・トレルチについての伝記的な色彩を帯びた初めての比較的長いモノグラフを出版してはいたのだが¹³。

「トレルチ・ルネサンスは必ずいつか起こる。トレルチの問題は断ち切られてしまったが、片付けられたわけではない」と、エドゥアルド・シュブランガーは1951年のフリードリヒ・マイネッケ宛の手紙で予測した¹⁴。しかしながら、哲学的な議論においてトレルチはまだ一般には忘れられたままである。それに対して、大学でのプロテスタント神学においては、ハーヴァードで教えていたユニテリアンであるジェームズ・ルーサー・アダムズが1974年に「トレルチ・リヴァイヴァル」を断言した¹⁵——もっとも、それはアメリカ合衆国とイギリスに適用されたものであった。そうした地

での議論が圧力となって初めて、1970年代後半以降、トレルチに対する関心はドイツ語圏でも再び大きくなった——まずは、歴史家たちとローマ・カトリックの神学者たちにおいて。ミュンヘンのカトリック神学者カール＝エルンスト・アプフェルバッハーは、1978年に出版された博士論文の序文において次のように述べた。「エルンスト・トレルチのライフワークが神学外で、とりわけ宗教社会学と歴史学において獲得している多大なる名声は、専門的な神学上の討議内部で広く流布している〈トレルチ忘却〉と奇妙なコントラストにある。最近になってやっと、トレルチを捉えていた問題が、新たに神学的な根本問題として到来することがどれほど再び予告されているのかが明白に意識されるようになった」¹⁶。実際にそれ以降、討議の状況は根本的に変わった。これまで知られていなかった数多くのトレルチの出版物が確認できるようになった著作目録を基盤として、1998年から27巻の目標で批判校訂版全集（Troeltsch KGA）が刊行されている。「近代的神学者」および文化理論家としてのトレルチは、まさに多様な民族と複数の宗教を含む社会において再び注目されるべき存在である。

プロテスタント神学者、歴史家、社会理論家、文化哲学者、ある時期は政治家、そして公に開かれた知識人であったエルンスト・ヴィルヘルム・トレルチの人生は、ここでさまざまな仕方で語られるべきである。第一に、伝統的な信仰と近代的な学問の間の認知的不協和についての魂の厳しい格闘のなかで苦労を重ねた、とても矛盾した神信仰を持つ者、すなわち、とても特殊な方法での敬虔さを持った神秘主義者の物語として。第二に、神学という狭い学問領域の境界をいろいろな意味で越え、実にさまざまな議論において存在感を示した、魅力的で生産的な知識人の物語として。第三に、五歳の時には、ドイツ帝国の設立に向けられた父の感激を共にし、1918年に帝国が終わりを迎えた後には、右派からも左派からも脅かされていた共和国のための社会道徳的土台を据えようと尽力した、学者政治家かつ政治的知識人の物語として。最後に第四として、自分の基本的な矛盾性、おそらくは誰よりもたくさんかつ徹底的に、少なくとも誰よりも反省的に苦しんだ一人の人間の物語として。倫理学についてのトレルチの文献

では、「多くの分裂を孕んだもの」(das Vielspältige)の概念が中心的な役割を演じている。これは、自分自身についての終わることのない不確実性を熟慮するしるしでもあり得る。カール・ノイマンは、五歳年少のとても親密な仲だった友人の死の後にこう記した。「トレルチは次々に入れ替わる場面上で、次々に入れ替わる敵対者と格闘した。何より、彼は自分自身と格闘した。私たちは人格の全体性や統一性を追い求める。しかしながら、多様な形態をとり、何度も変化する生は、私たちを揺さぶり引き裂く。それゆえ、矛盾が私たちの運命なのだ」¹⁷。

略号

NB Ernst Troeltsch in Nachrufen. Hg. von Friedrich Wilhelm Graf unter Mitarbeit von Christian Nees (Troeltsch-Studien Band 12), Gütersloh 2002.

原注

¹ Adolf Grabowsky, Ernst Troeltsch, in: Das neue Deutschland 11 (1923), 39–42; nun in: NB, 411–416, 411.

² E. B., Zum Tode Ernst Troeltschs, in: Augsburger Neueste Nachrichten. Schwäbischer Kurier, Nr. 32, Mittwoch, 7. Februar 1923, 3; nun in: NB, 283–286, 286.

³ Werner Weiswach, Geist und Gewalt, Wien/ München 1956, 246.

⁴ Ernst Troeltsch, Der Berg der Läuterung. Rede zur Erinnerung an den 600jährigen Todestag Dantes gehalten im Auftrage des Ausschusses für eine deutsche Dantefeier am 3. Juli 1921 in der Staatsoper zu Berlin, Berlin, 1921.

⁵ Adolf von Harnack, Rede am Sarge Ernst Troeltschs, in: Berliner Tageblatt Nr. 61, 6. Februar 1923, Morgen-Ausgabe, 2f.; nun in: NB, 266–271, 270.

⁶ Adolf von Harnack, Konzept für die Rede am Sarge Ernst Troeltschs, Staatsbibliothek Berlin, Nachlass Adolf von Harnack, Kasten 12, Nr. 1379; nun in: NB, 231–241.

⁷ Ernst Troeltsch, Schiller, sein Werk und das deutsche Volk, in: Augsburger Abendzeitung Nr. 128, Dienstag, 9. Mai 1905, 1–3.

- ⁸ Ernst Troeltsch, Die Soziallehren der christlichen Kirchen und Gruppen [1912], hg. von Friedrich Wilhelm Graf in Zusammenarbeit mit Daphne Bielefeld, Eva Hanke, Johannes Heider, Fotios Komotoglou und Hannolore Loidl-Emberger (KGA9), Berlin/Boston 2021, 1748.
- ⁹ Theodor Heuss, Erinnerungen 1905–1933, Tübingen 1963, 372.
- ¹⁰ Die Beisetzung Ernst Troeltsch, in: Berliner Tageblatt und Handels-Zeitung Nr. 58, Sonnabend, 3. Februar, 1923, Abend-Ausgabe, 2.
- ¹¹ Ludwig Bernhard an Adolf von Harnack, 3. Februar 1923, Berlin, Staatsbibliothek, Nachlass Adolf von Harnack, Kasten 27, Bl. 33.
- ¹² Gangolf Hübinger, Ernst Troeltsch und die politische Kulturgeschichte Europas, in: Ders., Engagierte Beobachter der Moderne. Von Max Weber bis Ralf Dahrendorf, Göttingen 2016, 130–166, 148f.
- ¹³ Walther Köhler, Ernst Troeltsch, Tübingen 1941.
- ¹⁴ Eduard Spranger an Friedrich Meinecke, 26. Mai 1951, in: Friedrich Meinecke. Ausgewählter Briefwechsel, hg. und eingeleitet von Ludwig Dehio und Peter Classen (Friedrich Meinecke Werke Bd. VI), Stuttgart 1962, 627–631, 630.
- ¹⁵ James Luther Adams, Why the Troeltsch-revival?, in: Unitarian Universalist Christian 29 (1974), 4–15.
- ¹⁶ Karl-Ernst Apfelbacher, Frömmigkeit und Wissenschaft. Ernst Troeltsch und sein theologisches Programm (Beiträge zur ökumenischen Theologie Bd. 18), München/Paderborn/Wien 1978, 5.
- ¹⁷ Carl Neumann, Zum Tode von Ernst Troeltsch, in: Deutsche Vierteljahrsschrift für Literaturwissenschaft und Geistesgeschichte I (1923), 161–171; nun in: NB, 465–473, 473.

* 本翻訳は JSPS 科研費 18K12217 の助成を受けたものである。

〈付記〉

本論文は、二〇二〇年一月二日、オンラインで行われた、二〇二〇年度日本比較文学会北海道大会にて、「瀧口修造のデカルコマニー——〈傲然たる闖入者〉との対話」という題での口頭発表を基にしている。発表の際に、多数の有意義な質疑を賜ったことに感謝申し上げます。

- (17) 瀧口修造「魚炎 前田常作に」、前田常作展(東京画廊)に寄せた文章、一九六三年五月。引用、『コレクション・瀧口修造』
- (四) 『みずず書房、一九九三年(一四三頁)』
- (18) 瀧口修造「絶対への接吻」『詩神』、一九三二年一月。引用、『コレクション・瀧口修造(一一)』みずず書房、一九九一年(五九九～六〇〇頁)。
- (19) 赤瀬川原平は、一九六三年高松次郎・中西夏之とともに、ハイレッド・センターを結成、翌年にかけて匿名性の強いハプニングの活動を都内各地で実施するなど、一九六〇年代に前衛芸術家として活動している。六三年、個展「あいまいな海について」の案内状として原寸大の千円札を印刷し、現金封筒で送付、第一五回読売アンデパンダン展に千円札を拡大模写した作品及び梱包作品を出品したことが、いわゆる「千円札裁判」に繋がった。一九六六、六七年の公判には、特別弁護人として、瀧口修造が意見陳述と弁論を行い、法廷において芸術論を繰り広げている。
- (20) 秋山さと子・尾辻克彦「宇宙の罐詰」『異次元が漏れる 偶然論講義』朝日出版社、一九八三年(四一頁)。
- (21) バシュラール著、岩村行雄訳『空間の詩学』筑摩書房、二〇一八年(三五九～三六〇頁)。
- (22) この章でバシュラールは、「想像力によっていきられる内部と外部を、もはや単純な相反性の点から理解することはできない」(注21同書、三六二頁)と述べ、「存在のなかにとじこめられると、われわれはつねにそこからのがれでなければならぬだろう。存在からのがれでたかとおもうと、つねにまたそこにもどってゆかなければならぬだろう」(注21同書、三五九頁)として、「外部と内部」を想像的かつ弁証法的に捉えることを示している。また、「存在においては、すべてが循環であり、すべてが迂回であり、回帰であり、持続運動である。すべてが滞留の珠数であり、すべてがいつはてるともしれぬ歌のルフランである」(注21同書、三五九頁)と述べ、永久の循環的運動として在る存在について示唆している。
- (23) 注21同書(三七〇～三七二頁)。
- (24) 注23と同じ。
- (25) 武満徹「瀧口修造展に寄せて」『第5回オマージュ瀧口修造展 瀧口修造』佐谷画廊、一九八五年七月(一三頁)。
- (26) 吉増剛造「瀧口修造を読む」『コレクション・瀧口修造(別巻)』みずず書房、一九九八年(四三七頁)。

ない（しかし自分自身のうちにある）〈欲望〉を垣間見せることになる。そのとき、「わたしの外部で演じられる光景」（アンドレ・ブルトン著、笹本孝訳『狂気への愛』第四章、思潮社、新装版第一刷、一九九四年、六四頁）は、「わたしのためだけでもあるかのように突然に構成」（同前書）され、外部の対象の世界と、自身の内面との総合としての〈超現実〉が産出される。自身自身の未知の〈欲望〉が、外部の世界の〈対象〉に投影されて、その〈対象〉が再び内面との対応関係を取り結んだときに、気にかかっていた〈何か〉の意味が発見され、〈何か〉と関連している自分自身の〈欲望〉が再認識され、現実解釈が更新されるのである。このとき、〈対象〉が自分自身の周辺で起こった一つの出来事であるならば、その出来事の意味もそのときに与えられ、いくつかの出来事の連続であるならば、出来事群は配列・構成されて意味を与えられると考えられる。

(8) 瀧口修造「口上」『コレクション・瀧口修造（五）』みずず書房、一九九四年（三四～三五頁）。

(9) 巖谷國士「瀧口修造とデカルコマニー」『太陽』四月号（特集 瀧口修造のミクロコスモス）、平凡社、一九九三年四月（二五頁）。

(10) 瀧口修造「自筆年譜」『本の手帖』昭森社、一九六九年八月（一五七頁）。

(11) 瀧口修造「百の眼の物語」『コレクション・瀧口修造（四）』みずず書房、一九九三年（一二三頁）。

(12) 瀧口修造「表紙のことば」『グラフィケーション』、一九七二年二月。引用、『コレクション・瀧口修造（五）』みずず書房、一九九四年（四五頁）。

(13) 注2と同じ。

(14) 瀧口修造「影像人間の言葉」『美術手帖』増刊「現代のイメージ」、一九六二年四月。引用、『コレクション・瀧口修造（四）』みずず書房、一九九三年（一一五頁）。

(15) 「エーテル」に関して、次の文献を参照した。澤井繁男『鍊金術 宇宙論的生の哲学』講談社、一九九二年。アリストテレス著、泉治典訳「気象論」『アリストテレス全集（五） 気象論・宇宙論』岩波書店、一九六九年。

(16) 瀧口修造「詩と実在」『詩と詩論』第一〇冊、一九三一年一月。引用、『コレクション・瀧口修造（一一）』みずず書房、一九九一年（二二七頁）。

ルトンはレーニンの顔をした男が下半身をむきだしにして、巨大な尻を見せているダリの最新の作品『ウィリアム・テルの謎』に憤慨した。これはシュルレアリスムに対する意識的な挑戦であり、シュルレアリスムの作品としては絶対に認められないと激怒したのである。それに対してダリは、『すべてを完全に理解しようともせずに、ヒトラー主義を否定したり、ヒトラー主義と戦うことはできないだろう』と反論¹⁾(ジャン・ルイ・ガイユマン著、遠藤ゆかり訳、伊藤俊治監修『ダリ シュルレアリスムを超えて』創元社、二〇〇六年、八一―八二頁)したという。一九三四年一月二三日、「ブルトンはダリに最後通牒を送りつけた。シュルレアリストは革命に賛同する立場でなければならないのに、ダリは反人道的にもドイツの独裁者ヒトラーに傾倒しているばかりか、それをヒトラー現象の非合理性という言い訳で巧みにごまかしている」と非難したのである²⁾(同前書、八一頁)。

(5) ダリにおける二重影像に関しては、その瀧口修造に対する影響を拙稿「瀧口修造のシネ・ポエム『卵のエチュード』——サルバドール・ダリによる啓示とその超越——」³⁾(『北海学園大学人文論集』第六十号、二〇一六年三月)において論じている。

(6) サイモン・ウィルソン著、新関公子訳『アート・ライブラリー シュルレアリスムの絵画』西村書店、一九九七年一〇月(五二頁)。

(7) 客観的偶然体験とは、それぞれの人の人生において、自身の意識の支配を受けない偶然的な事物との遭遇が、自身の未知の〈欲望〉の領域を照らし出し、潜在的に宙吊りになっていた〈何か〉の意味が発見される体験である。

その〈何か〉とは、意識するしないに関わらず、気にかかっているものではあるが、自分自身ではなぜ気にかかっているのかを説明できず、従って〈何か〉自体にもともと意味は与えられていない。だが、〈何か〉が気にかかっているということは、自分自身では〈何か〉の重要性に気づいて——あるいは気づきかけて——いるのである。その意味で、〈何か〉とは、自身の内面および〈欲望〉の領域と深く関わっている。

その〈何か〉が、偶然に到来した事物を媒介として意味を与えられることがある。その場合、自分自身の内面に、〈何か〉の意味づけを強く求める理由があるのである。換言すれば、それぞれの人の外部にある人物・物・言葉・出来事などという、主観とは関わりなく存在する〈対象〉が、いわば触媒となって、〈何か〉の意味を自分自身に発見させ、自分自身のまだ気づいてい

えを押し続けることはできるのではないだろうか。吉増の文章は、このことを示唆しているように読める。

武満・吉増という、現代の優れた芸術家たちが共通して指摘しているように、瀧口の詩・創作は、厳然として存在する自身の内的世界の中心へ、最奥へと、常に目指し続ける行為の果てしない連続であったと言えるよう。

瀧口のデカルコマニーは、オートマティスムを重視しており、その点において、確かにドミンゲスのオートマティスムに刺激を受けたことは間違いない。しかし、瀧口の場合、単にドミンゲスのような二重影像の域には留まっていない。さらに、エルンスト的な、現実の出来事とのリンクや予兆を見て取ることもできない。

瀧口にとってデカルコマニーの影像は、瀧口を「私を超えるもの」（谷川）へ、「混濁する内面へ」（武満）、「實在へ」（吉増）と向かわせる、媒体であった。それは、「ユニークな無」「無の心髄」「無名の無知」という、未知の領域について、その存在を確信させるものでもあったと言える。デカルコマニーの影像に導かれ、瀧口は彼の言う「不可能のイメージ」すら垣間見たのかもしれない。瀧口はデカルコマニーの影像との対話において、言葉によって語ること・認識することによってしか現れてこない、無限小であり、かつ無限大に広がる内的宇宙の存在を確信したと言えるよう。

注

- (1) 瀧口修造「百の眼の物語」大岡信他監修『コレクション・瀧口修造（四）』みすず書房、一九九三年（二二二―二二三頁）。
- (2) 谷川晃一「眼の探索者」『コレクション・瀧口修造 別巻』みすず書房、一九九八年（五二八―五二九頁）。
- (3) マッシュー・ゲール著、巖谷國士・塚原史訳『岩波 世界の美術 ダダとシュルレアリスム』岩波書店、二〇〇〇年（二二三―二二四頁）。
- (4) 一九三三年、当時共産党に入党していたブルトンは、ダリの絵画『ウィリアム・テルの謎』に対して激怒したという。『ブ

瀧口修造の言葉は、物と物を結ぶ。瀧口さんの詩は、言葉の外殻（因襲）を毀して、夢や幻視の領域である、混濁する内面へ降り立つ苛酷なまでの試練を自らに課すことで得られた、純粹で豊饒な世界だ。随ってその世界は、文字の上のみで完結することは無かった。⁽²⁵⁾

「文字の上のみで完結する」ことのない「夢や幻視の領域」「混濁する内面」を求めて、「苛酷なまでの試練を自らに課す」ことに、武満は瀧口の芸術の特徴を見ている。

一方吉増は、一九七三年四月の『三田文学』において、瀧口の詩を次のように捉えた。

なぜ、実在するのか。

文学では判らぬ。——と書いてしまつて「しまった!」と思うが、すでに頭脳の亀裂を黒々と何かが飛んだのだから、瀧口修造氏の言葉を借りれば、影像がここに刻印されたのだから、とりかえしがつかぬ。

実在するもの。

自ら、虐殺するもの、そして、物質の貌、問いかける物質の触手、幻のよう、にたちあらわれる影像、その激化、定着、埋葬、そしてふたたびあらわれる、実在への、涯しない、涯しない、必死の接近。

これは、始原の風景なのだ。⁽²⁶⁾

吉増は瀧口の詩に「実在への、涯しない、涯しない、必死の接近」の様を認めている。「なぜ、実在するのか」、確かに、その理由は「文学」のみにおいてではわからないのかもしれない。しかし「文学」に喚起されて、「実在」を垣間見させる影像が「刻印された」のであれば、「なぜ、実在するのか」という問い掛けに対して、少なくともその答

ために、「不動」の「存在」の周りをぐるぐると回りながら、言葉・表現を提出し続けていくのではないだろうか。詩人は、幾度となく表現を繰り返しながら、「自己」の「中心」へ、「不動」の「中心」へと向かって、ためらい、彷徨い続けるのであろう。

以上、言葉と「私を超えるもの」（谷川による）との関係性に注目して、瀧口における、名づけることも知ること也不可能な全体性としての「ユニークな無」を、バシユラルを補助線にして考察を深めた。

ところで、「サイクロン」をイメージすると、高速で風を吸い込んでいるその中心は、台風の目であり、まさにぼつかりと空いた穴、空洞が思い描ける。興味深いことに、赤瀬川の言う「ドーナツの穴」や瀧口の言う「無の心髄」と影像の形の上での共通点を見出せる。人間が、その最奥を思い描く際の、共通した影像の一つなのかもしれないが、残念ながら、本稿ではそれについて考察することはできない。

いずれにしても、「私を超えるもの」には決して到達できず、しかし、あくまでも到達を目指して、詩人はその周りで彷徨するか、谷川の言うように、その「到来」を「敬虔な信徒のように」待ち続けなければならないのであろう。

おわりに

瀧口の影像に対する執着とその詩について、彼の側近くに在って深く理解し、芸術的に共鳴していた作曲家武満徹（一九三〇～一九九六）と、現代詩の代表的詩人吉増剛造（一九三九～）の言葉を見たい。

武満は、一九八五年、佐谷画廊における「第5回オマージュ瀧口修造展」のカタログに寄せた文章において、次のように述べている。

という詩人の詩を引きながら、決して到達することのできない「人間の存在」の「中心」に、いかにして接近していくかについて述べているのである。

この「人間の存在」について、バシュラールによって、より詳しく説明されている箇所がある。右記の引用箇所は『空間の詩学』第九章から引いているが、それには「外部と内部の弁証法⁽²²⁾」というタイトルがつけられており、同じ章で、バシュラールは、次のようにも述べているのである。

存在するまえにかたかなければならない、ということをおぼえてはならない。他者にむかつてではなくとも、すくなくとも自己にむかつてかたるのだ。そしてたえず前進する。この方向では、ことばの世界が存在のすべての現象、新しい現象を支配し、そして通曉しているのである。詩の言語から、新しい波が存在の表面をはしる。⁽²³⁾

ここで言われている「存在の表面」とは、「自己」と、ある種の「他者の領域」としての「人間の存在」との、「境界」のことであろう。⁽²⁴⁾ともあれ、この引用を踏まえて、バシュラールの初めの引用箇所に戻ると、「螺旋存在」の「中心」(引用されたタルデューの詩の言葉では「不動」のもの)は、語ることによって、すなわち、言葉によって認識されることにおいてのみ存在する(あるいは存在となる)ということではないだろうか。つまり、「不動」の存在は、語る存在(タルデューの詩では「ぼく」)によって語られ、認識されることによってしか存在できない(あるいは「不動」の存在となることができる)ということである。言葉によって定着できず、とはいえ、言葉によって認識されることによってのみ「存在」となるものは、まさに「無名の無知」(瀧口による)・「『文字や言語』の彼岸」(巖谷による)であると言えるか。

以上のように考えることができるのであれば、詩人は、彼の言葉によって「存在」となるものの「中心」に接近する

ことはないだろう。人間の存在は不安定な存在である。一切の表現がその存在の定着をさまたげる。想像力の国では、いったんある表現が提出されると、存在は別の表現を要求し、存在はある別の表現の存在とならなければならぬ。（略・引用者）ひとが存在の中心に近づくとき、その存在をみいだせるか、あるいは確固としたその存在をふたたびみいだせるか、自信がもてない。（略・引用者）自己の内部に「はいり」、螺旋の中心にむかつてすみながら、自己に近づいているのかどうか自信がもてない。すなわち多くのばあい、存在はその中心において彷徨なのである。⁽²¹⁾

バシュラルによると、「人間の存在」の「中心」に向かつて進もうとしても、「けっしてその中心に到達することはない」。なぜならば、「人間の存在」は「螺旋存在」であり、その中では「活力が渦まいている」からである。

詩人は「人間の存在」の「中心」に接近するために、その「存在」を表現する言葉を発する。しかし、「人間の存在」はどのような言葉によっても定着できない。「人間の存在」は「不安定」だからである。

それゆえ、たとえ「不安定」な「人間の存在」を、いったんは言葉によって表現したかに思えても、その「存在」はすぐに「別の表現」を要求してくる。したがって、詩人は「中心にむかっているのか、それとも逃走しているのか、もはやすぐにはわからない」のである。この「不安定」な「人間の存在」は、矛盾するようだが「不動」のものでもあるのだろう。

一方で、「内部にはもはや境界はない」。つまり「自己の内部」には、「自己」と「人間の存在」との「境界」はないのだという。それゆえ詩人は「自己」と「人間の存在」との一致を見ようとして、「人間の存在」の「中心」近くを、「人間の存在」とともに「彷徨」しつつ、ためらいながら言葉を発し続けるのであろう。

引用部分を、右のように読むとするならば、バシュラルはこの引用で、ジャン・タルデュー（二九〇三―一九九五）

にすぎない」という赤瀬川の見解も首肯できよう。

「自分の最深部」としての「無限小」の「自分の中心」は、「自分じゃない」世界なのだというこの赤瀬川の見方は、瀧口の「ユニークな無」「無の心髄」「無名の無知」を想起させるのではないだろうか。とはいえ、赤瀬川による「無限小」の「自分の中心」についての見解は、影像・言葉と「私を超えるもの」(谷川による)との関係に關する説明には不十分である。そこで、人間の最奥を螺旋に見立て、その「螺旋存在」と言葉との関係性について示した、バシユラールの見解を参照したい。

そして人間の存在はなんとという螺旋であることか！ この螺旋のなかではなんと活力が渦まいていることか！ 中心にむかっているのか、それとも逃走しているのか、もはやすぐにはわからない。詩人たちは存在にたいしてためらう存在をしっている。ジャン・タルデューはこうかいている。

すすむために ぼくはぐるぐると回転する

不動のすみついたサイクロン

ジャン・タルデュー『姿なき証人』 p. 36

別の詩でタルデューはこうかいている。(同前、p. 34)

しかし内部にはもはや境界はない！

このように外からみれば、しっかりとつつまれた中心のようにみえる螺旋存在も、けっしてその中心に到達する

（秋山の発言——引用者による、以下同じ） ええ、内部にも外側があるんです。絶対それでいいんだと思う。

（尾辻の発言） そういう感じですね。

（秋山の発言） それで中のがらんどろが無限大に大きいわけ。

（尾辻の発言） 無限小というか……。

（秋山の発言） 無限小に大きいわけよ。大きいっておかしいけど。

（略・引用者）

（尾辻の発言） 結局自分の最深部は自分じゃないといいますが、極端にいうと。自分というのは無限の外側から

無限の内側に至る過程にすぎないという。⁽²⁰⁾

ここでは、自身の見た夢について、「自分の中で見た自分の夢」であるにも関わらず、どうしても思い出せない場合があるという赤瀬川の経験が語られている。そのことについて赤瀬川の間覚では、「自分の中に自分の手の届かないところがあつて、自分の中心がポツカリあいたドーナツ状に思えてくる」ということである。そのドーナツの穴のような「自分の中心」は、「無限小」の世界であつて、その「無限小」の世界は「無限大」の世界でもあるらしい。つまり、その「無限小」の世界の小ささを極めることができないというのである。換言すれば、それは、見ることも知ることも、名づけることもできない世界なのだ。このような、「自分の手の届かない」、「無限小」の「自分の中心」、つまり「自分の最深部」は、「自分」とは「皮膚」のようなもので隔てられた、「自分じゃない」世界なのであろう。

一方で、「外側」の世界は、文字通りの「無限大」の世界である。まさしく宇宙全体の規模そのものの広さである。その自身の外の世界もまた、「自分じゃない」世界だと言えようか。そして「外側」の世界も、やはり文字通りの「皮膚」によって「自分」と隔てられている。以上のことを踏まえれば、「自分」というのは無限の外側から無限の内側に至る過程

瀧口における影像・言葉の発生以前の領域、すなわち「私を超えるもの」(谷川による)の領域は、以上のように「ユニークな無」「無の心髄」「無名の無知」として描かれていた。すなわち、瀧口にとって「ユニークな無」とは、言葉(詩)を生む源であり、「存在」に満ち溢れ、矛盾した状態をも包容していて、名づけることも知ることも不可能な、全体性だと捉えられる。

そのようなものの輪郭をより鮮明にするために、以下、瀧口と同様に物質への没入と詩的イメージを通して、客観世界と主観世界との関係性に迫った哲学・現象学者ガストン・バシユラル(一八八四―一九六二)、および、瀧口に影響を受けた前衛芸術家赤瀬川原平⁽¹⁹⁾(一九三七―二〇一四)の言葉を参考にしたい。先に、赤瀬川の言葉を見ていく。

赤瀬川原平は、小説家として尾辻克彦という筆名を持っており、次の引用は赤瀬川(尾辻)と、ユング派の心理分析家秋山さと子(一九二三―一九九二)との対談の一部である。

(尾辻の発言——引用者による、以下同じ) で、自分だけを取り出して考えた場合に、不思議なんですネ、たとえば子供が自分の中はどうなってるんだろうみたい、わかんないというけど、ぼくは大人になってからのことという、夢がおもしろいものだから、見た夢を一生懸命記憶で引っ張り出して記述するんです。ある雑誌に「今月の夢」というのを連載してたんですよ。普通だとおもしろいだけ書き留めるんだけど、連載として義務づけると、むしろ書けないときのほうが際立ってくるんですね。見たんだけど、どうしても思い出せないというような。これは自分の中で見た自分の夢であるはずなのに、その自分が思い出せない、ということから、ぼくの場合はやっぱり自分の中に自分の手の届かないところがあって、自分の中心がポッカリあいたドーナツ状に思えてくるんですね。自分というのが。外側はちゃんと自分の皮膚の外なんですけど、内側にも自分の皮膚みたいなものがあるって外側があるというか、がらんどろというやつで。

何を待つのか、存在たちはざわめく。

在るということ、それは「存在」のほかの何ものでもない、すなわち無の心髄¹⁷。

「無の心髄」とは、「無」の中心・心底のことであろう。そこは、「虹色」に美しく光り輝く暗黒の「真夜中」という、相反する状態が成り立つところで、ざわめく「存在たち」で溢れているようだ。そのような「存在たち」のざわめく場所とは、まさに「虚空」——事物の一切を包容し、全ての存在を妨げない状態の場——を思わせる。

さらに「ユニークな無」は、瀧口の代表作である詩「絶対への接吻」においても描かれている。次に引用する箇所は、この作品における登場人物である「僕」と「彼女」との逢瀬の後、「彼女」が去っていった後の場面で、この作品の最後の部分に当たる。この作品で「彼女」は、「絶対」を体現し、それをイメージさせる女性として描かれており、作品の最終部で、「僕」は「彼女」を留めることができなかったことが示唆されている。

彼女の判断は時間のやうな痕跡を僕の唇の上に残してゆく。何故それが恋であつたのか？ 青い襟の支那人が扉を叩いた時、単純に無名の無知が僕の指を引つ張つた。凡ては完了してゐた。凡ては氾濫してゐた。凡ては歌つてゐた。無上の歓喜は、未踏地の茶殻で夜光虫のやうに光つてゐた……(Sans date)¹⁸

「僕」は「彼女」を留めることができなかったが、その喪失感とは東の間のことで、すぐに「無名の無知」に気づかされた。「無名の無知」とは、名をつけることもできず、知ることもできないということであろうか。そこは「凡て」のものが「氾濫」しているところ、すなわち、ざわめく「存在たち」のいるところでもあろう。そこでは「凡て」が「完了」しているという。つまり「無名の無知」とは、充足し完結している全体性のことではないだろうか。

右のように読んでみると、瀧口の言う「不可能のイメージ」とは、影像の発生以前の場としての「絵画以前の領域」(瀧口による)、および「文字や言語」の彼岸「あのすばらしい『空所』(巖谷による)」、そして「私を超えるもの」(谷川による)と関係しているとみなせるだろう。では、「私を超えるもの」の領域とは、瀧口においてどのようにイメージされているのだろうか。次節において見ていきたい。

4 〈傲然たる闖入者〉との対話——〈私を超えるもの〉の領域・存在の深部へ

ここまでの考察によって、「私を超えるもの」(谷川による)の領域、あるいは「空所」(巖谷による)とは、言い換えれば、影像・言葉の発生以前の領域であるとみなされる。それは、影像や言葉の発生の源でもあるのではないか。そのような領域を、瀧口はどのようなイメージで捉えていたのだろうか。

詩はユニークな無、あるいはそれを必ずしも二元的な立場からでなくて、論理的に無詩ということのできるものから出発するのは真実である⁽¹⁶⁾。

瀧口において、詩(言葉)は、「ユニークな無」から出発・発生する。その「ユニークな無」とは、あるかないか、という「二元的な立場」、つまり一方が他方を規定するというような比較・対立の関係を、超越している状態であろう。その「ユニークな無」は、以下のようにイメージされている。

虹色にかがやく真夜中、

言葉をとおして、詩人はイメージを、しかも不可能のイメージをすらもとめる。
まるで無償の錬金術師のように⁽¹⁴⁾。

瀧口においては、「はじめに言葉があつた」わけではなく、初めに「イメージ」があつたということが看取できよう。瀧口においては、「言葉」は、「言葉」に先立つて存在する「イメージ」に意味（解釈・認識）を与え、「イメージ」は、「イメージ」に先立つて存在する「不可能のイメージ」に形を与えるのだと言えよう。瀧口においては影像が先に在り、影像の後に言葉が喚起される。そして、影像は「不可能のイメージ」をも映し出すということであろう。

では一体、ここで言われている「不可能のイメージ」とはどのようなものなのだろうか。「イメージ」することが不可能なのか、それとも、不可能なるものの「イメージ」なのか。

瀧口が「錬金術師」をたとえにしていることから、次のように言えるのではないか。

錬金術師が追い求めているのは、究極的にはブリマ・マテリアという物質であるとされる。ブリマ・マテリアは万物の起源であるとされ、アリストテレスの言うエーテルのようなものだと思なされている。エーテルは、四大元素よりも基本的な物質で、定義可能な特性を持たないものの、錬金術において、すべての物質を成り立たせている基本物質であるとされる⁽¹⁵⁾。その意味でエーテルとは、不定形なものであると言えるのかもしれない。

このように、エーテルは誰も定義できず、誰もその実物を目にしたことのないものである。それを踏まえると、「不可能のイメージ」とは、そのものの自体を「イメージ」することが不可能であり、とはいえ、未知のものであるがために、「イメージ」し、一時的に形を持たせることによってしか、心に現れてこないものでもあると言えるのではないだろうか。その意味において、「不可能のイメージ」とは、それ自体を「イメージ」することが不可能であり、かつ、定義不可能・不定形のものに仮初めの形を与えたという意味で、不可能なるものの「イメージ」でもあるとも言えよう。

谷川によると、言葉や意味、そして「イメージ」の「発生現場」は、「私を超えるもの」が「到来」する場でもある。それを踏まえると、瀧口の言う「絵画以前の領域」とは、影像・言葉・意味の発生以前に存在する、「私を超えるもの」の領域であるらしい。デカルコマニーの影像は、「私を超えるもの」と瀧口とを媒介するのであろう。

谷川の見解を踏まえれば、デカルコマニーの影像は、瀧口にとって、絵画（影像）そのものの起源（源泉）へ遡るための媒体であると言えよう。その意味で、プリミティブなものへの指向を孕み、ある意味で太古の風景へ、太初・始原へと遡るための方法なのでもあろう。

確かに、物理的・化学的かつ偶然に紙に定着された影像に対して、瀧口は二次的に手を加えている。初めに定着した影像に触発されて、創作が行われたということである。してみれば、瀧口自身もまた、デカルコマニーの影像と「私を超えるもの」とを結び、「一個の介在者」であるのだ。

それでは、デカルコマニーに限らず、影像とは、瀧口にとってどのようなものだったのだろうか。次節において検討したい。

3 瀧口における影像

瀧口修造は、影像に対して、どのような考えを持っていたのか。それについて最も端的に自身の考えを披歴しているのは、一九六二年四月『美術手帖 増刊「現代のイメージ」』に掲載されたエッセイ、「影像人間の言葉」である。

はじめに言葉があった、とは果たしてほんとうだろうか。神様の言葉を権威づけるための伝説ではなかったのか。言葉をとおして、詩人は何をもとめる。

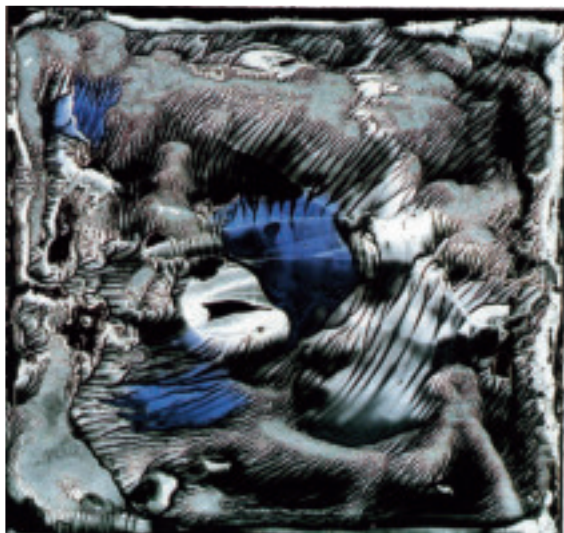


写真資料⑤ 瀧口修造作「デカルコマニー」
(1971年)。
『太陽』4月号〈特集 瀧口修造
のミクロコスモス〉、平凡社、
1993年4月（15頁）。

口の言う「絵画以前の領域」とは、「虚空」の性質を持ち、影像と言葉の発生する場所に関わるものであり（それについては後述する）、巖谷の言う『文字や言語』の彼岸「あのすばらしい『空所』」にも関わっているのではないだろうか。さて、本稿「はじめに」でも触れたように、一九七〇年代の瀧口のデカルコマニー作品について、画家谷川晃一は次のように述べている。

ここには不遜な創作者のドグマは少しもない。あるのは透明な媒介者の深い眼であり、愛に充ちた「もの」遣い
のモラルがあるだけである。デカルコマニーの世界は氏（瀧口——引用者による）の言うように、ただの物理現象に
すぎない。しかしそこには、手では
けっして描くことが出来ない別種の
イメージが定着されている。（略・
引用者）デカルコマニーほど氏の絵
画表現に似つかわしいものはない。
（略・引用者）

眼の探索者は常に事象の発生現場
へと降りてゆく。（略・引用者）言葉
の発生、意味の生成、イメージの火
花を注意ぶかく見つめ、私を超え
るもの¹⁹の到来を、氏は敬虔な信徒
のように待つのである。



写真資料④ 瀧口修造作「デカルコマニー」(1971年)。
『第5回オマージュ瀧口修造展 瀧口修造』佐谷画廊、1985年7月(78頁)。

(二四)

超越的に存在しているものが認識されていると言えようか。瀧口のデカルコマニー作品には、さらに他の特徴が認められる。写真資料④・⑤は、いずれも一九七一年に創作されたものである。

写真資料④のデカルコマニー作品は、一九七二年二月の『GRAPHICATION』という刊行物の表紙にされており、以下の引用は、その表紙に付された言葉である。

私にはこれがイメージなのかどうかも定かではない。古い古い岩崖が突如、暗い虚空に出現したかのように……などといってみてもあとの祭りだ。(略・引用者)絵画以前の領域に何かを覗こうとしているのか、おそらくそれもひとつの言い方にすぎないであろう。⁽¹²⁾

写真資料④・⑤のデカルコマニー作品は、まさに太古の風景を感じさせるものであると言えようか。それらが「虚空」に突如出現したというのは、どういうことなのだろうか。「虚空」とは、事物の一切を包み、抱え込み、全ての存在の邪魔をせず、妨げないという特性を持つ場である。瀧



写真資料③ 瀧口修造作「デカルコマニー、コラージュ」(1962年)。
『太陽』4月号(特集 瀧口修造のミクロコスモス)、平凡社、1993年4月(10頁)。

前述したとおり、一九六〇年から瀧口は線描に執着していたが、そのオートマティックな線描の試みに対して、自身の内から現れた「自分の線」だとみなすことができたようになった頃、瀧口にデカルコマニーの影像が「闖入」してきたのである。

「私生児のように、おとなしく傲然として、私を見つめている」「闖入者」という表現に、瀧口とデカルコマニーの影像との関係性が、ほとんど全て示唆されている。すなわち、その影像は、瀧口の意志とは無関係に、突然瀧口の前に現れた。彼の意識に強引に押し入ってきたと言っても良いかもしれない。高慢な、傲り高ぶった様で、次元の異なるところから瀧口を見下している。それは、瀧口が認知していなかった子供であるらしい。しかし一方で、その影像は、瀧口に由来しているものでもある。それは、生みの父である瀧口から言葉を掛けられるまで、おとなしく瀧口を見つめているのであろうか。

瀧口自身に繋がりがあって、しかし、彼の認知していないところから、目の前に否応なく出現するデカルコマニーの影像は、超越的に、厳然として存在するものである。それは、己の存在自体を瀧口に見せつけ、瀧口の言葉によって認識されるのを待っている。瀧口の場合、影像が言葉を誘発し、そのことによって、

瀧口はヨーロッパへの長い旅行（一九五八年）を終え、この旅の回想を書いた後、ジャーナリストイックな批評、そして生活のための批評というものに対して、自己矛盾を感じるようになっていく。他方、このヨーロッパ旅行での、アンリ・ミショー（一八九九―一九八四）やアンドレ・ブルトン（一八九六―一九六六）等との面会が刺激となったのか、帰国後に瀧口自身の創作活動を再開し、自身の中に在る影像と対話して、それを捉え、作品において繋ぎ止めることに意欲が向いていったのである。

そしてついに一九六〇年、瀧口は「年のはじめにふと買ったスケッチブックに万年筆で文字でない線描を走らせる」⁽¹⁰⁾ようになった。ついに瀧口の芸術的なエネルギーが、ここで爆発的に溢れ出たのだった。

一九六〇年に開始された瀧口の創作活動は、線描への執着から始まった。線描の試みにおいて、瀧口はオートマティスムと向き合うことになる。本稿では詳しく取り上げることができないが、瀧口は、線描の試みによって、文字を書くことと、絵を描くことの連続性のなかに身を置いた。そして線描への没入時期を経て、次に瀧口はデカルコマニーに没頭していったのである。写真資料③は、一九六二年に発表された、瀧口のデカルコマニー作品の戦後最初期のものである。

一九六三年二月『美術手帖』に掲載されたエッセイ「百の眼の物語」において、瀧口はそのころ作られたデカルコマニー作品について、次のように述べている。次の引用は、写真資料③のデカルコマニー作品に触発された文章だと言えるのではないだろうか。

私が最近やっと自分の線を動かし走らせようとしている矢先に、この闖入者（デカルコマニーによる影像——引用者による）はまるで私生児のように、おとなしく傲然として、私を見つめていたではないか。⁽¹¹⁾

だが瀧口修造は、同時に「文字や言語」の彼岸^⑧にいるのである。いや、もちろんそういっただけでは、最終行（さて、では私はどこにいるのでしょうか？）——引用者による）の問いに対する答えにはならないだろう。むしろ、彼は作品のなかにはいない——しかも、いる。——オートマティスムの出所でもあろうあのすばらしい「空所」にこそいる、と考えるべきだろう。^⑨

巖谷に倣えば、瀧口は、「『文字や言語』の彼岸」「あのすばらしい『空所』」に在って、その場所とデカルコマニーの影像とを結びつけているのであろうか。それでは、「『文字や言語』の彼岸」「あのすばらしい『空所』」とは、一体何を意味するのだろうか。考察を深めていきたい。

本稿「はじめに」でも示したように、瀧口が最初にデカルコマニー作品を創作したのは一九三六、七年頃だったが、本格的に没頭したのはそれから一五年ほど後の一九六二年のことであった。瀧口が戦後、デカルコマニーに没頭するまでの経緯について、以下、簡潔に示しておく。

終戦後、瀧口は芸術活動を一時休止させていた。同時代のほとんどの日本人と同じように、苦しく厳しい時代が終わったことによる解放感や新しい時代に対する期待ゆえの高揚感、それと同時に終戦がもたらした虚脱感や一変した世界に対する戸惑いなどの、複雑な心境を抱いていたことは想像に難くない。しかし、瀧口のなかに芸術的なエネルギーが蓄積し、彼の求める影像に向かって溢れ出し、自らの創作を再開するまでには、相当の時間がかかったのである。

瀧口は戦後、実験工房——若い芸術家たちが芸術的な共同作業を行う場としての——の指導的役割を果たし、無名の若い芸術家のために、タケミヤ画廊での個展を賃料無料で行わせることができるようにプロデュースもしている。さらに、頓挫した美術映画『北斎』のシナリオと制作に関わったとはいえ、これらの活動以外は、終戦後の一九四〇年代後半から一九五〇年代において、瀧口自身が旺盛な創作活動を始めるには至らなかった。

いて考察したい。

(110)

2 瀧口修造のデカルコマニー

瀧口修造は一九七一年十一月、新宿のバー、セバスチャンでの自作展に際して寄せた文章「口上」において、自身のデカルコマニー作品について次のように述べている。

たまたまこれらの作品はすべて物理的現象に乗じて、それにすこしばかり手を藉したにすぎないものばかりです。見る人がそこにどのような幻や像を眺めようと、すべては物理や化学のなせるわざであり、私は一個の介在者であるにすぎません。ゆめゆめ「幻想的」なぞという「芸術」に結びつけないでいただきたいものです。さて、では私はどこにいますのでしょうか？⁽⁸⁾

ここで瀧口は、自身のデカルコマニーによる影像について、「幻想的」な作品を作ろうと試みるような、作者の創作意図が重視された「芸術」作品では決していないことを強調している。瀧口は単に物理・化学的に、影像を定着させただけなのであるという。とはいえ、影像を定着させて、それに触発され、何らかの手を加えた（「手を藉した」）ことは確かである。このように、いわば二次的な創作を施すとはいえ、自身を「一個の介在者」であるとみなすのであれば、瀧口は一体、何と何との媒介をするのであろうか。それについては後述したい。

この瀧口の文章「口上」に対して、フランス文学者巖谷國士（一九四三〜）は、エルンストのデカルコマニーと瀧口のそれとの共通点を示唆する一方で、次のように述べている。



写真資料② マックス・エルンスト 「雨後のヨーロッパ II」(1940年～1942年)。
サイモン・ウィルソン著、新関公子訳『アート・ライブラリー シュルレアリスムの絵画』西村書店、1997年10月(53頁)。

一方、中央には二人の人物が描かれているように見える。彼らのうち、右側の人物は、古代の兵士を思わせるような男性であるが、よく見ると、頭部は鳥の顔になっている。一九二〇年代から三〇年代におけるコラーージュ作品『百頭女』(一九二九年)や『慈善週間 または七大元素』(一九三四年)等で、エルンストがしばしば怪鳥ロブロプや鳥人間を登場させていることを想起させる。また、左側の人物は、どうやら後ろ向きに女性のようで、ドレスを着ているように見えるが、その臀部は岩のようである。作品の全体的な印象としては、無機物と生命という相反するものが、一つの画面で強調されているとみなせよう。

この作品は一九四〇年頃から描かれ始め、完成したのが一九四二年であるので、実際には一九四五年の終戦までに、ヨーロッパがどのように「破壊されつくした」か、エルンストは、作品完成の時点ですでに見えていないが、ある種の予感・予兆に突き動かされて創作したのではないかとみなすこともできるであろう。芸術家の内部で、作品と現実とがリンクし、予兆的な影像を創造するに至ったのではないだろうか。そこにおいて、シュルレアリスムの、いわゆる客観的偶然体験^⑦を想起することもできよう。

以上述べたように、ドミンゲスのデカルコマニー作品においては二重影像が、エルンストのデカルコマニー作品においては「幻想的な」悲劇の予兆が見て取れる。では、これらのシュルレアリスムの芸術家のデカルコマニー作品に対して、瀧口修造のそれは、どのような特徴が認められるのだろうか。次節にお

イオンでもあるという、二重^{ダブル・イメージ}影像が描かれていると捉えられ、その意味で依然としてダリの影響が窺えることも確かである⁽⁵⁾。

ドミンゲスの試みたデカルコマニーの手法は、他のシュールレアリスムの画家たちを触発した。その中で、マックス・エルンストもまた、デカルコマニーの手法を用いて、代表作「雨後のヨーロッパⅡ」を残している。エルンストのデカルコマニーについて、美術研究者サイモン・ウィルソンが、次のように解説している。

第二次世界大戦が勃発した後、エルンストは敵国籍の外国人として2度にわたって拘留された。1940年の初夏に結局のところ釈放された彼は、アヴィニョンの近郊のサン・マルタン・ダルディッシュの自宅でこの《雨上りのヨーロッパ》を描き始めた。1941年に、彼はゲシュタポ（訳注…ナチスドイツの国家秘密警察）から逃れてアメリカに渡り、この絵をニューヨークで完成した。これは、エルンストが基本的にもっているペシミズムのうえにさらに、自身の戦争体験を明らかに反映させた一連の絵の一つである。エルンストがここに示すのは、破壊されたつくした世界についての幻想的なヴィジョンで、そこでは押しつぶされた軍馬のかたわらに孤独な戦士が廃墟のただなかで孤立している。タイトルの「雨」はおそらく、戦争の後半の局面でヨーロッパを荒廃させた、爆弾の雨を想起させる意図をもっている⁽⁶⁾。

エルンストは一九二二年以来フランス在住であったが、第二次世界大戦が始まってから、敵国ドイツ人であるという理由で、収容所で暮らしていた。その当時、絵画の資材が不足しているせいもあって、比較的入手しやすい資材を用いて創作できるデカルコマニーに没頭したのである。収容所を出た後もデカルコマニーに対する傾斜が続き、「雨後のヨーロッパⅡ」（写真資料②）が創作されたのだった。この作品を見ると、画面全体が鉱物質・無機質の世界を思わせる。



写真資料① オスカー（オスカル）・ドミンゲス 「あらかじめ対象を想定しない
デカルコマニー」（1936年）。
マシュー・ゲール著、巖谷國士・塚原史記『岩波 世界の美術 ダ
ダとシュルレアリスム』岩波書店、2000年（332頁）。

というものだ。フロッタージュと同様、得られた結果はのとき芸術家自身から引きだされるイメージ表現の「誘発」としてはたらいだ^③。

ドミンゲスは初め、同じスペイン出身の画家であるサルバドル・ダリ（一九〇四～一九八九）に影響され、「入念なだまし絵技法で描く夢のイメージ表現」を特徴とした作品を創作していたが、ダリの創作的行き詰まりによる「名声の衰え」、およびダリの抱いていた「政治的興味」^④に対して共感できなくなり、「オートマティスムへの関心のほうに目をむけるように」なっていた。そのオートマティスムの手法としてドミンゲスが採ったものがデカルコマニーであった。ドミンゲスの作品は、デカルコマニーの手法によって最初に現れた影像に「誘発」されて、^{オートマティック}自動的に画家の内から新しい影像が引き出され、それを創造・創作として定着したものである。写真資料①は自転車のように見える左半分の影像と、ライオンのような動物にも見える右半分の影像が描かれ、自転車でもあり、かつ、ラ

本稿では、オスカル・ドミンゲス(一九〇六―一九五七)および、マックス・エルンスト(一八九一―一九七六)のデカルコマニー作品を参照しつつ、瀧口のデカルコマニーの特徴について明らかにする一方、谷川の言う「私を超えるもの」とは、瀧口において、どのような言葉・影像で捉えられていたかということに着目する。その上で、一種のオートマティスムの方法であるデカルコマニーによって定着した影像と瀧口との対話は、どのような対話だったのか、何についての対話であったのか、また、デカルコマニーの影像は瀧口と何とを媒介するものだったのかということについて考えてみたい。この考察は、瀧口の詩・詩論の解釈の問題とも結びついている。

1 シュールレアリスムにおけるデカルコマニー

デカルコマニーの手法は、シュールレアリスムの芸術運動において、一九三六年にスペインの画家オスカル・ドミンゲスが発案した、いわゆるオートマティスムの一方法である。そのことに関する美術研究者マシュー・ゲールの見解を、以下に引用する。

はじめのうちはドミンゲスもダリの幻想的ヴィジョンに魅了され、その作品は入念なだまし絵技法で描く夢のイメージ表現を特徴としていた。けれどもダリの名声の衰えとヒトラーへの怪しげな政治的興味とがドミンゲスに作用し、こんどは(略・引用者)オートマティスムへの関心のほうに目をむけるようになる。(略・引用者)ドミンゲスのもっとも重要な寄与のひとつは、「デカルコマニー」と名づけられた技法の展開であり、これについてはブルトンが一九三六年の『カイエ・ダール』誌で発表をおこなっている。この方法は二枚の紙のあいだに絵具を厚く塗ってから挟んでおさえ、それをあとではがしてみると、思いもかけない(だが普通左右対称の)模様があらわになる、

瀧口修造のデカルコマニー

——〈傲然たる闖入者〉との対話——

秋 元 裕 子

はじめに

詩人・美術批評家瀧口修造（一九〇三—一九七九）は、一九六二年十二月、東京・南画廊で開かれた自身の個展に寄せた文章で、次のように述べた。「いわゆるデカルコマニーの手法は一九三六年か七年頃、シュルレアリストのオスカー・ドミンゲスが始めたもので、当時、私たちもこころみ^{ママ}た。（略・引用者）そして十五年目に、こんどは突然やつてきた。向こうからである」^{（一）}。

デカルコマニー（décalcomanie、転写画）は、浸透性の低い材質の紙に、流動性のあまりないグアッシュと呼ばれる絵の具を広げ、別の紙をその上に重ねて、めくったときに偶然できた影像を定着させる手法である。

画家谷川晃一（一九三八—）は、瀧口のデカルコマニーに対して、「デカルコマニーの世界は氏（瀧口——引用者による）の言うように、ただの物理現象にすぎない。しかしそこには、手ではけつして描くことが出来ない別種のイメージが定着されている。（略・引用者）デカルコマニーほど氏の絵画表現に似つかわしいものはない」と評し、瀧口のデカルコマニー作品における、瀧口と「私を超えるもの」——いわゆる超越的なもの——との関係性を示唆している^{（二）}。

八一頁）。

(3) 小稿は、伊藤聡編『麗氣記』（真福寺藏善本叢刊神道篇第二、法藏館、二〇一九）における拙稿「解題『宝釵図注』『法釵図聞書』を増補・改訂したうえで論文化したものである。そのため旧稿と一部重複する箇所がある。小稿では『法釵図聞書』を主に取り上げ、『宝釵図注』については別稿で論じる。

(4) 『弘法大師年譜』によれば「名霊集、遊方記所_レ出銘文未_レ知_二典拠_一。恐_レ從_二此等図銘_一私作_二為_二之_一附会者乎」（弘法大師伝全集五、一四五頁上）と、後世に創られた銘文があったとされ、実際に『野山名霊集』卷一「銘文云、釈迦如来転法地迦葉仏成道處中」（宝暦五年刊本）、『大師遊方記』卷三「銘曰、仏鎮之持法威是釈迦轉法輪地標也」（善通寺本）などに見える。

(5) 『法釵図聞書』は一例「宝剣」とある以外は「法釵」と表記される。『法釵図聞書』の題下にある「法宝通音」との注から、法・宝の両義を音で通じさせていることがわかるが、おおむね「法」と書き分けていることは、密教色が色濃い本書の性格にも通じよう。

(6) 『高野山巡礼記』では、五尺宝剣とともに理趣経が出土したこと、さらには宝剣が釈迦菩薩の本尊であること、経

も釈迦菩薩所持の経であることが語られる。「所堀出五尺宝剣并金剛經軸事經（般若理趣經也）。不朽經軸於文字紙表示已失々々。件劍軸所堀出不知多。（中略）宝剣釈迦菩薩之本尊。経同菩薩持經也」（『続群書類従』第二八輯上、二九九頁上）参照。

(7) 政祝『弘法大師伝抄』「御伝云、又地下堀_二宝剣長五尺広一寸八分_一出。則知、前仏遊処伽藍旧基也_云。大師釈云、此峯者古仏旧基。召_二集两部諸尊_一所_二安置_一也_云。大師高野住給上古四万劫_云。彼山大三災不_レ壞_云」（弘法大師伝全集第五、二六〇頁）参照。

(8) 同様の記述が『高野山巡礼記』に見られる。注6参照。

*本研究はJSPS科研費21K000093の助成を受けたものです。

(弘法大師伝全集五、一四五頁上)

このように法釵をめぐっては、仏教の聖地たる高野山が形づくられていく中で様々な伝説が付与されていった。法釵図も高野山をめぐる伝説形成のヴァリエーションのひとつとして機能していたと考えられるのである。

五、おわりに

日本中世において、天皇の権威の象徴である三種の神器(剣・内侍所・神璽)は、本地垂迹説を背景とした密教的な解釈のもとに図像化された。いわゆる「三種神宝図」である。真福寺に蔵される『法釵図聞書』は、三種神宝図のうち主に「剣」について解説したものだが三種神宝図が依拠する『麗気記』やその類書からの引用は全く認められない。主に密教典籍や弘法大師伝にもとづく解釈がなされるなど、「法釵」をめぐって、『麗気記』とは異なる神話が形成されていた。

『法釵図聞書』によれば、仏が成道する際には、必ず法

(一一)

剣を感得して悟りを得るという。また高野山の根本大塔を建立する際にも法釵が出現し、それを弘法大師が模写したのが「法釵」とされる。これは、弘法大師伝における根本大塔からの法釵出土というモチーフを、神体図のひとつ「法釵」と結び付けた、新たな密教神話の構築と考えられる。『法釵図聞書』からは、「法釵」が、単なる神道図像に留まらず、密教の神話世界の中にまで大きな広がりをもっていたことを窺い知ることができるのである。

【注】

- (1) 三種神宝図の先行研究には、拙著『中世学僧と神道——了譽聖岡の学問と思想』(勉誠出版、二〇一二)、ルチア・ドルチェ「大英博物館の三種の神器図——神仏習合美術と十九世紀イギリスにおける日本的シンクレティズム理解——」(ルチア・ドルチェ・三橋正編『神仏習合』再考、勉誠出版、二〇一三)、伊藤聡「本尊図」(阿部泰郎編『仁和寺資料【神道篇】神道灌頂印信』(名古屋大学比較人文学研究年報 二、名古屋大学文学部比較人文学研究室、二〇〇〇) などがある。

- (2) 『麗気記』『現図麗気記』(神道大系『真言神道(上)』、

「七仏相承宝劍秘法」の末尾で「宝劍図」の存在が語られるとともに、

一、七仏相承宝劍秘法事（東流^云）示云、不動劍印是也。（中略）又名「降魔印」。是尺尊成道時拳一指降魔云此印也。サレハ東寺ニハ尺尊両度成道云也。（中略）宝劍図有別。可更尋也。口伝^云又云、高野大塔納之法此事也。甚深（大正七六・七九二頁中）

と、過去七仏から相承された秘法が「不動劍印」「降魔印」であるとされた後に「高野大塔納之法」なる甚深の秘法とされるなど、高野大塔の基に埋められていた宝劍と過去七仏との関係に注目していることがわかる。

法釵図の銘によれば、法釵の相承は「予」（『弘法大師』に至るまで十五代とされるが、過去七仏だけでは数が足りない。これについて、時代はくだるが『弘法大師年譜』（十九世紀）では銘文を引用したあとで、

七仏者常七仏及大日・金薩・龍猛・龍智・金剛智・不空・惠果也。二十七十四二加^二大師^一故十五代也。此一一銘詞大師令^レ記給^云。此伝與^二上諸説^一頗異轍。更思焉（弘法大師伝全集五、一四五頁上）

と、十五代とは、過去七仏と真言七祖（大日如來・金剛薩埵・龍猛・龍智・金剛智・不空・惠果）に、弘法大師を合わせた数との解釈が示されている。

このほか『弘法大師年譜』では、「古記云」として、法釵は「北院」（仁和寺）の旧蔵であったこと、法釵には「梵篋」があり、『理趣經』が収められていたこと、また元瑜僧正の言として弘法大師が土佐で虚空蔵求聞持法を修めた時に、海中から法釵が出現し、その後高野大塔の下に奉納させたことなどが述べられる。

○古記云、此日記御筆有^二北院御旧蔵^一。法釵本有梵篋。般若理趣經^{（8）}入^云。元瑜僧正曰、宝釵口伝余流無^レ之。大師於^二土州^一修^二聞持法^一給時、自^二大海^一出現。御感得之後高野鎮壇大塔下令^二奉納^一給云。

ここでいう「前仏」は釈迦仏のことを指すと考えられる。⁽⁶⁾

また『弘法大師行状図画』でも法釵出土につづけて「前仏の遊所伽藍の旧基と云事分明也」とあり、『高野物語』には第五「前仏ノ遊處伽藍ノ旧基ト云事イチジルシ」と見え、法釵の出現をもって高野大塔が前仏の遺跡であることの証明としている。さらに政祝『弘法大師伝抄』「高野古仏浄土事」(応永年中)では、法釵との結びつきが明確に語られ、地下から法釵が掘り出されたこと、前仏の遊所伽藍旧記であるとしたうえで、弘法大師が上古四万劫にわたって高野山に住することや、大の三災にも破壊されないことが述べられる。⁽⁷⁾

『南山秘記』(十三世紀)では高野山の聖地と釈迦仏との関係が教理的に説明される。

又釈尊云、大日本国者大日ノ本国。胎藏界為ニ日本国。所以ニ大日経ハ者高野山ノ事ヲ説ト云フ秘記。月氏国ハ者釈尊靈鷲也。金剛界会為ニ鷲峯山。一是レ深秘也。又云ク、高野山八葉ノ峯者三界ノ衆生ニ灑給。殊於ニ彼山所住行者一其益何計哉ト有ニ被レ

(10)

仰事。去ルハ我昔釈迦菩薩ト名ケシ時、行所ノ壇上ニ有ニ三十六丈之重閣講堂。大塔ノ跡是也。持仏堂ノ跡ハ往昔ノ宝藏、金堂ハ日々談議ノ砌、諸仏說法ノ所。一度參詣ノ者ハ悉滅ニ無量罪。不レ可有レ生レ疑。故ニ高野山ハ法身常住ノ所、瑜伽瑜祇ノ山ナリ。金剛峯桜閣ハ金剛峯寺也。此所ハ靈鷲山報応ニ身ノ所、法花経ノ山ナルカ故也。(弘法大師伝全集第三、一二頁上下)

ここでは釈尊の説として、大日本国を「大日ノ本国」とし、金胎両部のうちの胎藏界を日本国とし、『大日経』を高野山のことを説く秘記とする。さらにインド(月氏国)を金剛界に位置付けることでインドと日本を同等にし、師大日の本国たる日本、ひいてはその中心地である高野山の価値を大幅に高めている。また釈迦仏がまだ菩薩だった時に修行を行った場所を高野大塔の跡とするなど、釈迦仏の聖地を日本に比定する操作が行われていることがわかる。

また法釵と過去七仏との関係については『溪風拾葉集』

起』には次のようにある。

以三元慶七年一真然僧正奏三陽成院一云、金剛峯寺者非二凡徒経廻境界一。諸仏古跡・禪聖旧基也。（中略）貞觀僧正山図記云、（中略）周迦連峯表二報仏華台一正平幽原類三化仏浄土一。惡人趣レ斯如レ入二愚谷一毒獸改レ情似二金山鳥一。纔指レ影者可レ悦二往因一。默而止者可レ恨二前業一云。東山信禪師云、日域仏土者定是南山也。若所レ思者可レ躋二彼地一。近者大師懸心志深彼終入定。遠者古仏聖跡。（弘法大師伝全集第一、五五頁下～五六頁上）

真然僧正が陽成院に奏状した言葉として、金剛峯寺が「諸仏ノ古跡・禪聖ノ旧基」であること、また貞觀僧正の言葉として高野山の峰々や幽原がそれぞれ「報仏華台」「化仏浄土」といった仏国土であること、さらに東山信禪師の言葉として、日本の「仏土」は高野山（「南山」）にほかならないことが述べられる。現実存在する高野山を仏教の聖地（仏国土）とする志向がかなり早い時期から

存在していたことがわかる。

ただし『修行縁起』では、法釵出土の記事と、前仏の伽藍旧記であるという記事は別々の箇所であり、ひとつの文脈では述べられていない。両記事がひとつの文脈の中で組み合わされた早い例としては『弘法大師御伝』（十二世紀頃成立）が挙げられる。ここでは『金剛峯寺修行縁起』の記述を下敷きにしなが、法釵（宝釵）出土の記事と、諸仏旧基の記事を組み合わせている。

高野山地給二官符一之後、為レ結二構仁祠一截二弘樹木之時、於二唐土一所レ投三鉗懸二樹間一。弥増二歡喜一則知レ為二機縁相応之勝境一、又感二地主山王所レ告之不レ空。誠是至二于三会之曉一弥不レ可レ減二密藏之地一耳。墜二夷地形一土中掘二出一宝劔一。長五尺広一寸八分。又覺二前仏遊処伽藍旧基一也。依レ勅備二觀覽一。然間不慮成レ崇。卜筮所レ奏当二此劔一。仍入二銅筒一返安二置之。是乃外護大明神惜レ之而已。（弘法大師伝全集一、一二四頁）

仍為訴此事^一參入スル由^ヲ申ス。其時夢覺^テ重^テ被^レ之立
勅使^ヲ「被^レ止^ニ此事^一畢。」(大正七六、七九二頁上)

とある師の物語によれば、そう遠くない昔に高野山の大塔を修造することがあった。その時にこの塔婆の地を整地すると地底に埋まっていた石の唐櫃の中から鉄の箱が発見され、鉄筐からは五尺の蛇が纏わされた五尺の劔が出てきた。それを天皇にお伝えしたところ、この劔をお取り寄せになった。するとその夜の天皇の夢に、密迹金剛力士達が南殿の庭上いっばいに現れた。天皇がその理由を尋ねると、密迹たちが申し上げたことには、我らは高野山の塔を守護するものである。弘法大師との誓約によって擁護するのである。もし(法劔が)散在すれば仏教は次第に衰えるだろう。このことを訴えるために参った旨を申し上げた。その時天皇は夢から覚め、再び勅使を立てて、劔を取り寄せるのを止めさせたという。「高野大塔建立事」は久寿二年(一一五五)記と推測されることから、平安末期から鎌倉初期頃には同様の言説が広まっていたものと考えられる。本説話が『修行縁起』

(八)

の話形、すなわち空海が法劔を感得した後に天皇が法劔を召したところ、高野外護の神の祟りがあったため返却したこと、を引き継いでいることは明らかである。だが空海が感得したのではなく、後世の高野大塔修造の際に再発見されたという体裁で描かれていることは興味深い。過去七仏以来受け継がれ、高野大塔の建立の際に発見された法劔は、さらに後世の修造において再び見出されることで、『修行縁起』における法劔説話が真実であり、現在にまで繋がっている事象であることを示す。法劔図は、図という形でこれらの伝説を保証する役割を担っていたと考えられるのである。

四、聖地化される高野山

法劔を巡る言説においては、過去七仏以来受け継がれる法劔の出土を根拠として、高野山を前仏が遊戯した伽藍旧基とすることが述べられていた。このように高野山をより仏教の根源に近しい聖地へ近づけようとする志向は、既に『金剛峯寺修行縁起』から認められる。『修行縁

尺、ひろさ一寸八分の宝剣、地中よりほりいだされき。前仏の遊所伽藍の旧基と云事分明也。（弘法大師伝全集九、九〇頁上下）

と、『修行縁起』の記述に「大塔」が結び付けられていることがわかる。

また『高野物語』第五（応永年間）では、

又大塔ヲ立テ給ハントテ地ヲ引キ平ゲラレシカバ、長サ五尺、広サ一寸八分ノ寶釵地ノ中ヨリ掘出ダセリ。前仏ノ遊處伽藍ノ旧基ト云事イチジルシ。（弘法大師伝全集九、二〇八頁下～二〇九頁上）

と、ほぼ同文を見ることができ。さらに『三国伝記』（十五世紀前成立）所引の弘法大師伝では、南天鉄塔を模して一基の塔婆を建立するため地面を整えた際に「長五尺、広一寸八分ノ宝釵」を掘り出したとされる。

弘法大師伝以外では、榮然（一一七二～一二〇七）撰『師口』巻一で虚空蔵求聞持法に関する「口伝」として、

口伝云、此宝剣ハ高野大塔ノ地曳トテ曳出タル剣也。長七尺剣也。以此為三形秘事也、云云（大正七八、八四九頁上）

と、「宝剣」が高野大塔建立時に出土したとあるのが早い例として挙げられる。なお長さは五尺ではなく七尺と異なっている。

『溪嵐拾葉集』（十四世紀前）の「高野大塔建立事」でも、地底の石櫃の中にあった鉄箱から「五尺ノ釵」が出土したことが述べられている。

一、高野大塔建立事 師物語云、中比高野山ノ大塔修造ノ事有キ。其時此塔婆ノ地ヲ引ケルニ地底ニ石唐櫃ノ中ニ又鉄箱有リ。其中五尺ノ釵有リ。其ニ五蛇ヲ纏シメタリ。以此事ヲ一公家ニ經奏聞。其時以勅使ヲ一此釵被召ケリ。其夜帝王ニ有御感夢。密迹金剛力士等南殿庭上ニ充滿セリ。其ノ勅問アル処、彼密迹等申サク、我等ハ是高野ノ大塔ヲ守護也。有大師誓約ノ故我諸冥衆天等致擁護者也。若散在流布セハ佛法凌遲ナルヘシ。

とされていることである。⁽⁵⁾ 法釵は、金剛峯寺（高野山）の大塔との関係を強く意識し、過去七仏から空海に至るまで受け継がれてきた悟りそのものであり、それを描いた法釵図は弘法大師の作であった。このように『法釵図聞書』においては、『麗気記』と同じ図像を取り上げながら、全く異なる文脈での法釵解釈が展開されるのである。

三、密教神話の中の法釵

法釵図は、高野山金剛峯寺と空海と密接な関係があった。その論拠は弘法大師諸伝にあると考えられる。

康保五年（九六八）の成立とされる『金剛峯寺建立修行縁起』（以下『修行縁起』）には、夙に法釵出土の記事が認められる。そこでは、

重給_二官符_一。為_レ建_三立伽藍_一、截_二弘樹木_一之間、樹夾_二彼於_レ唐所_レ投三古_一儼然而有。弥増_二歆喜_一、則知、如_二地主山王告_一密教相応地也。墜_二夷地_一之処、地下堀_二出一宝釵_一。依_レ勅進覽。依_レ崇占_レ崇占部

(六)

卜推、當下今入_二銅筒_一返安_中置之_上。今案_レ之、外護大明神奉_レ惜耳、云云。（弘法大師伝全集一、五三頁下）

と、密教相応の地として寺を建立するため地面を曳きならしていると、地中から「一宝釵」が掘り出されたこと、その後天皇が観覧したが祟りがあつたため、占いの判断に従い、銅筒にいれて元の場所に安置されたことが語られる。占部は、祟りは高野山外護の大明神（高野明神または丹生明神）によるものと推測している。法釵出土の記述は、密教相応の地を定めた飛行三鈷の説話と、高野明神・丹生明神の護法善神説話に続けて配置されており、高野山の開山、金剛峯寺の建立と密接にリンクしていることがわかる。

『修行縁起』の段階では法釵出現の地を高野大塔とまで限定していないが、『弘法大師行状図画』（地藏院本。南北朝期写）の「三鈷宝剣事」に、

又大塔を立_ンがために地ヲひかれける時、ながさ五

義其深之意也可秘之」又云、每三世諸仏成道此法

釵從海中來（**ア**字五輪塔形五龍持寶二風中間釵形

「更間」自七仏「嫡持此法（七仏通誠法葉治方之貫

線經文）及予身十五代也（至十五日円満無碍之拳

并者不空成就之尺尊尺迦牟尼）欄右同銘六輪龍索

（五大五輪外加識大「者五名毘ルサナ法身。大即

六龍也。空輪之二龍可知）同欄双円形（即論文於

内心中觀日月輪是也）次上三重（三部之結成）上

三股（遍知院之三角形凡通心）釵中欄（火与欄同

訓私之）

法釵図の名称は、正確には「金剛峯寺大自在堅固根本

法釵図」という。金剛峯寺は真言宗の総本山である高野

山のことで、寸法は「長五尺」「広七寸」（全長一メー

ル五〇センチ、全幅二一センチ）とされる。外題に付け

られた注（「私案」）によれば、

外題法釵図御作 私案之、三世諸仏成道之時必感

此釵「唱正覚」。高野大塔曳地之砌出現此故也。大

師模写此法釵「仍云御作」歟

と、過去・現在・未来の三世において仏が成道する時には、必ずこの法釵を感得して悟りを得るという。また高野山の根本大塔を建立するために整地した際にも法釵が出現し、それを弘法大師が模写したのがこの図であるから「御作」というのかと推測している。

また後半の注（「私云」）によれば、法釵図には「梵篋」と「宝釵」があり、宝釵の三股の束には

仏法根本之首足。每三世諸仏成道、此法釵久從海中來。自七仏嫡持此方、及予第十五代也。

と銘が刻まれているという。銘によれば、法釵は仏法の本体であり、三世（過去・現在・未来）の諸仏が成仏すること、海中から出現するもので、過去七仏から嫡々と受け継がれ、予（弘法大師）で十五代目だという。

注目すべきは、天皇の王権の象徴たる三種神宝としての「宝剣」ではなく、仏の悟りの根本としての「法釵」

本聞書は、「法釵図」に私注を付したもので、題目と二つの私注を外すことでもととの法釵図を復元することができる。二つある私注のうち、前半の注（「私案云」）では法釵図の由来と外題に「御作」とある意味について、後半の注（「私云」）では宝剣に刻まれた銘についての注釈と図案の意味について述べられる。

法釵図聞書 法宝通音

外題法釵図 御作

〔私案之〕二三世諸仏成道之時必感此法釵一唱正覺一。

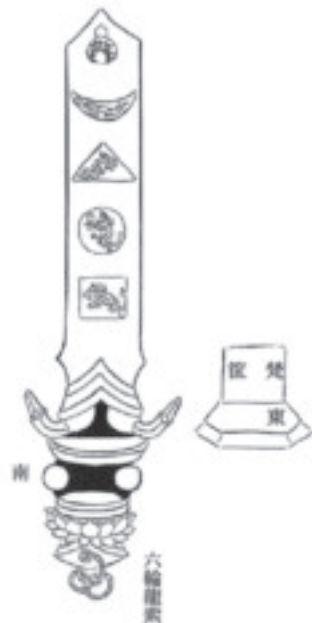
高野大塔曳地之砌出現此故也。

大師模写此法釵。仍云二御作一歟。

長五尺

金剛峯寺大自在堅固根本法釵図

広七寸



以就秘密奥壇内為堅固結界宝也。諸仏与予知是無人。

久成古仏処持塔釵仏法於鎮護眼精也。仏法根本之首足。每三世諸仏成道、此法釵久從海中来。自七仏一嫡持此方一、及予一第十五代也（御筆本在之）。

〔私云〕今就此図一有二。一梵筐（胎藏界義。東卜

注スル是也）。二宝釵（金界義。南者今暫寶珠義。

図之間為此也）。於中二三股欄卜銘之。仏法根本

之首足（頂上^五字之縫目最下足之通名是物後不二

図2、真福寺蔵『法釵図聞書』（真福寺蔵善本
叢刊、神道篇第2巻『麗気記』、法藏館、
二〇一九より転載）



そこで小稿では、法釵図を核として、高野山を中心とする新たな密教神話の構築について概観する。

二、『法釵図聞書』

『法釵図聞書』は、「法釵図」に私案・私注を加えた折紙である。聞書といっても伝来に関する記載はなく、講者や筆録者、講述の時期などは未詳である。管見の限り、真福寺本のほかに類書を見出すことはできないが、天保九年（一八三八）成立の『弘法大師年譜』に『法釵図聞書』が引用され、解説がなされていることから、法釵をめぐる秘説が、ある程度の広まりをもつて受け入れられていたことがわかる。

わずか一紙にすぎないが、法釵の概要が簡潔に纏められていることから、『法釵図聞書』の検討を通じて中世神道の文脈によらない「法釵図」解釈の要点を探りたい。

次に『法釵図聞書』の翻刻本文を示す（論述の都合上、一部追いつ込みで示した。裏書は必要に応じて論中で示す。句読点は私意。図は真福寺蔵善本叢刊から転載）。

的には他の言説が加わることはない。「法釵図」が本軌とする『麗気記』には次のように説かれている。

一柄三靈天叢雲劍者、從^一第六天自在天王^二受^三持^四之^五、三戟利劍。立劍三峯六蛇三握劍也。中有^六二六龍神^一。出^二生七種玉^一、破^三六道邪見^一、垂^二一子慈悲^一。握有^三二輪^一。大自在天両眼也。九葉蓮華得自性清浄法性如来、九界迷情形象也。自^二地大之空^一出^三二六蛇^一、含^二五尾^一成^三二六輪^一。留^二六道^一凡夫生死繚也。現^三二六波羅蜜^一。六輪光明則法身表徳也。天瓊杵王者、爰曰^二独股^一。大日本国心御量柱也。重如月横立者、薩羅沙・縛曰羅、文武二道、定慧横豎妙体、国中安寂吉瑞也。此三種神宝者、上三柱尊三昧耶妙体也⁽²⁾。

ここで挙げられる三種神宝のうち「一柄三靈天叢雲劍」が法釵に該当する。法釵は第六天自在天王から受けたもので、三つ又の戟をもつ利劍とされる。刀身には六龍神や大自在天の両眼である二輪、さらに供養蓮花が描かれ

(二)

る。東には尾に噛みついた蛇でできた六輪があるという。真福寺には、南北朝期の『麗気記』の写本や、三種神宝図(図1と同様)、神道灌頂儀礼にまつわる資料が所蔵される。三種神宝図は『麗気記』の成立と密接な関係があることが指摘されるが、その通り真福寺では、『麗気記』と、それを取り巻く図像や文物が重要視されていた。

また真福寺には、この「釵図」のほかに、その注釈書である『宝釵図注』『法釵図聞書』が所蔵される⁽³⁾。ともに南北朝期の成立と推測)。両書は、三種神宝図のうち主に「法釵」について解説したものである。『法釵図聞書』(54合・129号)では「法釵図」の周りに密教教理を用いた注釈が記されている(図2参照)。『法釵図聞書』の図像は、大分デフォルメされているが、蛇や五大などの宗教的なシンボルをもつ『麗気記』の神体図であることは明らかである。だが興味深いことに、『宝釵図注』『法釵図聞書』には『麗気記』やその類書からの引用は全く認められない。主に密教典籍や弘法大師伝にもとづく解釈がなされるなど「法釵」をめぐる、本軌たる『麗気記』とは異なる神話が展開されていることが窺える。

密教神話の成立と展開

——真福寺蔵『法釵図聞書』をめぐって——

鈴木英之

一、はじめに

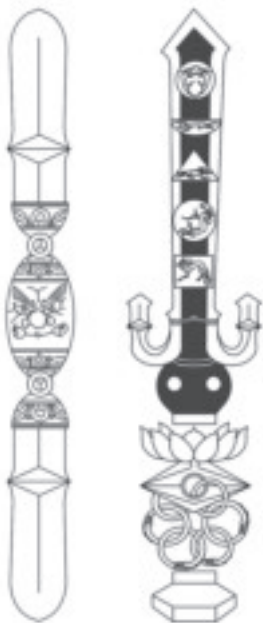
日本中世において、天皇の権威の象徴である三種の神器（剣・内侍所・神璽）は、本地垂迹説を背景とした密教的な解釈のもとに図像化された。いわゆる「三種神宝図」である（図1参照）。

特異な形状の「法剣（宝剣）」と「梵篋」（内侍所）、「鬼面独古」（神璽）から成る「三種神宝図」は、中世の両部神道書『麗気記』に収載される神道図像（「神体図」）のひとつだったが、本図は、神道灌頂という密教儀礼で本尊として用いられたことから、中世から近世にかけて幅広く流布した⁽¹⁾。全国に作例が多数のこされているが、真

福寺所蔵の『釵図』は、南北朝期の最初期の三種神宝図として注目されている。

密教図像は論拠となる儀軌に従い基本的な図案が定められている。それゆえ図像と儀軌との関連は深く、本来

図1、神道本尊（三種神宝図） 仁和寺本をもとに筆者作図



(1)